

調査報告Ⅱ

家庭、学校、地域社会の  
「協育」ネットワーク構築の推進に関する調査報告

～大分県における「学校支援地域本部事業」に係る意識調査から～

平成22年3月

大分大学高等教育開発センター

# ごあいさつ

大分大学高等教育開発センター  
センター長 西 村 善 博

大分大学高等教育開発センターは、大分大学の教育活動の発展・充実、高等教育・生涯学習に関する調査・研究・開発を推進する機関としての役割を担っており、県民の方々の生涯学習の支援につきましても、本学の持つ高等教育機能を發揮して効果的・効率的、先進的・モデル的な取り組みを推進しております。それによって、その成果を学内の教育活動に反映させるとともに、学内外の様々な機関等と連携・協力して地域の発展に寄与することなどを目指しています。

本報告書は、こうした地域の大学としての役割を担うために、昨年度に引き続いて、教育の協働の取り組みを推進している県内15地域の1年経過後の実態に関して調査研究を行った成果の一部でございます。

文部科学省は、「教育振興基本計画」の具現化のために、平成20年度から学校教育の充実を目的に、地域社会から学校を支援するシステムづくりのための「学校支援地域本部事業」を全国展開しています。本県においても16の市町村(56の地域本部を設置)において、地域住民が行う子どもの学習支援や学校の教育環境の整備などの支援を推進しており、こうした取り組みをとおして児童生徒の健全育成を図られるとともに、大人社会の再構築と地域社会の活性化、さらには生涯学習社会の形成に向けた取り組みとして今後の推進が期待されています。

本報告書は、こうした取り組みに直接関係している児童生徒、教職員、地域住民を対象にした意識調査を分析・考察したものであり、本報告書が活用されることによって、教育の協働の一層の推進に寄与することを願っています。

本調査研究に際して、本学の山崎清男教授（教育福祉科学部）および深尾誠教授（経済学部）に参画していただくとともに、県及び市町村教育委員会の多大なご協力をいただきて、ここにご報告する運びとなりました。関係各位に心からお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成22年3月

## 目 次

ページ

はじめに	1
<b>第1部 調査概要</b>	
<b>第1章 調査計画の概要</b>	2
<b>第2章 調査結果の概要</b>	4
<b>2.1 児童生徒の調査の結果</b>	4
2.1-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要	4
2.1-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果	4
<b>2.2 教職員の調査の結果</b>	
2.2-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要	5
2.2-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果	6
<b>2.3 地域住民の調査の結果</b>	
2.3-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要	8
2.3-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果	9
<b>第2部 調査データの分析</b>	
<b>第3章 児童生徒の調査の結果</b>	11
<b>3.1 単純集計結果</b>	11
3.1-1 児童生徒に関する基礎データ	11
3.1-2 子ども自身に関すること	12
3.1-3 学校に行く楽しさに関すること	14
3.1-4 学校で楽しいこと	15
3.1-5 学校での地域住民との交流・活動の経験に関すること	16
3.1-6 今後の地域住民からの学校支援に関すること	18
<b>3.2 クロス集計結果及び項目の相関</b>	19
3.2-1 「学校に行くことの楽しさ」のクロス結果	21
3.2-1-1 「誰とでも話をする」との関係	21
3.2-1-2 「学校のことについての家族との会話」との関係	22
3.2-1-3 「近所の人との挨拶」との関係	22
3.2-1-4 「学校へ行く楽しさ」と他の項目との関係	23
3.2-2 「学校支援（地域の人と交流・活動）の要望」のクロス結果	24
3.2-2-1 「毎朝、自分で起きる」との関係	24

3.2-2-2 「誰とでもよく話す」との関係	24
3.2-2-3 「学校のことについての家族との会話」との関係	25
3.2-2-4 「地域の人への挨拶」との関係	25
3.2-2-5 「地域の活動への参加状況」との関係	25
3.2-2-6 「学校へ行くことの楽しさ」との関係	26
3.2-2-7 「学校支援（地域の人との交流・活動）の経験」との関係	26
3.2-2-8 「学校支援の要望」と他の項目との関係	27
3.2-3 「クラブ・部活動」のクロス結果	28
 第4章 教職員の調査の結果	29
4.1 単純集計結果	29
4.1-1 教職員に関する基礎データ	29
4.1-2 家庭や地域に関すること	30
4.1-3 子どもに関すること	30
4.1-4 勤務校における学校支援に関すること	31
4.1-5 学校支援者の発掘・依頼方法に関すること	32
4.1-6 教科の授業への年間受入計画と1学期の実績に関すること	34
4.1-7 学校支援による期待される教育効果に関すること	34
4.1-8 支援して欲しい活動に関すること	35
4.1-9 学校支援の受け入れにおける課題に関すること	36
4.1-10 学校支援充実のための行政への要望に関すること	37
4.1-11 学校支援充実のための学校の取り組みに関すること	37
 4.2 クロス集計結果及び項目の相関	39
4.2-1 地域住民、家庭、子どもに関する意識のクロス結果	39
4.2-1-1 「学習意欲の低下」と「学校への家庭の協力状況」の関係	39
4.2-1-2 「道徳心や公共心の薄れ」と「学習意欲の低下」の関係	40
4.2-1-3 「道徳心や公共心の薄れ」と「学校への家庭の協力状況」の関係	40
4.2-2 学校支援に関するクロス結果	41
4.2-3 教科の学習への受入実績と受入計画のクロス結果	42
 第5章 地域住民の調査の結果	43
5.1 単純集計結果	43
5.1-1 地域住民に関する基礎データ	43
5.1-2 家庭や居住する地域に関すること	44
5.1-3 地域の子どもに関すること	44
5.1-4 地域住民の学校への意識に関すること	45
5.1-5 学校支援活動への参加経験に関すること	46
5.1-6 学校支援活動への参加理由に関すること	47

5.1-7 学校支援活動へ参加しての自分の変化に関すること	47
5.1-8 学校支援の必要性と今後の学校支援活動への参加意志に関すること	49
5.1-9 学校支援充実のための行政への要望に関すること	50
5.1-10 学校支援活動をするための学校の役割に関すること	51
<b>5. 2 クロス集計結果及び項目の相関</b>	<b>52</b>
5.2-1 相関係数から見た保護者と住民の傾向	52
5.2-2 相関係数から見た傾向	53
5.2-2-1 地域（大人）の状況	53
5.2-2-2 地域の子どもの状況	54
5.2-2-3 学校に関すること	55
5.2-2-4 学校支援活動後の自分の変化と学校支援に関するこ	56
5.2-2-5 学校支援に関する相関について	57
5.2-3 「地域の学校への関心」のクロス結果	57
5.2-3-1 「学校の情報の伝わり方」との関係	57
5.2-3-2 「学校支援の必要性」との関係	57
5.2-3-3 「今後の学校支援への参加意思」との関係	58
5.2-4 「今後の学校支援活動への参加意思」のクロス結果	59
5.2-4-1 「学校支援活動への参加経験の有無」との関係	59
5.2-4-2 「学校支援の必要性の有無」との関係	59
5.2-4-3 「学校支援活動に参加しての自分の変化」との関係	60

### 第3部 調査のまとめ

<b>第6章 「教育の協働」を推進する視点</b>	<b>61</b>
6. 1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の考察の概要	61
6. 2 今年（平成21年：1年経過後）の調査から見えてきたもの	63
1. 子どもの観点から見た考察	63
2. 教職員の観点から見た考察	63
3. 地域住民の観点から見た考察	64
<b>【調査資料】</b>	<b>66</b>
※児童生徒の集計結果	67
※教職員の集計結果	71
※地域住民（保護者）の集計結果	77

# 家庭、学校、地域社会の 「協育」ネットワーク構築の推進に関する調査報告

～大分県における「学校支援地域本部事業」に係る意識調査から～

## はじめに

家庭、学校、地域住民の連携・協力による青少年健全育成の取り組みの必要性が叫ばれて久しい。特に、家庭や地域の教育力の低下が指摘される中で、学校への過度の負担も問題となっている。言い換えれば、家庭や地域での生活をぬきに子どもの教育は考えられないということを、再度、大人自身が認識する必要性が明らかになっていると考えられる。

しかし社会が高度化・複雑化し、さらには利便化するに伴い、子どもの世界（教育）から「生活」が奪われていく現実は、子どもの成長発達にとってプラスに作用しないことは事実である。つまり地域の人々や集団との関わりをぬきにして、学校教育のみで子どもの成長発達は考えにくいといえよう。それゆえ、家庭や地域における人間的な関わりが希薄になっている今日、家庭、学校、地域住民が一体となって子どもに関わる重要性が声高々に呼ばれていると思われる。そこで家庭、学校、地域住民が協働して共通の土俵を創り、視点や方向性を同じくして子どもの教育を考えための場を提供することが要請される。子どもが精神的に自立し、自己を主体として形成していくためには、多くの人々や集団とのかかわりが必要なことは言うまでもない。

まさに、このことに対応するために、教育基本法第13条の規定をふまえ、家庭、学校、地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させることが推進されている。そこでは「地域ぐるみで学校を支援し、子どもたちをはぐくむ活動の推進」という施策のもとに、学校と地域との連携・協力体制を構築し、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的とした「学校支援地域本部事業」が昨年度から全国展開され、1年を経過した。

本報告書では、「学校支援地域本部事業」が1年を経過し、家庭、学校、地域社会の教育の協働の取り組みが、どんな成果を上げ、どんな課題が明らかになったのかを分析するために、学校支援地域本部事業を実施する地域の児童生徒、教職員、地域住民を対象にしたアンケート調査の結果を報告するものである。その中から、地域住民からの学校教育活動への支援（以下「学校支援」という。）のあり方や期待される効果、解決すべき課題及び支援する地域住民への効果について検討し、家庭、学校、地域社会の三者が効果的な協働を推進していく筋道を確立するための方策に関して、若干の示唆を提示することを試みることとした。

なお、調査対象校区が昨年と必ずしも同一でないために、学校支援による変化と判断することは出来ないが、昨年の調査との比較を行いつつ県内の傾向を考察することとした。

## 第1部 調査概要

### 第1章 調査計画の概要

学校支援地域本部事業を実施する市町村のうちの、15地域本部の児童生徒、教職員、地域住民を対象に行った。

#### (1) 調査対象者（表1を参照）

- ①児童生徒：5,635人（小学生3,162人 中学生2,473人）
- ②教職員：675人（小学校 228人 中学校 227人）
- ③地域住民：2,975人（保護者2,359人 保護者以外の住民616人）

#### (2) 調査方法

調査は大分県教育委員会を通し、当該市町村へ依頼し、調査票を配布・回収したが、次のような調査方法をとった。

- ①児童生徒に関しては当該市町村教育委員会が直接学校に依頼し学校が調査票を配布・回収した。
- ②保護者に関しては、児童生徒を通して学校が調査票を配布・回収した。
- ③地域住民に関しては、市町村によって依頼方法は異なるが以下の方法で配布・回収した。
  - 主として、公民館講座・学級の参加者を対象として当日配布・回収
  - 自治会や老人クラブ等へ配布を依頼し、記入後集約して、後日回収

その後、当該市町村教育委員会がアンケートを回収して大分県教育委員会に送付し、大分県教育委員会が一括して処理した。

#### (3) 調査期間

平成21年9月末から11月中旬

#### (4) 調査内容

##### 児童生徒への質問内容

- ①基本的な生活習慣や他者との関係に関する事（3項目）
- ②家族との関わりに関する事（2項目）
- ③地域との関わりに関する事（2項目）
- ④学校生活に関する事（2項目）
- ⑤学校での地域の人との交流・活動に関する事（5項目）

##### 教職員への質問内容

- ①家庭の教育力に関する事（1項目）
- ②子どもの現状認識に関する事（2項目）
- ③地域住民の子どもや学校への関わりに関する事（1項目）
- ④学校への地域からの支援に関する事（11項目）

## 地域住民への質問内容

- ①地域の教育力に関すること（4項目）
- ②家庭の教育力に関すること（1項目）
- ③子どもの現状認識に関すること（4項目）
- ④子ども・学校・地域の関わりに関するこ（2項目）
- ⑤学校への地域からの支援に関するこ（9項目）

**【表1 調査対象一覧表】**

事務所	番号	調査本部	学校数	児童・生徒	教職員	地域住民
中津	1	中津市の1中学校区ネットワーク会議	1中学校・1小学校	233	29	159
	2	豊後高田市の1校区学校支援地域本部	1中学校・2小学校	195	20	135
	3	宇佐市の1中学校区支援地域本部	1中学校・4小学校	542	64	162
別府	4	別府市の1小学校区ネットワーク会議	1小学校	298	26	163
	5	杵築市の1中学校区支援地域本部	2中学校・7小学校	1258	104	960
	6	国東市の1学校支援地域本部	1中学校・2小学校	350	45	98
	7	姫島村の1学校支援地域本部	1中学校・1小学校	139	24	114
	8	日出町の1学校支援地域本部	1中学校・1小学校	247	26	90
大分	9	津久見市の1中学校支援地域本部	1中学校・2小学校	384	36	261
	10	由布市の1中学校区ネットワーク会議	1中学校・7小学校	442	66	117
佐伯	11	佐伯市の1校区ネットワーク会議	1中学校・1小学校	337	26	154
竹田	12	竹田市の1中学校支援地域本部	1中学校・3小学校	343	46	207
日田	13	日田市の1中学校区学校支援地域本部	1中学校・2小学校	126	30	131
	14	九重町の1学校支援地域本部	4中学校・6小学校	626	101	99
	15	玖珠町の1中学校区支援地域本部	1中学校・1小学校	106	22	125
			計	5,635	675	2,975

## 第2章 調査結果の概要

### 2.1 児童生徒の調査の結果

#### 2.1-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要

##### 1. 日常生活とその相関

「基本的な生活習慣等」と「家族との関係」及び「地域との関係」の部分が集中して相関が高いことから、子どもの「基本的な生活習慣」、「他者とのコミュニケーション」、「家族や地域での生活体験」が連動して成長しているのではないかと推測できる。また、「小中学校間」「学年間」では多くの項目において、いわゆる「きちんとできる」という傾向については小学生ほど「あてはまる」、中学生ほど「あてはまらない」という傾向がある。

##### 2. 地域での関わりとその相関

「地域行事への参加」、「地域行事への参加意思」、「地域の人への挨拶」等の他者との関わりについて有意な相関があり、小学生ほど地域との関わりが強い。

##### 3. 「学校に行くことの楽しさ」との相関

「学校に行くのがあまり楽しくない」「全く楽しくない」という否定的回答を合わせると22.0%にもおよぶことや、「学校へ行くことの楽しさ」は「他人や家族との会話」「近所の人への挨拶」「地域活動への参加」など、多くの項目との有意な相関が見られる。

##### 4. 「地域住民の学校支援のニーズ」との相関

小学校又は中学校への入学後に、「学校で地域住民との交流・活動や学習指導の支援等を経験した」と回答した子どもは74.1%であり（小学生：82.4%、中学生：66.3%）、今後の地域の大人からの支援についてのニーズについては「して欲しい」が62.0%（小学生：70.2%・中学生：52.3%）、「して欲しくない」が37.9%である。この2項目の間に「学校支援の経験が多い」ほど「今後も地域の人との交流や活動をしたい」(.253\*\*)と考えているという有意な相関がある。また、「地域住民の学校支援のニーズ」については、「家族との会話」「家の手伝い」「近所の人への挨拶」「地域活動への参加」「学校に行くことの楽しさ」など、多くの項目と有意な相関がある。さらに、内容別の「今後して欲しい支援」と「学校支援の経験」には有意な相関があるものが多いこともわかった。

#### 2.1-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果

##### 1. 「子ども自身に関すること」の概要

「家庭での生活に関すること」「他人との関わりに関すること」「家族との関わりに関すること」及び「地域との関わりに関すること」においては集中して相関が高いこと

は昨年の調査と全く同じである。調査対象地域が変わっても同じ傾向であることは、全県的な傾向と判断できる。

## 2. 「学校に関すること」の概要

「学校に行くのが楽しい」が 78.9%で昨年の調査とほぼ同じである。また、学年別にみると小学校 5 年生が「楽しい」が少ない。その他の特徴は見られなく、昨年の調査と全く同じ傾向である。「学校での楽しいこと」は「休み時間に友達と遊ぶ」など、昨年の調査と全く同じ傾向であるが、小中学校を比較すると、小学校で高いのは「音楽等の教科」と「遠足等の学校行事」である。中学校は「休み時間にみんなと遊ぶ」と「クラブ・部活動」が多くなっている。

「学校へ行くことの楽しさ」のクロスをみると、「家庭での生活に関すること」「他人との関わりに関すること」「家族との関わりに関すること」及び「地域との関わりに関すること」の多くに、高い有意な相関がみられる。

## 3. 「学校支援活動に関するここと」の概要

「学校支援活動の経験がある」は 66.7%で、小学校は 85.0%、中学校では 53.1%となっている。内容としては「総合的な学習の時間」や「読み聞かせ」等が多くなっており、経験したことで「良かった交流・活動」については割合が若干下がるもの、すべての項目で肯定的である。また、小中学校を比較してみると、活動内容や「良かった交流・活動」の感じ方に違いが見られる。今後の学校支援について「交流・活動したい」が 53.5%で、小中学校の比較では、小学校の方が 20.1%多くなっている。

「今後の学校支援の要望」のクロスをみると、「学校支援の経験」と同様の傾向がみられ、「家庭での生活」「他人との関わり」「家族との関わり」「地域との関わり」及び「学校へ行く楽しさ」等に、高い有意な相関がみられる。特に、「学校支援の経験」とには .415\*\* という高い有意な相関がみられる。

「クラブ・部活動」については、経験においても、今後の要望においても、全ての項目において他の項目と逆のマイナスの有意な相関があることがわかった。

## 2.2 教職員の調査の結果

### 2.2-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要

#### 1. 家庭に関する意識

「家庭の教育力の低下」については、74.6%の教職員が「家庭の教育力が低下していると思う」と回答している（地域住民：47.4%）。また、「学校へ協力的でない家庭の増加」については 39.2%が「そう思う」と回答している（地域住民：37.1%）。

#### 2. 子どもに関する意識

「学習意欲の低下」については 40.7%、「道徳心・公共心の薄れ」は 68.6%の教職員が

「低下している」と回答している。「学習意欲の低下」については小学校と中学校で逆転している。

### 3. 地域住民と子ども・学校との繋がりに関する意識

学校支援の取り組みや、学校や子どもと地域住民との関わりについては90%程度の教職員が肯定的である。地域住民のボランティア活動の受け入れについても80%程度が「受け入れている」と回答しているが、その頻度や内容には大きな差があると考えられる。

### 4. 学校教育への地域住民の支援活動に関する意識

学校教育への地域住民の支援活動の必要性については89.6%の教職員が「必要である」と回答しており、小学校の方が若干多い。また、その効果としては、子どもについては、「学校内活動への関心・意欲・態度の向上」に期待(40.2%)しており、「授業における理解力・集中力の向上」への期待は5.7%と少ない。また、学校運営への期待は、「学校全体としての地域住民との協力・連携」(64.2%)、「学校環境の整備」(35.8%)への期待が多い。

### 5. 学校支援の受入の課題と充実方策

「学校支援が必要ない」という考え方については、「学校の内部情報の保守」(37.3%)、「教職員の仕事量の増加」(36.6%)、「事故責任の所在が不明」(35.8%)、「予算の確保」(31.1%)を大きな課題として捉えていることがわかった。

学校支援を充実する方策としては、行政に対しては「予算の確保」(75.7%)、「コーディネーターの配置」(34.2%)を望む声が多く、学校としては「して欲しい情報」(64.2%)や「学校支援活動状況の情報」(28.5%)などを地域へ発信していくことを上げている。

### 6. 「子どもの学習意欲の低下」との相関

「子どもの学習意欲の低下」については、「家庭の教育力の低下」や「学校に協力的でない家庭」、「子どもの道徳心・公共心の薄れ」と有意な相関がある。

### 7. 「勤務校における学校支援の必要性」との相関

「勤務校における学校支援の必要性」については、「地域の子どもに大人が関わる必要性」や「学校の情報発信」、「地域住民の学校へ協力」、「学校支援の受け入れ状況」などと有意な相関があるが、「期待される効果」との相関は見られない。

## 2.2-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果

### 1. 「家庭や地域に関すること」の概要

「学校に協力的でない家庭が多いと思う」は37.9%で昨年の調査とほぼ同じであるが、「地域の子どもに、地域の大人が積極的に関わる必要があると思う」の回答は98.4%と非常に高くなっている。

## 2. 「子どもに関すること」の概要

「道徳心や公共心の薄れ」は 71.9%、「学習意欲の低下」は 49.7%となっており、昨年の調査とほぼ同じである。また、小中学校を比較すると、「道徳心や公共心の薄れ」については差はないが、「学習意欲の低下」については、中学校の教職員ほど高くなっていることでも昨年の調査とほぼ同じである。

また、「道徳心や公共心の薄れ」「学習意欲の低下」と「学校への家庭の協力の低下」には有意な相関がある。

## 3. 「学校支援に関するここと」の概要

「勤務する学校へ支援が必要である」は 80.6%で、昨年の調査より 9.0%下がっているが、実際の受入状況は 79.1%となっている。受入状況を小中学校別にみると、小学校では 88.6%、中学校では 59.2%で、小学校の方が多くなっており、支援して欲しい活動なども含めて、昨年の調査と同じ傾向である。学習活動への受入についてはゲストティーチャーはあるものの、学習サポーターとしての受入や計画的・継続的な受入は少ない。

また、「学校支援の必要性」「学校支援の受入状況」や期待される効果については、他の多くの項目と有意な相関がみられる。

## 4. 「学校支援者の発掘・依頼に関するここと」の概要

学校支援ボランティアの発掘・依頼をしているのは教職員が圧倒的に多いが、一部では、配置されたコーディネーターに依頼しているという傾向も見られる。このことは地域性があり、コーディネーターの配置数とも関係していると考えられる。また、受入計画を立てている教職員ほど受入の実績があることもみえてきた。

## 5. 「学校支援に期待する効果に関するここと」の概要

昨年の調査と比較して、「校内活動への関心・意欲・態度の向上」が 65.1%（昨年：40.2%）、「授業における理解力・集中力の向上」が 33.9%（昨年：5.7%）と高くなっている。特に、学習活動へ積極的に受け入れている小学校においては顕著に表れている。

また、「学校支援が必要である」と回答した教職員は、「必要ない」と回答した教職員に比べて、期待される効果としての「学校内の活動への意欲等の向上」と「教科学習の理解度等の向上」に大きな差がみられた。

## 6. 「学校支援助の課題と充実方策に関するここと」の概要

「学校支援が必要ない」という考え方については、「教職員の仕事量の増加」（42.2%）、「学校の内部情報の保守」（37.9%）、「事故責任の所在が不明」（27.7%）、「予算の確保」（25.2%）を大きな課題として捉えており、昨年の調査と同じ傾向である。データの分析の中で、多忙化とコーディネーターの活用には大きな関係があることがみえてきた。

学校支援を充実する方策としては、行政に対しては「予算の確保」（70.5%）、「コーディネーターの配置」（35.8%）を望む声が多く、学校としては「して欲しい情報の発信」（68.0%）、や「地域の機関等との連携」（31.9%）、「学校支援活動の情報提供」（22.5%）などがあげられている。

## 2.3 地域住民の調査の結果

### 2.3-1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の調査結果の概要

#### 1. 居住する地域に関する意識

「地域の教育力の低下」については、地域住民の 47.9%が「低下している」、「地域の安全」については 37.0%が「安全でなくなった」と回答するなど半数以下であるが、地域の大人口の関係や子どもへの関わりの現状については約 70%が肯定的である。

#### 2. 家庭に関する意識

「学校に協力的でない家庭」については、地域住民の 37.1%が「多い」と回答している。「家庭の教育力の低下」では 47.4%が「低下している」と回答している。

#### 3. 地域の子どもに関する意識

「学習意欲の低下」については、地域住民の 41.8%が「低下した」（教職員:40.7%）、「道徳心・公共心の薄れ」は 66.1%が「薄れている」（教職員:68.6%）と回答しており、教職員とほぼ同じである。

#### 4. 学校教育への支援活動に関する意識

「子どもへの関わりが必要である」、「学校への関心がある」、「学校の情報が伝わる」などが 70%以上、これまでに学校支援活動をした経験があるが 50.9%である。

学校支援活動に参加する理由は、「子どもが通学している」(32.8%)、「学校への協力」(20.2%) 等である。「自分の変化」については、「学校や子どもの様子がわかった」(52.6%) や「子どもへの関心が高まった」(34.7%) などとなっている。また、「人と知り合う機会が増えた」(43.7%) や「地域のために活動したくなった」(11.0%) など、自分自身への効果も見られる。今後の学校支援活動については「参加したい」が 61.3%である。

#### 5. 「子どもの学習意欲の低下」との相関

「子どもの学習意欲の低下」については、教職員と同様に「地域の教育力の低下」や「家庭の教育力の低下」、「子どもの道徳心・公共心の薄れ」、「学校への家庭の協力状況」とに有意な相関があり、特に、「地域の教育力の低下」(.401\*\*),「家庭の教育力の低下」(.352\*\*) には高い有意な相関がある。

#### 6. 「地域の学校への関心」「地域の子どもに大人が関わる必要性」との相関

「地域の学校への関心」については、「地域の子どもに大人が関わる必要性」(.429\*\*),「今後の学校支援活動への参加意思」(.390\*\*),「学校の情報の伝わり方」(.399\*\*) には高い有意な相関がある。

「地域の子どもに大人が関わる必要性」については、特に、「地域の学校への関心」(前述) や「今後の学校支援活動への参加意思」(後述) とは高い有意な相関がある。

## 7. 「学校支援活動への参加経験の有無」「今後の学校支援活動への参加意思」との相関

「学校支援活動への参加経験の有無」については、「今後の学校支援活動への参加意思」 (.344\*\*) と高い有意な相関がある。

「今後の学校支援活動への参加意思」については、特に、「地域の学校への関心」 (.390\*\*) 「地域の子どもに大人が関わる必要性」 (.382\*\*) 、「学校支援活動の経験の有無」 (.344\*\*) と高い有意な相関ある。

### 2.3-2 今回（平成21年：1年経過後）の調査結果

#### 1. 「家庭や居住する地域に関するここと」の概要

「学校に協力的でない家庭」については、地域住民の 44.3%が「多い」と回答しており、昨年の調査より若干多くなっている。「大人同士の関わり」「子どもへの関わり」については約 50%が肯定的であるが、昨年の調査と比べると 20%程度少なくなっている。

#### 2. 「地域の子どもに関するここと」の概要

「子どもの道徳心や公共心が薄れている」が 65.7%、「子どもたちの学習意欲が低下している」が 67.2%となっており、特に、学習意欲の低下が昨年の調査に比べて 25%ほど多くなっている。子どもの地域への関わりについては、「挨拶等をする」が 46.1%、「地域の活動に参加する」が 45.7%となっている。

#### 3. 「学校への意識に関するここと」の概要

「学校の行事などの情報が伝わってくる」が 71.2%、「学校に関心がある」が 83.7%となっている。また、学校からの情報は、住民には伝わりにくいくことや、学校への関心は、保護者の 85.4%に対して、住民も 76.4%あることがわかった。

#### 4. 「これまでの学校支援に関するここと」の概要

「今まで、学校に対するボランティア活動への参加経験がある」は、58.3%である。また、答者のうち、保護者は 61.7%、住民では 58.5%となっており、住民は昨年の調査より多くなっている。

参加した活動は「安全パトロール」が最も多く、次いで「環境整備」、「読み聞かせや図書活動」、「クラブ・部活動指導」の順になっている。

学校支援の参加理由は「保護者の立場から」が最も多く、「学校の教育活動に協力したい」、「学校での子どもの様子を知りたい」、「地域のためになる」の順になっている。

自分の変化については「学校や子どもの様子がわかってきた」が最も多く、次いで、「人と知り合う機会が増えた」、「子どもへの関心が高まった」、「周囲の人と学校の話題を話すようになった」の順になっている。

#### 5. 「今後の学校支援に関するここと」の概要

学校支援が「必要と思う」が 80.5%あり、住民では 86.2%、保護者は 79.6%となっており、住民も子どもへの関心が高く、多くの地域住民が学校支援の必要性を感じている。

「今後、学校支援の活動に参加したいと思う」が 68.7%となっており、「学校支援の必要があると思う」の 80.5%と比較すると少なくなっているが、住民では 66.8%、保護者は 69.3%が「参加したい」と回答している。

今後参加したい（してもいい）活動として最も多いのが「安全パトロール」で、次いで「環境整備」、「読み聞かせ・図書活動」の順になっている。また、教職員が要望する支援活動で最も多かった「総合学習等でのゲストティーチャー」（教職員：59.3%）は、今回も 5.3%と少なくなっている。

## 6. 「学校支援充実の方策に関すること」の概要

学校支援充実のために行政への要望は、「活動に必要な予算の確保」、「地域住民への啓発・広報」、「コーディネーターの配置」の順になっている。この中で地域住民と教職員の意識の差が大きい「予算の確保」については、教職員は「謝金」、地域住民は「原材料費等の必要経費」ということが聞き取り調査でわかっている

学校がすることとして「学校がして欲しい活動を情報発信する」が最も多く、「教職員（学校）と地域住民の交流機会をつくること」、「学校での支援活動の状況を情報発信する」など、日常からの情報提供や教職員との交流を望んでいることがわかる。

## 7. 「相関係数から見えてくるもの」の概要

(1) 保護者と住民の相違については「安全パトロール」は保護者ほど参加している。また、参加理由の「地域のためになる」「自分の知識・技能を生かしたい」「自分の生きがいになる」、さらに、参加しての自分の変化として「生活に張りが出てきた」は、住民ほどそう思っている（感じている）が、その他の項目には保護者と住民に有意な相関はあるものの高い傾向とは言えない。また、「学校支援の必要性」と「今後の学校支援活動への参加意思」については、保護者と住民の相違は見られない。

(2) 学校支援に関する「学校への関心」「学校の情報の伝達」「学校支援の必要性」「今後の学校支援への参加意思」には、相互にかなり高い有意な相関がある。

## 8. 「地域の学校への関心に関する相関」の概要

「地域の学校へ関心がある」と回答した人ほど、「学校の情報が伝わってくる」、「学校支援の必要性がある」、「今後、学校支援活動へ参加したい」と思っているという傾向がある。

## 9. 「今後の学校支援活動への参加意思に関する相関」の概要

「今後、学校支援活動へ参加したいと思う」と回答した人ほど「学校支援活動の参加経験がある」、「学校支援の必要があると思っている」という傾向があるとともに、これまでに学校支援活動に参加して、自分の変化を感じているということがわかった。

## 第2部 調査データの分析

回答には、2択の項目と4択の項目があり、記述に際して、全体の構成上、4択の項目については「とてもあてはまる（とてもそう思う）」と「まああてはまる（そう思う）」を「あてはまる（思う）」、「あまりあてはまらない（あまりそう思わない）」と「全くあてはまらない（全くそう思わない）」を「あてはまらない（思わない）」として記述する箇所もある。また、表記においては、設問に対する回答としてわかりやすくするために「出きる」や「食べる」、「起きる」等の記述とする箇所もある。

また、昨年に調査した15本部の中で今年も調査対象となったのは7本部であり、全体としては、昨年の調査の1年後のデータとはなっていない。

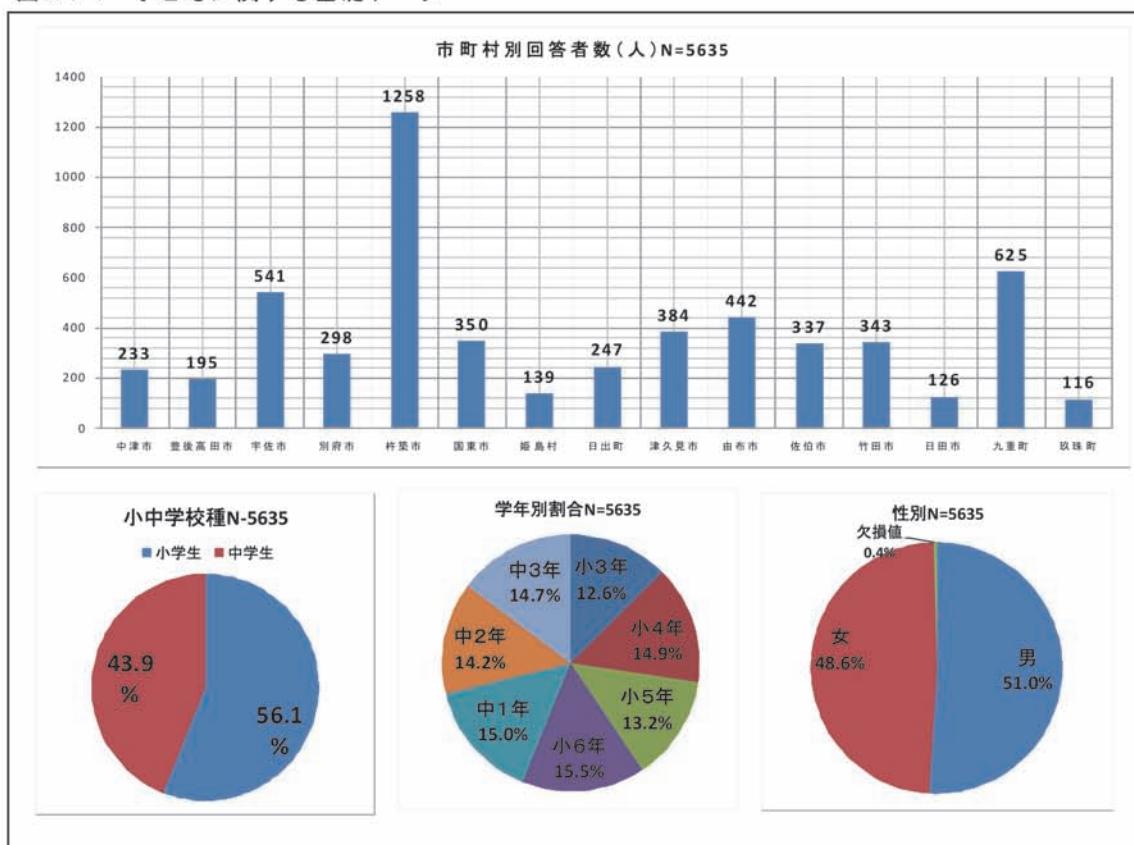
## 第3章 児童生徒の調査の結果

### 3.1 単純集計結果

#### 3.1-1 児童生徒に関する基礎データ

表1の調査対象一覧表により調査したものを、基礎データとして市町村別、小中学校種別、学年別、性別に示したものが図3.1-1である。学校支援地域本部の規模によって、市町村別のデータ数が異なっている。

図3.1-1 子どもに関する基礎データ



### 3.1-2 子ども自身に関すること

図3.1-2-1は、子ども自身の家庭生活（「自分で起きる」「決まった時間に寝る」）や、他人との関わり（「誰とでも話す」）、家族との関わり（「学校の出来事を家族と話す」「家の手伝いをする」）、地域との関わり（「地域の活動や行事に参加する」「地域の人に挨拶する」）に関する状況を示したものである。図3.1-2-2は、参考として昨年の調査結果を示したものであるが、すべての項目において非常に近い割合を示していることから、県内のすべての児童生徒の傾向であろうと推測できる。

図3.1-2-1 子ども自身に関すること (N=小学生:3162. 中学生:2473)

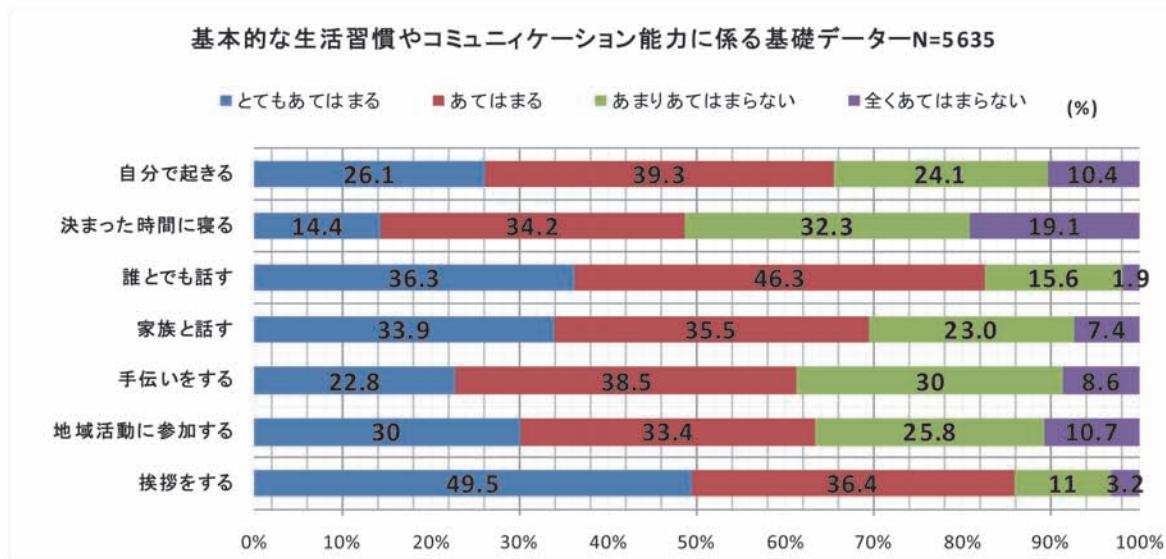
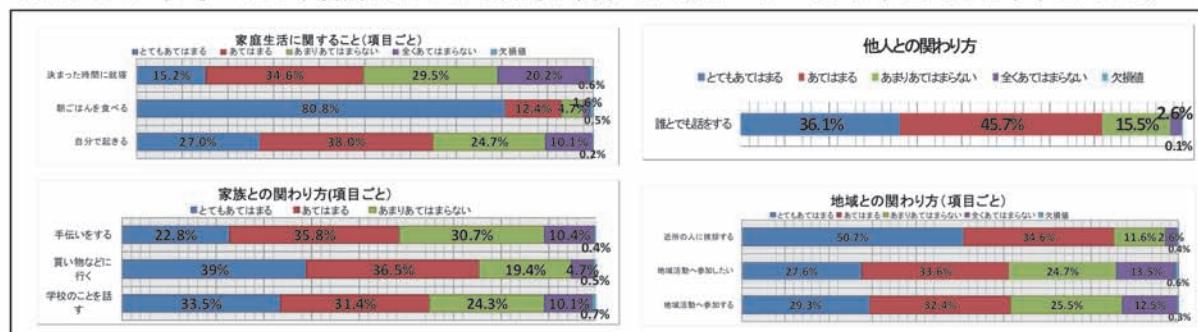


図3.1-2-2 参考 \* H20年度調査の子ども自身に関する基礎データー (N=小学生:1591. 中学生:1295)

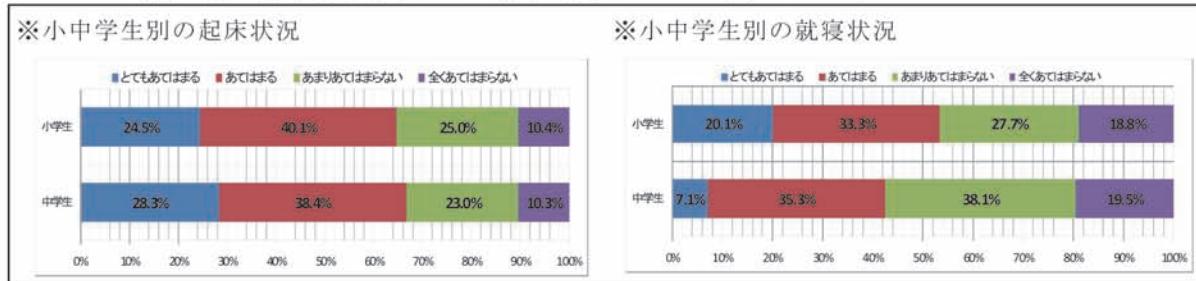


#### (1) 家庭生活に関するこ

図3.1-2-1において、家庭生活に関するこでは、「自分で起きますか」については、「起きる」が65.4%、「起きない」が34.5%となっている。「夜は、決まった時間に寝ますか」については、「寝る」が48.6%、「寝ない」が51.4%となっている。

図3.1-2-3は小中学生別の状況を示したものであり、起床には大きな差はないが、就寝に関しては中学生ほど出来ていないことがわかる。

図3.1-2-3 家庭生活に関する小中学生の比較(N=小学生:3162. 中学生:2473)



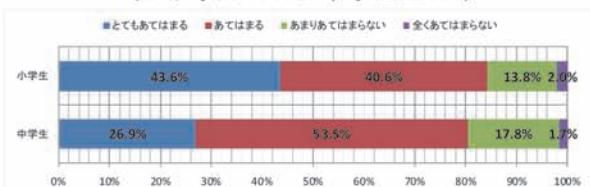
## (2) 他人との関わりに関すること

図3.1-2-1 の他人との関わりについては、「誰とでも話をよくしますか」は、「する」が 82.6%、「しない」が 17.5%である。

図3.1-2-4 は小中学生別の状況を示したものであり、中学生になると「誰とでも話す」が減少しているものの、その差は少なく、他人との関わりは小中学生ともに良い傾向であることがわかる。

図3.1-2-4 他人との関わりに関する小中学生の比較

(N=小学生:3162. 中学生:2473)

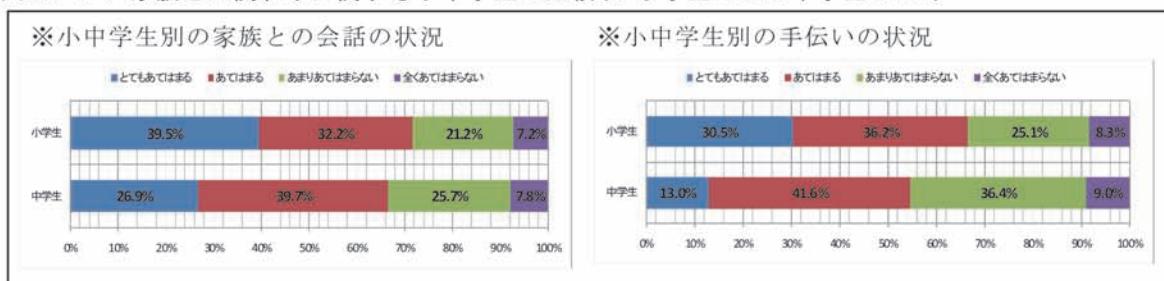


## (3) 家族との関わりに関すること

図3.1-2-1において、「学校の出来ごとについて家族と話しますか」では「話す」が 69.4%、「話さない」が 30.4%となっている。「家の手伝いをしますか」については、「手伝いをする」が 61.3%、「手伝をしない」が 38.6%となっている。

図3.1-2-5 は小中学生別の状況を示したものであり、会話や手伝いなどの家族との関わりは、中学生になると徐々に減ってくることがわかる。

図3.1-2-5 家族との関わりに関する小中学生の比較(N=小学生:3162. 中学生:2473)

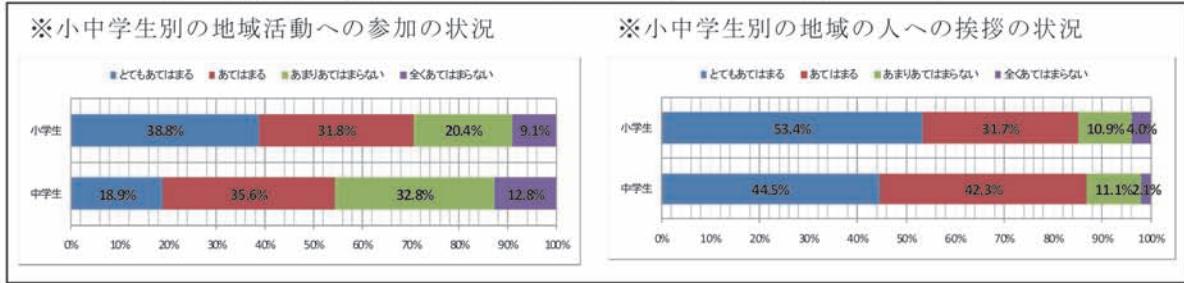


## (4) 地域との関わりに関すること

図3.1-2-1において、「地域活動に参加しますか」については「参加する」が 63.4%、「参加しない」が 36.5%となっている。「近所の人に挨拶をしますか」については、「挨拶をする」が 85.9%、「挨拶をしない」が 14.2%となっている。

図3.1-2-6 は小中学生別の状況を示したものであり、地域行事への参加は小学生が多くなっているが、地域の人たちへの挨拶については中学生の方が若干多くなっている。昨年の調査においても「挨拶」に関する項目は小中学生の違いはほとんどなかった。

図3.1-2-6 地域との関わりに関する小中学生の比較 (N=小学生:3162. 中学生:2473)

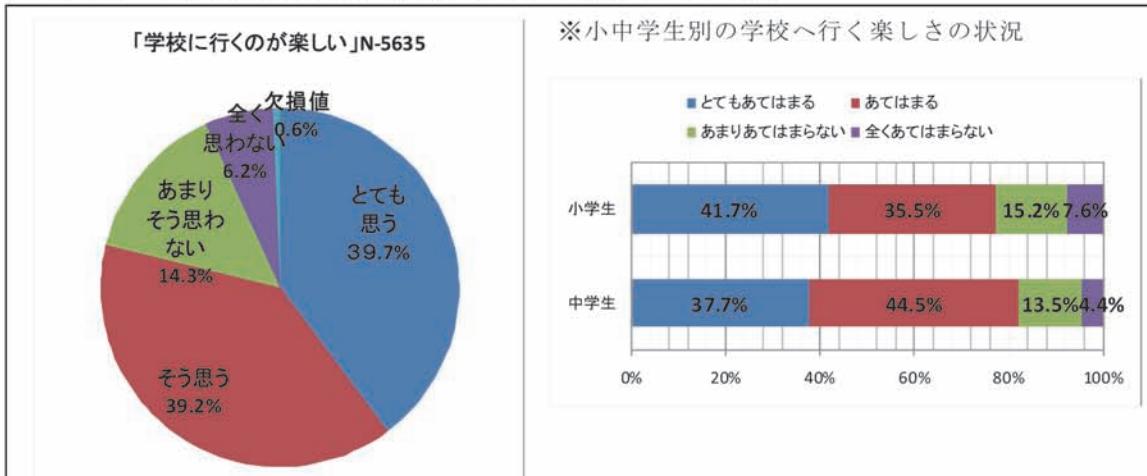


### 3.1-3 学校に行く楽しさに関すること

図3.1-3-1は、子どもたちが学校へ行くことの楽しさに関する状況を示したものである。さらに文章中の（ ）内は、昨年の状況を示している。

「学校に行くのが楽しいですか」については、「楽しい」が78.9%(77.8%)であるが、「楽しくない」が20.5%(22.0%)であることに留意する必要がある。「楽しい」は、昨年と同様に中学生のほうが若干多くなっている。

図3.1-3-1 学校に行く楽しさの状況 (N=小学生:3162. 中学生:2473)



#### 【参考資料：H20年度調査の状況】

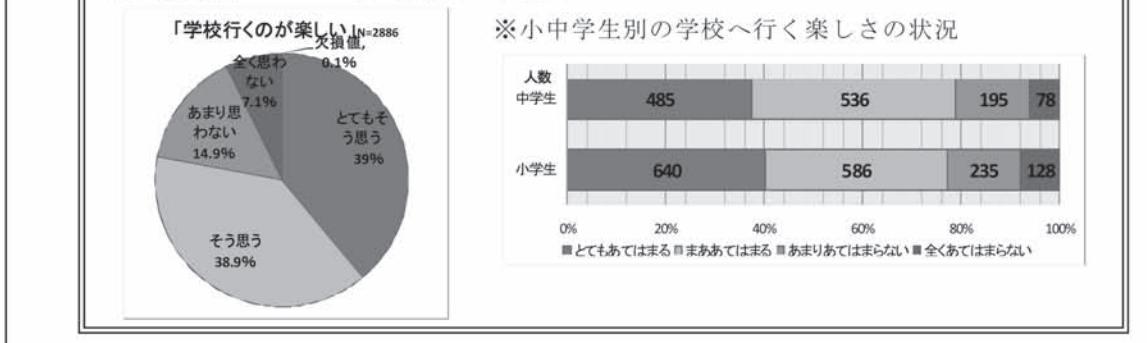
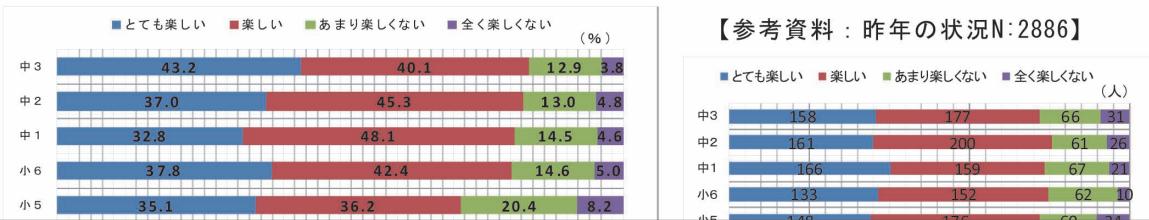


図3.1-3-2は、学年別の「学校へ行く楽しさ」を示したものであり、参考資料として昨年の状況を提示している。子どもは1年進級しているために学年としての特徴はどうか

がえないが、現小学校5年生は4年生当時から「楽しくない」が多いことがわかる。

図3.1-3-2 学校に行く楽しさの学年別の状況(N=小学生:3162. 中学生:2473)



### 3.1-5 学校での地域住民との交流・活動の経験に関すること

図 3.1-5-1 は、子どもたちが学校で地域の人たちと交流・活動をすることや、学習への指導を受けた経験に関する状況を示したものである。さらに文章中の（ ）内は、昨年（2018年）の状況を示している。

「小学生（中学生）になって、先生以外の人に学校で勉強やクラブ活動・部活動などを教えてもらったり、一緒に活動したりしたことがありますか」については、「ある」が 66.9%（74.0%）、「ない」が 26.7%（24.5%）である。

小中学生別にみると、地域の人たちとの交流や活動の経験があるのは小学生が 85.0%、中学生が 53.1%で小学生の方が 30%以上多くなっており、小学校の方が様々な学習活動において地域の人たちからの学習・活動支援や交流活動を行っていることがわかる。特に、中学校では 46.7%が「経験がない」と回答しており、学習・交流活動を受け入れる教職員の意識改革が必要ではないだろうか。

図3.1-5-1 学校での地域の人との交流・活動等の経験の有無 (N=小学生:3162 中学生:2473)

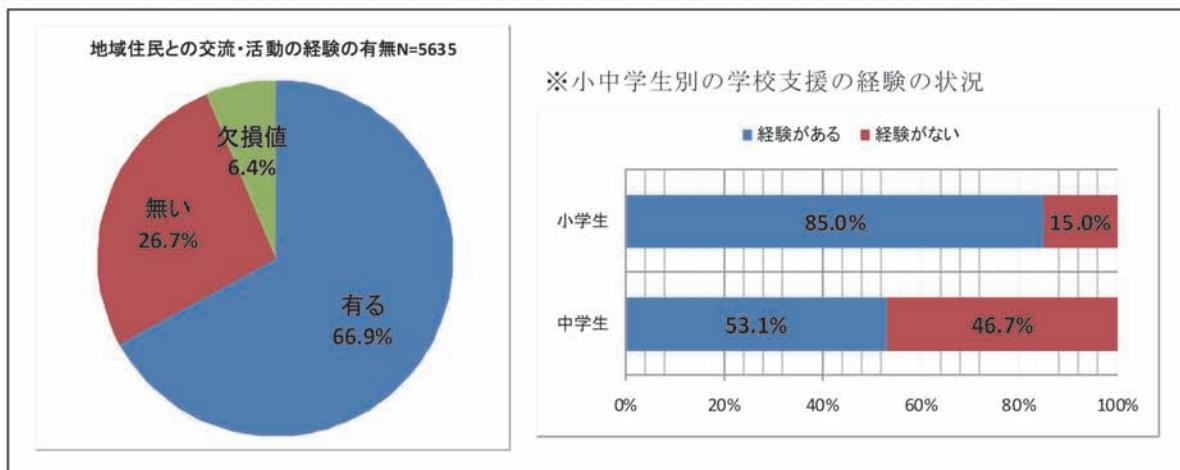


図 3.1-5-2 は、経験した内容と良かった活動について示したものである。最も多いために「総合的な学習の時間等」で 32.3%が経験し、さらに 26.6%が「良かった」と回答している。続いて「読み聞かせ・図書館活動」（29.7%・22.1%）、「運動会等の行事」（26.9%・20.9%）、「クラブ・部活動」（22.4%・20.5%）となっている。「教科学習」においても支援を受けていることがわかる。

図3.1-5-2 地域住民との交流・活動の経験内容と良かった活動に関する状況 (N=3761)

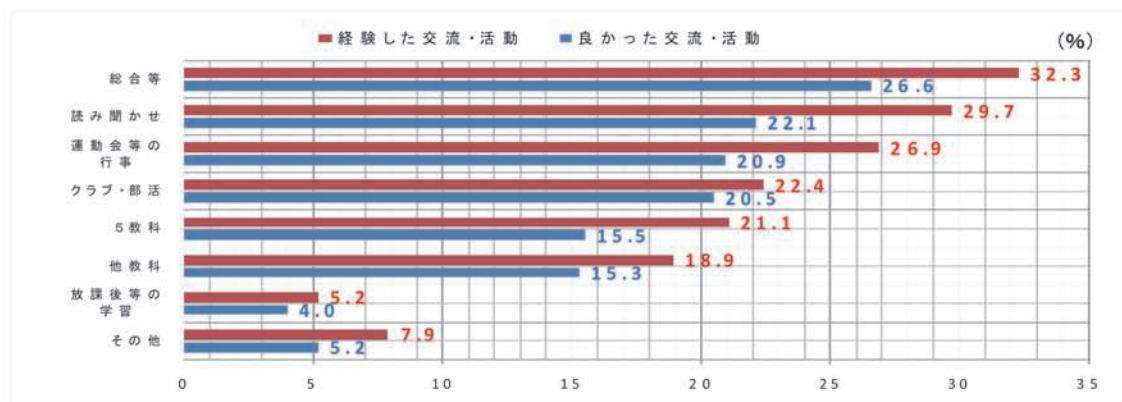


図3.1-5-3は、活動内容の小中学生の比較を示したものである。小学生は「総合的な学習の時間等」(61.0%)、「読み聞かせ・図書館活動」(60.0%)、「運動会等の行事」(49.3%)、「5教科の授業」(40.4%)、「他の教科の授業」(36.3%)が多いのに対して、中学生では「クラブ・部活動」が69.0%と特出して多く、他は、小学生と比較して非常に少なくなっている。

図3.1-5-3 地域住民との交流・活動の経験内容の小中学生の比較(N=3761)

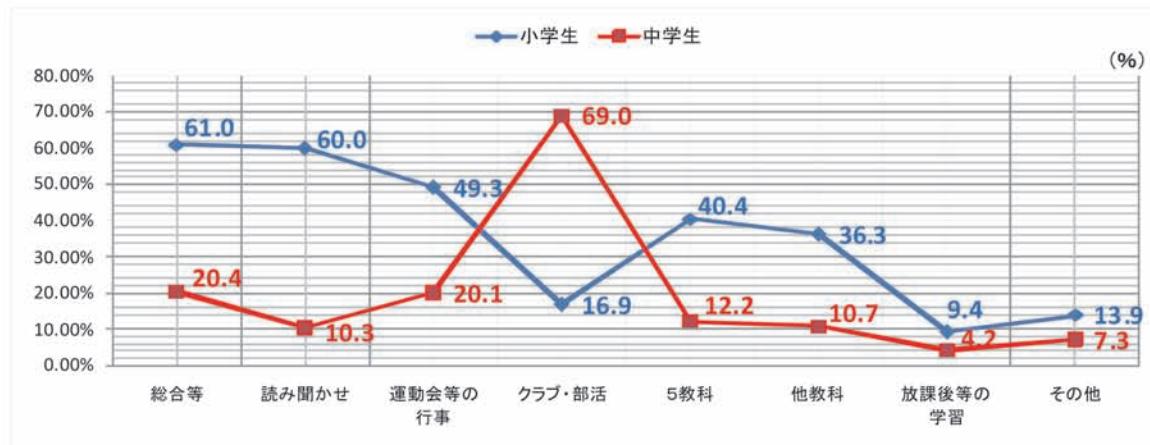
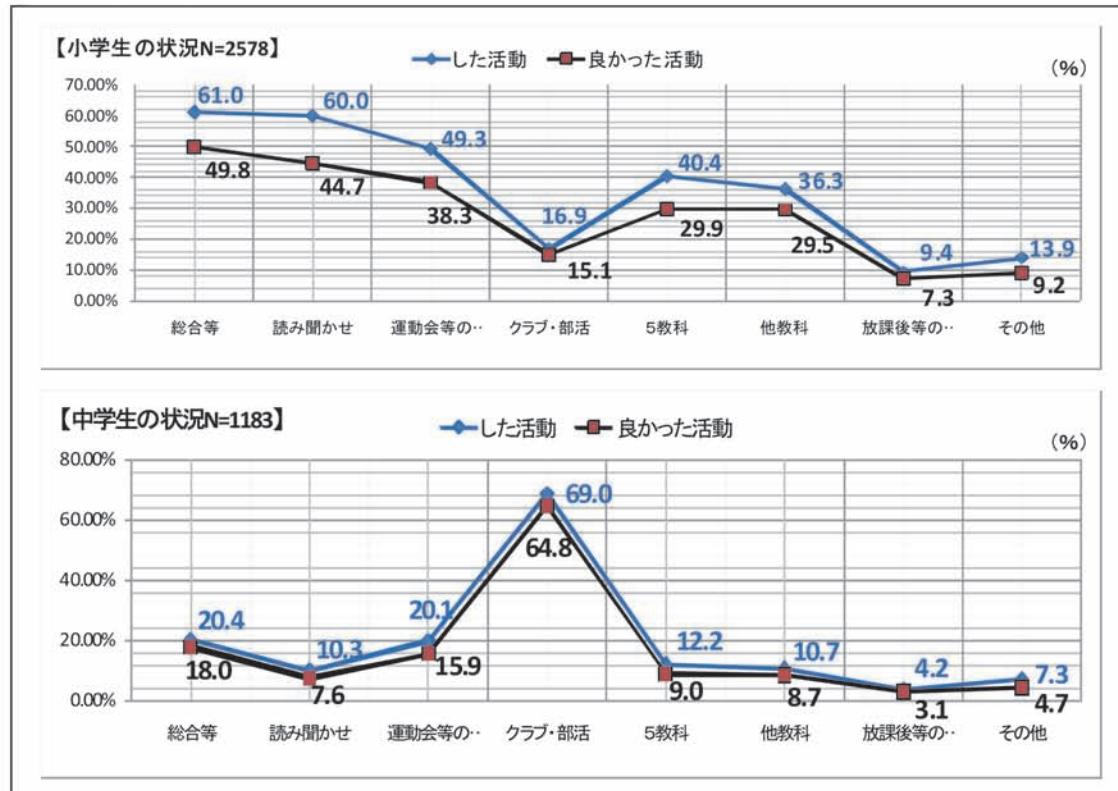


図3.1-5-4は、小中学生別の「した活動」と「良かった活動」の比較を示したものである。小中学生ともに、すべての活動において肯定的にとらえていることがわかる。特に中学生においてはその傾向が強く、小学生以上に肯定的に受け止めている。

図3.1-5-4 小中学生別の地域住民との交流・活動の経験内容と良かった活動の比較(N=3761)



### 3.1-6 今後の地域住民からの学校支援に関すること

図 3.1-6-1 は、今後、学校で地域の人たちと交流・活動したいかどうかに関する状況を示したものである。さらに文章中の（ ）内は、昨年の状況を示している。

「今後、地域の人に学校に来てもらって勉強やクラブ活動・部活動などを教えてもらったり、一緒に活動したりしたいと思いますか」については、「したい」が 53.5% (60.7%)、「したくない」が 46.5% (37.2%) である。

小中学生別では、「活動したい」が小学生の方が 20.1% (20.0%) 多くなっている。

図3.1-6-1 今後の地域住民からの学校支援の要望に関する意識 (N=3451)

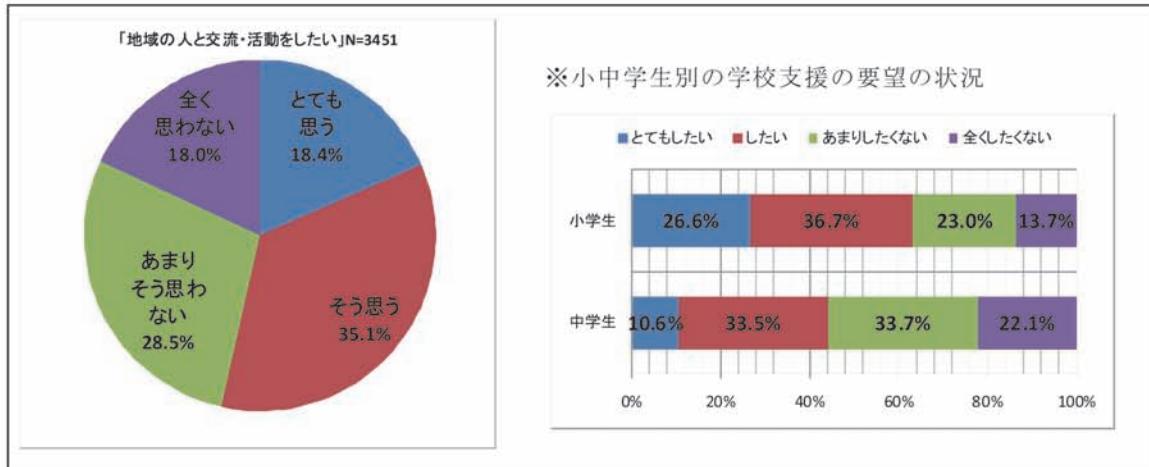
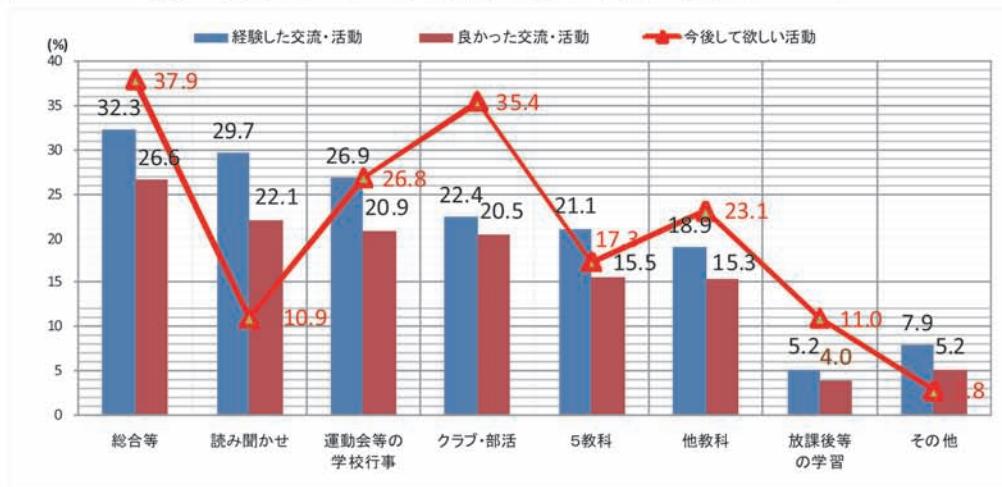


図 3.1-6-2 は、今後、学校で地域の人たちと交流・活動したい内容を、前述した「した活動と良かった活動」に重ねたものである。活動内容としては、小学生が多く要望しているために割合を高くしている「総合的な学習の時間」が 37.9% (33.4%)、「運動会等の学校行事」が 26.8% (29.3%)、次いで「他の教科」「5教科」の順になっている。中学生が多く要望して割合を高くしているのが「クラブ・部活動」で 35.4% (31.9%) となっている。「読み聞かせ・図書館活動」については、経験も多く、「良かった」という回答が多かったにもかかわらず、「今後して欲しい」と回答したのは 10.9% (小学生 : 17.1%、中学生 : 4.3%) と少なくなっている。

図3.1-6-2 今後の地域住民からの学校支援の要望と支援の経験 (N=3149)



### 3.2 クロス集計結果及び項目の相関

調査項目においての様々なクロス集計を行ったが、ここでは表 3.2-①から表 3.2-④を参考にして有意な相関がみられる項目のうち、学校支援活動に関係が深いと思われる項目を中心に、3.2-1 以下に具体的に示すこととする。

表 3.2-①は、「家庭での生活」「家族との関係」「地域との関係」の相関表を示したものである。この表から、相互に有意な相関があることがわかる。この結果は昨年の調査と全く同じである。

表3.2-① 「家庭での生活」「家族との関係」「地域との関係」の相関表 (N=5635)

	学年	基本的生活習慣等			家族との関係		地域との関係	
		学年	起床	就寝	誰とも会話	家族会話	家庭の手伝	地域参加
学年	1	-.022	.139(**)	.132(**)	.097(**)	.174(**)	.161(**)	.023
起床	-.022	1	.248(**)	.087(**)	.072(**)	.180(**)	.104(**)	.151(**)
就寝	.139(**)	.248(**)	1	.136(**)	.227(**)	.236(**)	.158(**)	.199(**)
誰とも会話	.132(**)	.087(**)	.136(**)	1	.263(**)	.149(**)	.218(**)	.273(**)
家族会話	.097(**)	.072(**)	.227(**)	.263(**)	1	.273(**)	.206(**)	.271(**)
家庭の手伝	.174(**)	.180(**)	.236(**)	.149(**)	.273(**)	1	.199(**)	.234(**)
地域参加	.161(**)	.104(**)	.158(**)	.218(**)	.206(**)	.199(**)	1	.278(**)
地域の挨拶	.023	.151(**)	.199(**)	.273(**)	.271(**)	.234(**)	.278(**)	1

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

表 3.2-②は「家庭での生活」「家族との関係」「地域との関係」と  
「学校の楽しさ」「学校支援の経験」「学校支援の要望」と  
「学校の楽しさ」「学校支援の経験」「学校支援の要望」の相

表3.2-②「家庭での生活」「家族との関係」「地域との関係」と  
学校の楽しさ、支援に関する相関表 (N=5635)

	学校が楽しい	学校支援経験	支援の要望
学年	-.012	.335 (**)	.221 (**)
起床	.133 (**)	.029 (*)	.110 (**)
就寝	.186 (**)	.102 (**)	.209 (**)
誰とも会話	.312 (**)	.132 (**)	.213 (**)
家族会話	.266 (**)	.122 (**)	.254 (**)
家庭の手伝	.162 (**)	.102 (**)	.175 (**)
地域参加	.150 (**)	.253 (**)	.311 (**)
地域の挨拶	.264 (**)	.141 (**)	.280 (**)
学校が楽しい	1	.059 (**)	.272 (**)
学校支援経験	.059 (**)	1	.415 (**)
支援の要望	.272 (**)	.415 (**)	1

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

表 3.2-③は、学校支援の経験内容（縦軸）と、支援してもらって「良かった」と思う活動

(横軸) の相関表を示したものである。特に.200\*\*以上の赤の数字で示した項目も多く、その他の活動との関係においてもほとんどの項目との有意な相関があることがわかる。特に、一緒にした交流・活動については、経験した「5教科」(縦軸)と良かった「5教科」(横軸)には.709\*\*、経験した「他教科」と良かった「他教科」には.710\*\*などのようにすべての活動において.691\*\*～.858\*\*という高い有意な相関がみられる。

また、「クラブ・部活動」については、経験においても、今後の要望においても、他の項目との相関が、全ての項目において他の項目と逆のマイナスの有意な相関があることがわかるので、3.2-3で比較分析することとする。

表3.2-③ 経験した支援内容(縦軸)と良かった支援内容(横軸)の相関表(N=5635)

	5教科	他教科	総合学習	クラブ・部活動	放課後学習	運動会等	読み聞かせ
5教科	.709(**)	.255(**)	.209(**)	-.152(**)	.113(**)	.161(**)	.194(**)
他教科	.290(**)	.710(**)	.134(**)	-.107(**)	.121(**)	.169(**)	.218(**)
総合学習	.191(**)	.097(**)	.708(**)	-.283(**)	.053(**)	.212(**)	.221(**)
クラブ・部活動	-.193(**)	-.142(**)	-.308(**)	.858(**)	-0.016	-.209(**)	-.286(**)
放課後学習	.122(**)	.093(**)	.079(**)	-.007	.691(**)	.123(**)	.043(**)
運動会等	.146(**)	.154(**)	.236(**)	-.198(**)	.090(**)	.714(**)	.217(**)
読み聞かせ	.209(**)	.162(**)	.221(**)	-.251(**)	.053(**)	.219(**)	.691(**)

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

表3.2-④は、学校支援の経験内容(縦軸)と、今後の支援の要望(横軸)の相関表を示したものである。「5教科」「他教科」「クラブ・部活動」「読み聞かせ等」は有意な相関がある項目が多くなっている。特に「今後の支援の要望」と「5教科の経験」には.415\*\*、「クラブ・部活動の支援の要望」と「クラブ・部活動の経験」には.405\*\*という高い有意な相関があることがわかる。

表3.2-④ 経験した支援内容(縦軸)と今後して欲しい支援内容(横軸)の相関表(N=5635)

	支援の要望	5教科	他教科	総合学習	クラブ・部活動	放課後学習	運動会等	読み聞かせ
5教科	.415(**)	.231(**)	.161(**)	-.008	-.145(**)	.037	-.037	.075(**)
他教科	-.066(**)	.111(**)	.243(**)	-.016	-.066(**)	.069(**)	.008	.058(*)
総合学習	-.042	.058(*)	.121(**)	.147(**)	-.168(**)	.033	.064(**)	.090(**)
クラブ・部活動	-.110(**)	-0.038	-.111(**)	-.137(**)	.405(**)	-.016	-.069(**)	-.082(**)
放課後学習	-.009	.101(**)	.076(**)	-.03	-.019	.183(**)	.029	.053(*)
運動会等	.02	-.007	.116(**)	.028	-.125(**)	.036	.155(**)	.082(**)
読み聞かせ	-.028	0	.109(**)	.059(*)	-.143(**)	.016	.048(*)	.250(**)

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

### 3.2-1 「学校に行くことの楽しさ」のクロス結果

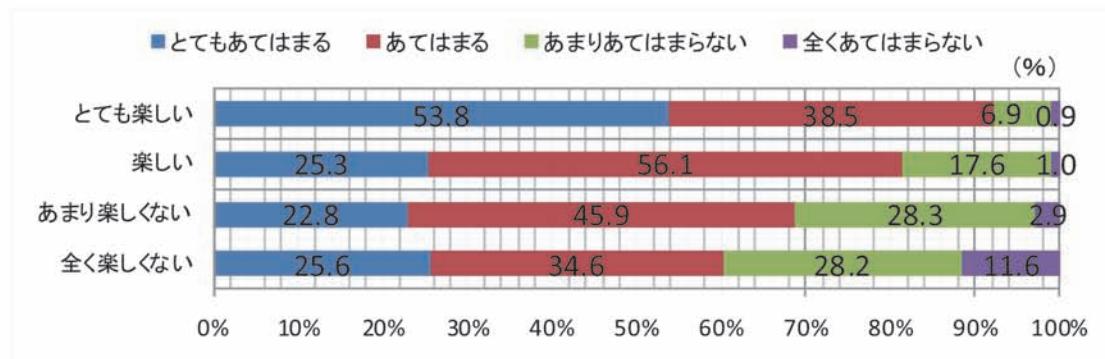
子どもたちが学校に行くことが楽しいということは、「子どもの学習意欲」や「人間関係」の基盤となることである。前述したように 78.9%の子どもが、学校へ行くことが「楽しい」と回答しており、この「学校に行くことの楽しさ」と有意な相関が見られる項目について示すこととするが、次に示す高い有意な相関がある項目は、昨年の調査と全く同じ項目である。

#### 3.2-1-1 「誰とでも話をする」との関係

「学校に行くことの楽しさ」と「誰とでも話をする」の関係を示したもののが図 3.2-1-1 である。

この図から、「学校に行くのがとても楽しい」と回答したうちの 92.3%が「誰とでも話をする」(とてもする : 53.8%・する : 38.5%)と回答し、「とても楽しい」と回答したうちの 7.8%が「話をしない」(あまりしない : 6.9%・全くしない : 0.9%)と回答している。また、「学校に行くのが楽しい」と回答したうちの 81.4%が「誰とでも話をする」(とてもする : 25.3%・まあする : 56.1%)と回答し、「楽しい」と回答したうちの 18.6%が「話をしない」(あまりしない : 17.6%・全くしない : 1.0%)と回答している。さらに、「学校に行くのがあまり楽しくない」と回答したうちの 68.4%が「誰とでも話をする」(とてもする : 22.8%・する : 45.9%)と回答し、「あまり楽しくない」と回答したうちの 31.2%が「話をしない」(あまりしない : 28.3%・全くしない : 2.9%)と回答している。さらに、「学校に行くのが全く楽しくない」と回答したうちの 60.2%が「誰とでも話をする」(とてもする : 25.6%・する : 34.6%)と回答し、「全く楽しくない」と回答したうちの 39.8%が「話をしない」(あまりしない : 28.2%・全くしない : 11.6%)と回答している。このことから、「学校に行くことの楽しさ」と「誰とでも話をする」には、「学校に行くことが楽しい」と回答した子どもほど「誰とでも話をする」という傾向があり、昨年の調査と全く同じ傾向である。

図3.2-1-1 「学校に行くことの楽しさ」と「誰とでも話をする」の関係 (N=5635)



以下、このような有意な相関がみられる項目について、小中学生の回答をクロスした

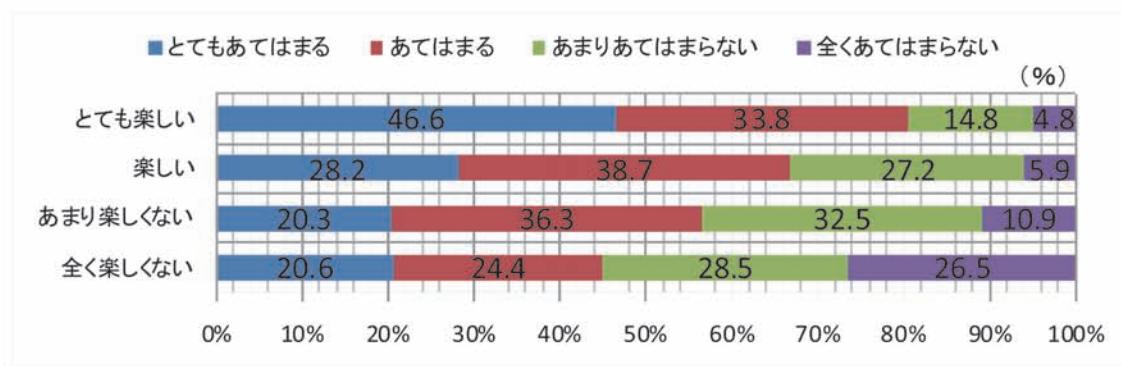
図を示すが、図の詳細な説明は省略することとする。

### 3.2-1-2 「学校のことについての家族との会話」との関係

「学校に行くことの楽しさ」と「学校のことについての家族との会話」の関係を示したものが図 3.2-1-2 である。

この図から、「学校に行くことが楽しい」という回答の中での「家族ととても会話をする」「まあ会話をする」の割合から、徐々に「あまり楽しくない」「全く楽しくない」という回答へ目を移していくと、「学校に行くことの楽しさ」と「学校のことについての家族との会話」には、「学校に行くことが楽しい」と回答した子どもほど「学校のことについて家族との会話する」という傾向があり、昨年の調査と全く同じ傾向である。

図3.2-1-2 「学校に行くことの楽しさ」と「学校のことについての家族との会話」の関係 (N=5635)

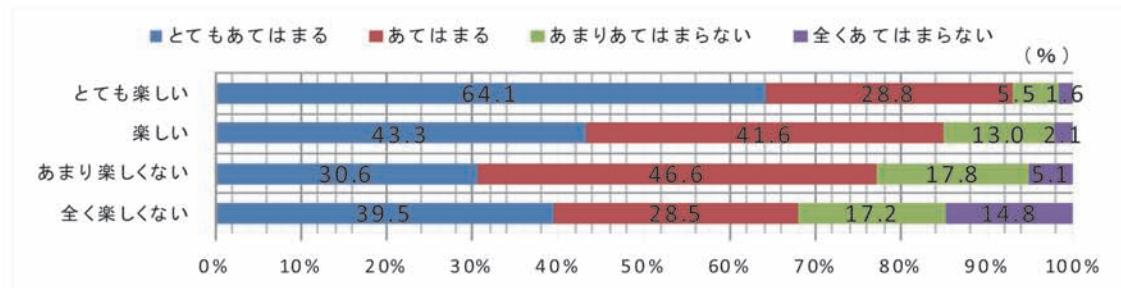


### 3.2-1-3 「近所の人との挨拶」との関係

「学校に行くことの楽しさ」と「近所の人との挨拶」の関係を示したものが図 3.2-1-3 である。

この図から、「学校に行くことが楽しい」という回答の中での「とても挨拶する」「まあ挨拶する」の割合から、徐々に「あまり楽しくない」「全く楽しくない」という回答へ目を移していくと、「学校に行くことの楽しさ」と「近所の人との挨拶」には、「学校に行くことが楽しい」と回答した子どもほど、「近所の人に挨拶する」という傾向があり、昨年の調査と全く同じ傾向である。

図3.2-1-3 「学校に行くことの楽しさ」と「近所の人との挨拶」の関係 (N=5635)

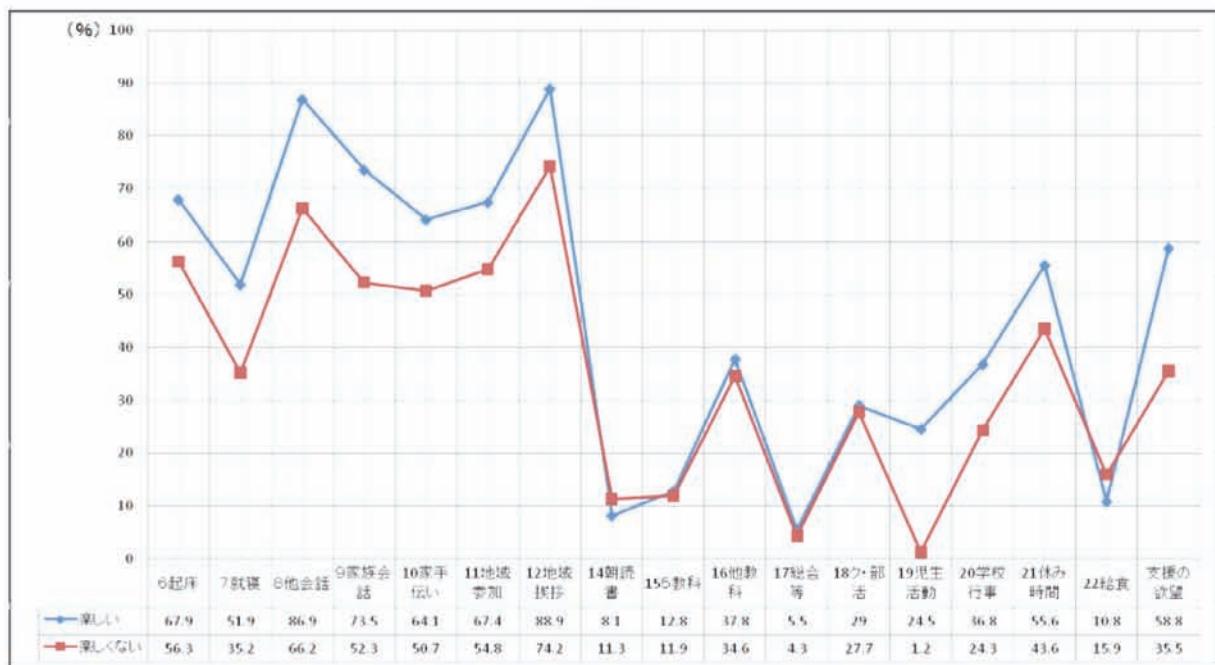


### 3.2-1-4 「学校へ行く楽しさ」と他の項目との関係

学校へ行く楽しさについては、前述したように、「楽しい」が78.9%、「楽しくない」が20.5%となっており、「楽しい」と回答した児童生徒と、「楽しくない」と回答した児童生徒について、他の項目での回答状況の比較を示したものが図3.2-1-4である。（他の項目内容は、V番号と内容<調査資料P66以下>の略記で示している。）

「学校へ行くのが楽しくない」と回答した子どもは、「楽しい」と回答した子どもと比較して、V6の「起床」からV12の「地域の人に挨拶する」まで全ての項目において低くなっていることがわかる。「学校での楽しいことは何ですか」という項目についても、V19の「児童会・生徒会活動」、V20の「運動会等の学校行事」、V21の「休み時間」、さらにV22の「学校支援の要望」の項目で低くなってしまっており、学習活動に関してはほとんど差がないことがわかる。このことから、学校へ行く楽しさは学習活動に関するのではなく、日常生活や人とのコミュニケーション能力等の個人的な性格や、人間関係に関するこに左右されるのではないかと考えることができそうである。

図3.2-1-4 「学校に行くことの楽しさ」と他の項目の関係 (N=5635)



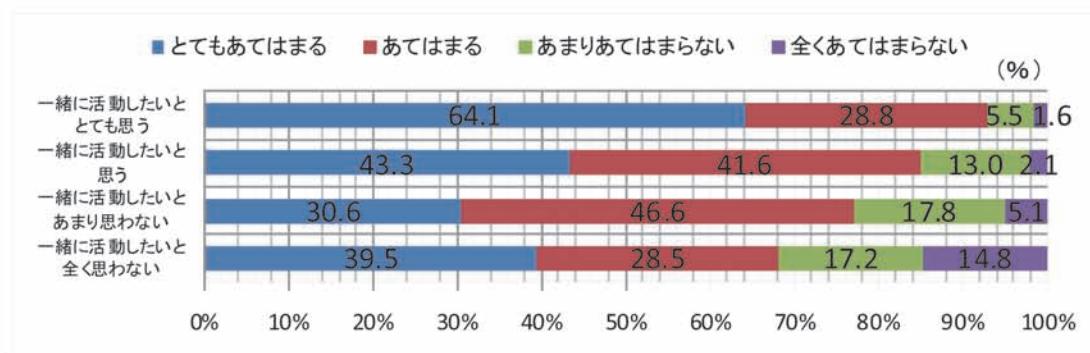
### 3.2-2 「学校支援（地域の人と交流・活動）の要望」のクロス結果

地域住民からの学校支援が子どもたちにとってどうなのか、ということは「学校支援地域本部事業」の基盤となることであり、前述したように「地域の人と交流・活動したい」が53.5%、「したくない」が46.5%であることから、その背景等を分析するために「学校支援の要望」と有意な相関がみられる項目について示すこととする。

#### 3.2-2-1 「毎朝、自分で起きる」との関係

図3.2-2-1は、「学校支援の要望」と「毎朝、自分で起きる」の関係を示したものである。この図から、「一緒に活動したいと思う」子どもほど、「毎朝、自分で起きる」という傾向があることがわかる。

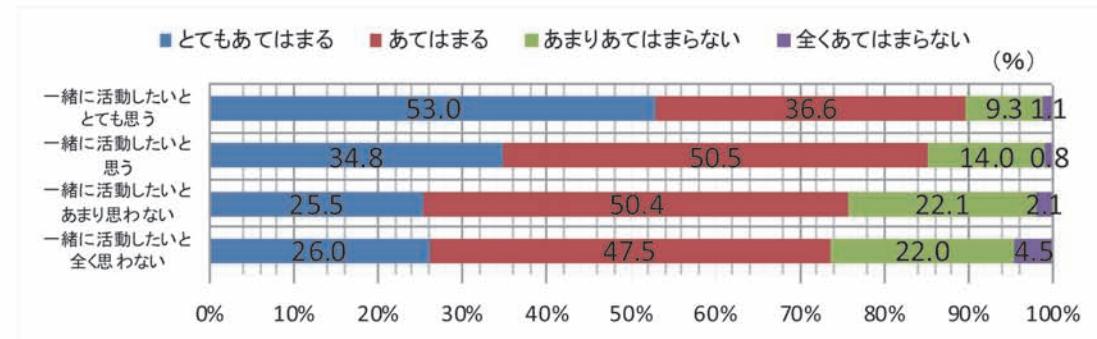
図3.2-2-1 「学校支援の要望」と「毎朝自分で起きる」の関係 (N=3450)



#### 3.2-2-2 「誰とでもよく話す」との関係

図3.2-2-2は、「学校支援の要望」と「誰とでもよく話す」の関係を示したものである。この図から、「一緒に活動したいと思う」子どもほど、「誰とでもよく話す」という傾向があることがわかる。

図3.2-2-2 「学校支援の要望」と「誰とでもよく話す」の関係 (N=3450)

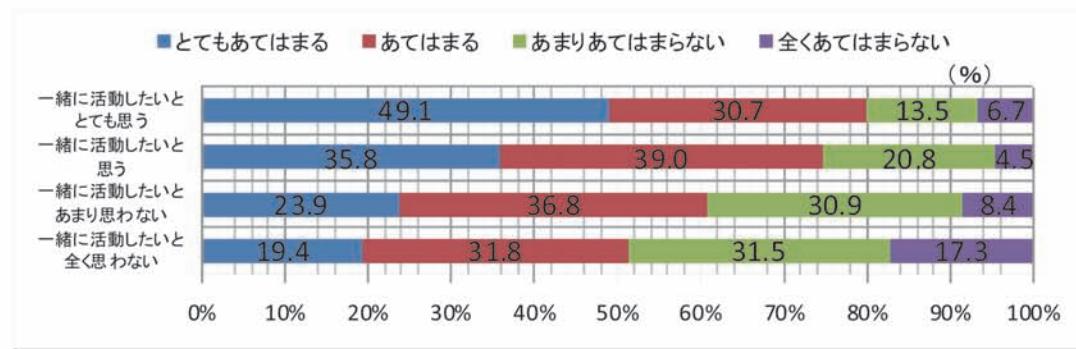


### 3.2-2-3 「学校のことについての家族との会話」との関係

図 3.2-2-3 は、「学校支援の要望」と「学校のことについての家族との会話」の関係を示したものである。

この図から、「一緒に活動したいと思う」子どもほど、「学校のことについて家族と会話する」という傾向があることがわかる。

図3.2-2-3 「学校支援の要望」と「学校のことについての家族との会話」の関係 (N=3450)

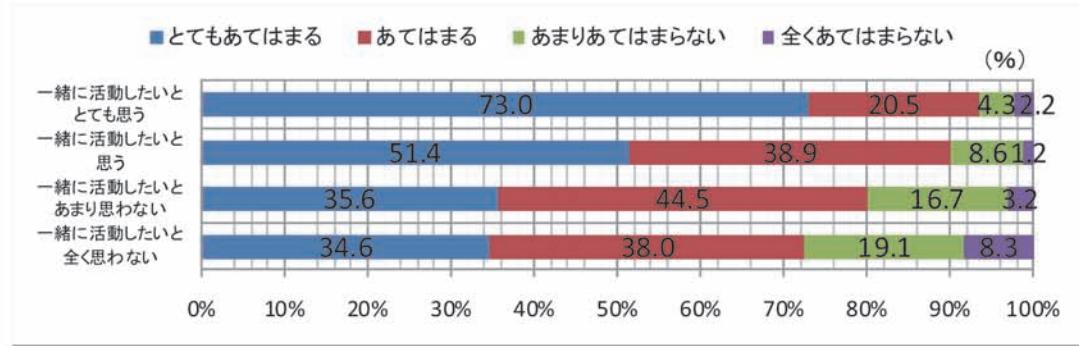


### 3.2-2-4 「地域の人への挨拶」との関係

図 3.2-2-4 は、「学校支援の要望」と「地域の人への挨拶」の関係を示したものである。

この図から、「一緒に活動したいと思う」子どもほど「地域の人への挨拶をよくする」という傾向があることがわかる。

図3.2-2-4 「学校支援の要望」と「地域の人への挨拶」の関係 (N=3450)



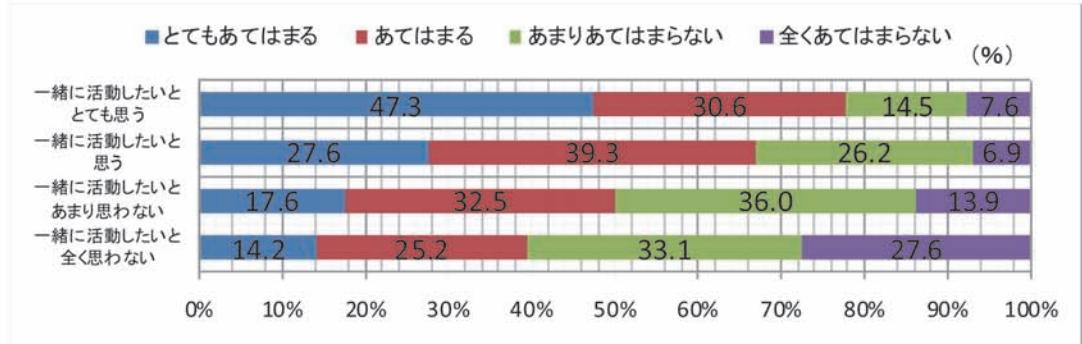
### 3.2-2-5 「地域の活動への参加状況」との関係

図 3.2-2-5 は、「学校支援の要望」と「地域の活動への参加状況」の関係を示したものである。

この図から、「地域の人と一緒に活動したいと思う」子どもほど「地域の活動へ参加

する」という傾向があることがわかる。

図3.2-2-5 「学校支援の要望」と「地域の活動への参加状況」の関係 (N=3450)

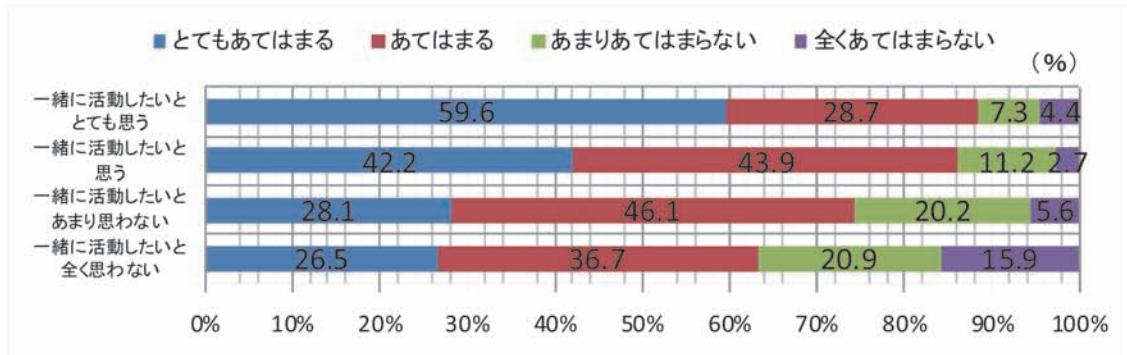


### 3.2-2-6 「学校へ行くことの楽しさ」との関係

図3.2-2-6は、「学校支援の要望」と「学校へ行くことの楽しさ」との関係を示したものである。

この図から、「地域の人と一緒に活動したいと思う」子どもほど「学校へ行くことが楽しい」という関係があることがわかる。

図3.2-2-6 「学校支援の要望」と「学校へ行くことの楽しさ」との関係 (N=3450)



### 3.2-2-7 「学校支援（地域の人との交流・活動）の経験」との関係

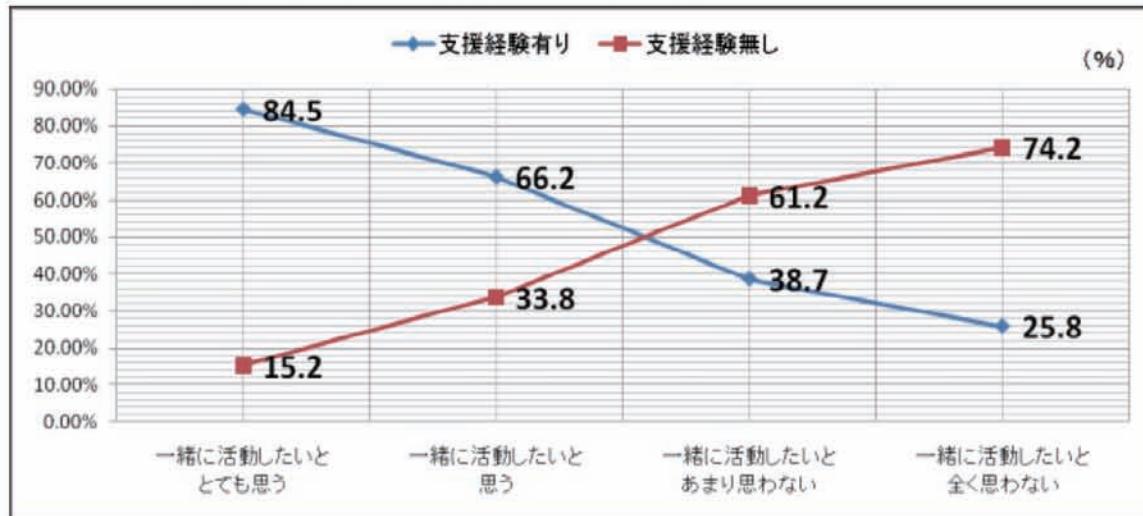
図3.2-2-7は、「学校支援の要望」と「学校支援の経験」の関係を示したものである。

この図からわかるように、地域の人と一緒に活動したいととても思う」が、学校支援を経験した子どものうち 84.5%で、経験していない子どもの 15.2%を大きく上回っている。「一緒に活動したい」では、それぞれ 66.2%、33.8%となっている。「一緒に活動したくない」という回答は逆転しており、「一緒に活動したいと全く思わない」では、学校支援を経験した子どもは 25.8%で、経験していない子どもの 74.2%を大きく下回っている。

学校支援を計画して受け入れるのは教職員であるが、子どもにとって、こうした学校

支援の経験は有効であり、今後、さらに要望していることがわかる。人間関係の経験やコミュニケーション能力の向上等において、まず、経験させる場を作ることの必要性がみえてきたと言えよう。

図3.2-2-7 「学校支援の要望」と「学校支援の経験」の関係 (N=3450)



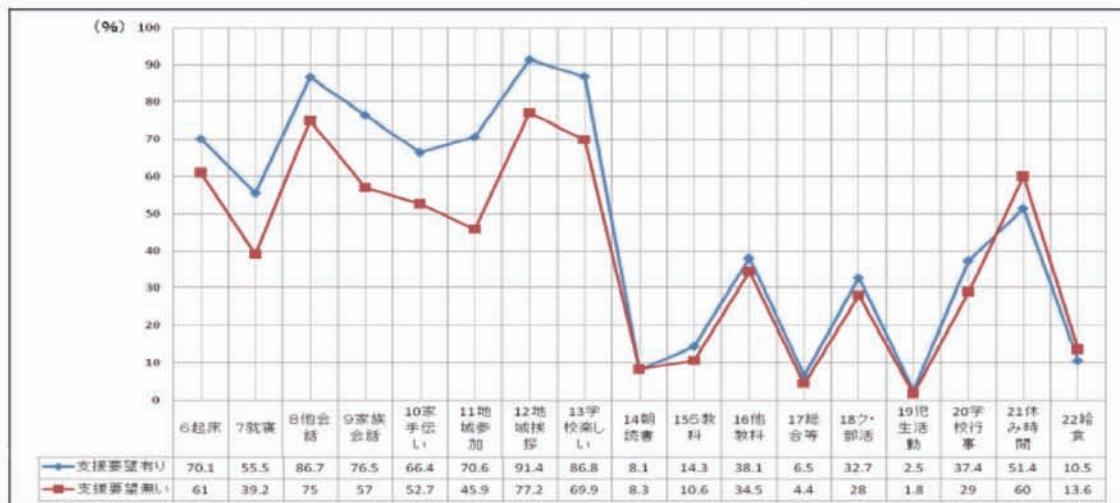
### 3.2-2-8 「学校支援の要望」と他の項目との関係

地域の人との学習支援等の交流・活動が、様々な項目と関係があることを示してきたが、「学校支援の要望がある」子どもと「ない」子どもの他の項目との関係を比較して示したものが図3.2-2-8である。(他の項目内容はV番号と内容の略記で示している。)

「学校支援の要望がある」と回答した子どもは、「ない」と回答した子どもと比較して、V6の「起床」からV13の「学校へ行くのが楽しい」までの全ての項目において高くなっていることがわかる。「学校での楽しいことは何ですか」という項目については、若干高い項目があるものの、ほとんど差がないことがわかる。

のことから、「学校支援の要望」は、「学校へ行くのが楽しい」と同様に、日常生活や人とのコミュニケーション能力等の個人的な性格や、人間関係に関するこに左右するのではないかと考えることができそうである。

図3.2-2-8 「学校支援の要望」と他の項目の関係 (N=3450)



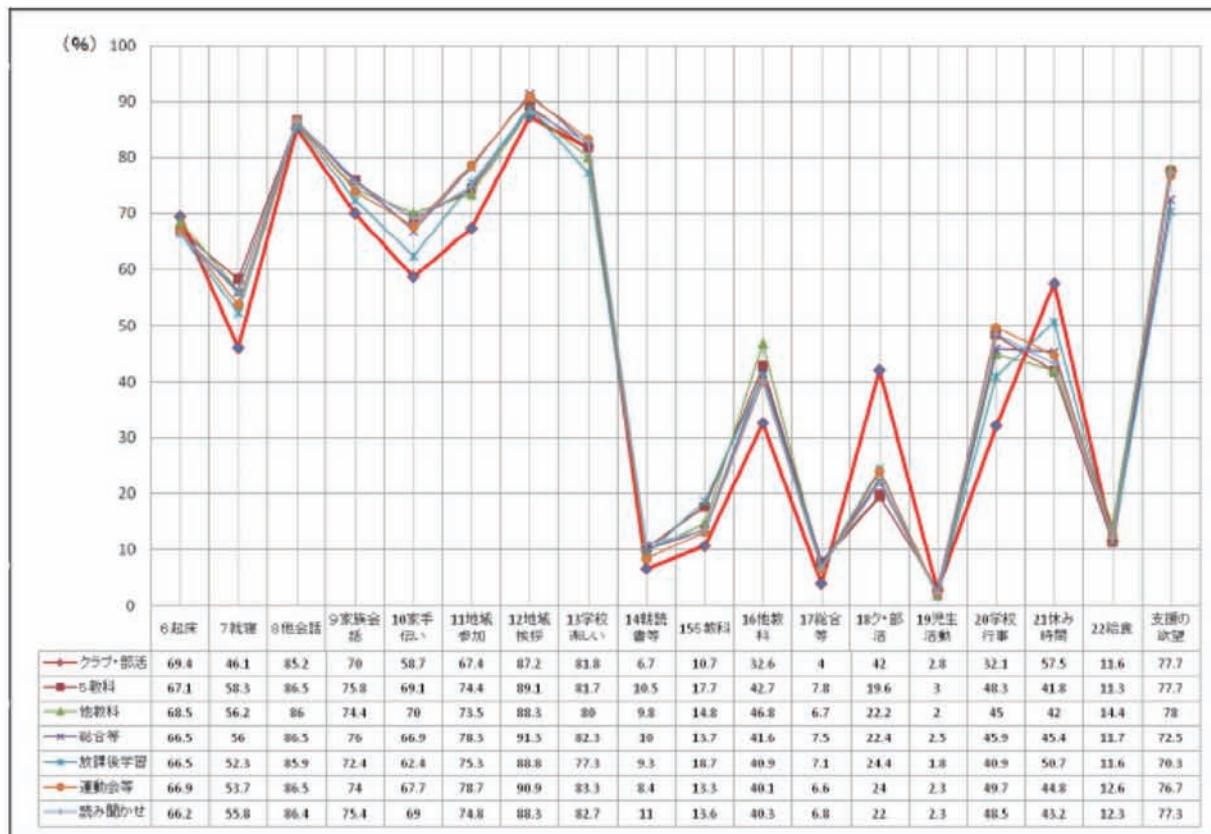
### 3.2-3 「クラブ・部活動」のクロス結果

3.2-③及び④の表から、「クラブ・部活動」については、経験においても、今後の要望においても、全ての項目において他の項目と逆のマイナスの有意な相関があることを説明したが、ここでは、その背景を分析するために、良かった支援として回答した「クラブ・部活動」についての項目の割合と、他の支援内容についての他の項目の割合とを比較して図3.2-3に示した。

図下の表の左に縦に示した良かった支援活動としての「5教科」～「読み聞かせ」の項目においては、他の項目との関係はほとんど同じ傾向があることがわかる。しかし、赤線で示した「クラブ・部活動」については、V7の「就寝」、V9の「家族会話」、V10の「家の手伝い」、V11の「地域活動参加」と、学校で楽しいことについてのV15の「5教科」、V16の「他教科」、V20の「学校行事」が他の支援活動と比較して、この項目のみが低くなっている。高くなっている項目では、学校で楽しいことについてのV18の「クラブ・部活動」と、V21の「休み時間」となっている。

のことから、「クラブ・部活動」を好む子どもは、家族や地域の人たちと接する時間がないことが考えられる。また、学校で楽しいことに関する「教科学習」が低くなってしまっており、「クラブ・部活動」と「教科学習」の関係をさらに分析する必要が見えてきたと考えられる。

図3.2-3 良かった学校支援の内容（図下の表の左）と他の項目の関係（N=3450）



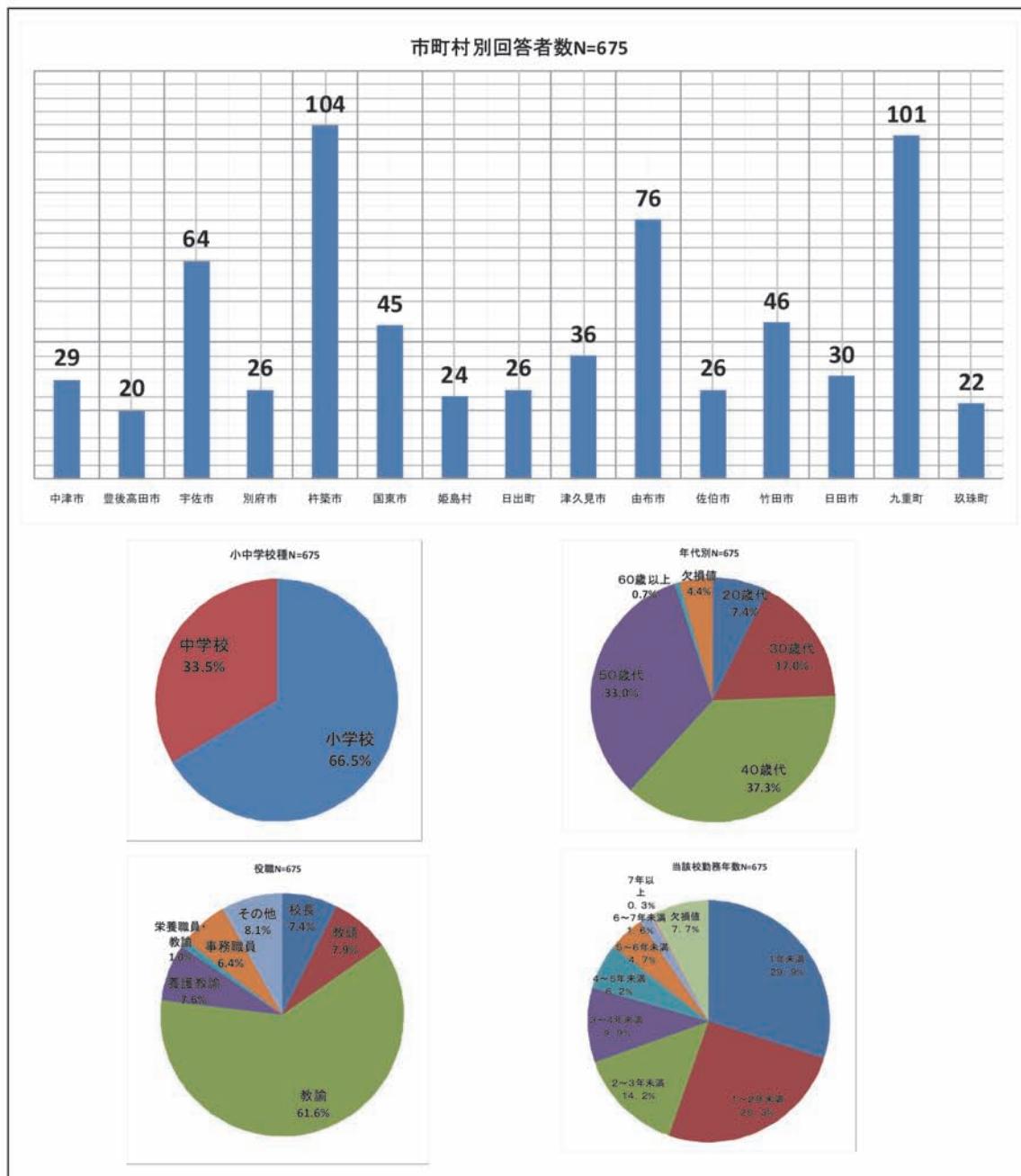
## 第4章 教職員の調査の結果

### 4.1 単純集計結果

#### 4.1-1 教職員に関する基礎データ

表1の調査対象一覧表により、調査したものを、基礎データとして市町村別、小学校種別、年代別、役職、当該校勤務年数を示したもののが図4.1-1である。学校支援地域本部の規模によって、市町村別のデータ数が異なっている。

図4.1-1 教職員に関する基礎データ (N=675)



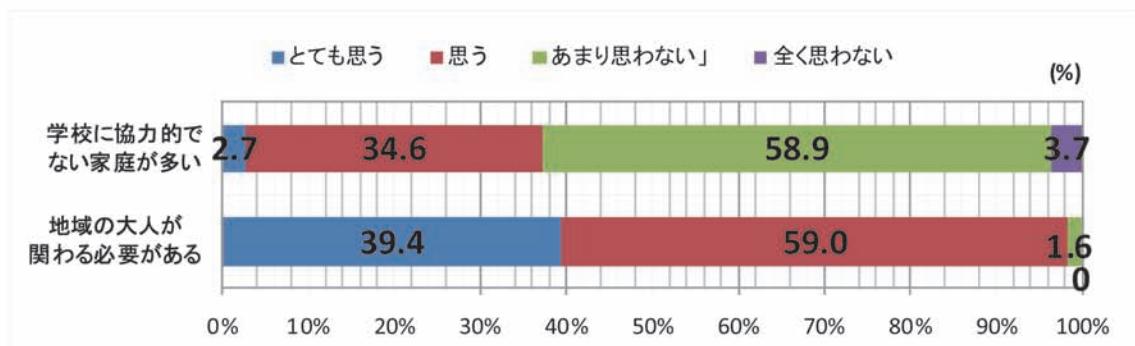
#### 4.1-2 家庭や地域に関すること

図 4.1-2 は、教職員の、学校支援に関する最近の家庭と地域についての意識を示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「学校に協力的でない家庭が多いと思いますか」については、「思う」が 37.9%(39.2%)、「思わない」が 62.6%となっており、60%以上の保護者は学校への協力があることがわかる。学校への協力がない保護者との連携・協力をどうするかが課題であろう。

「地域の子どもに地域の大人が積極的に関わる必要があると思いますか」については、「思う」が 98.4%(88.0%)、「思わない」が 1.6%で、ほとんどの教職員は、子どもへの地域住民の関わりの必要性を感じていることがわかる。

図4.1-2 家庭や地域に関する意識 (N=675)



#### 4.1-3 子どもに関すること

図 4.1-3-1 は、最近の子どもの様子についての意識を示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「子どもたちの道徳心や公共心が薄れていると思いますか」については「薄れていると思う」が 71.9%(68.6%)、「思わない」が 28.2%である。

「子どもたちの学習意欲が低下していると思いますか」については、「低下していると思う」が 49.7%(40.7%)、「思わない」が 50.3%となっている。

このことは、教職員は「学習意欲の低下」より、「道徳心や公共心の薄れ」の方を強く感じていることがうかがえ、後述する地域住民と同じ傾向である。

図4.1-3-1 子どもに関する意識 (N=675)

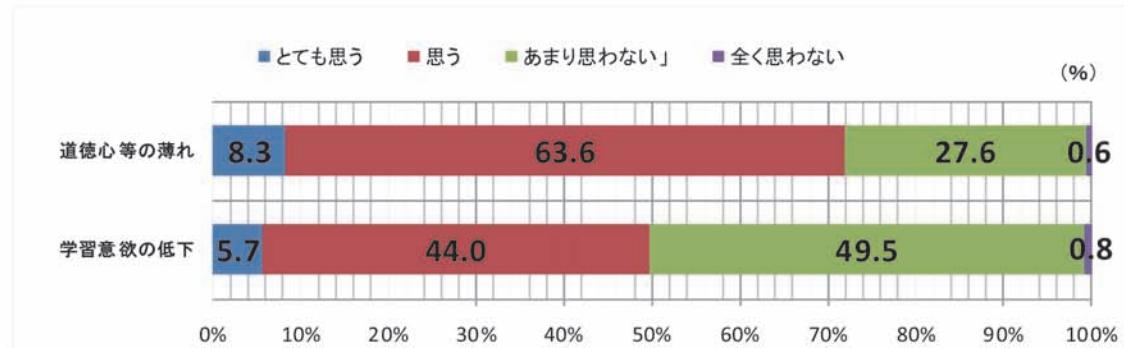
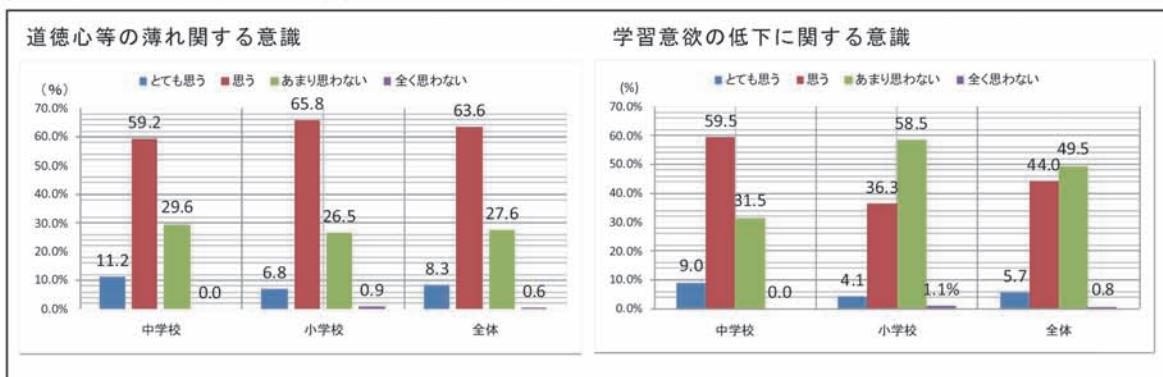


図 4.1-3-2 は、「道徳心等の薄れ」と「学習意欲の低下」について、小中学校別に示したものである。

「道徳心等の薄れ」については、小学校と中学校は全く同じ傾向である。「学習意欲の低下」については、中学校では「低下していると思う」が 68.5%、小学校が 40.4%となつており、中学校の方が学習意欲の低下を強く感じているという、昨年の調査と全く同じ傾向であることがわかつた。

図4.1-3-2 小中学校別の教職員の意識の比較 (N=675)



#### 4.1-4 勤務校における学校支援に関すること

図 4.1-4-1 は、勤務校における地域住民の学校支援について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「勤務校にとって地域住民のボランティア活動は必要ですか」については、「必要である」が 80.6%(89.6%)、「必要でない」が 19.4%(8.9%+欠損値 1.5%)となつており、必要性については昨年と比較して 9%少なくなっている。

昨年の調査で「学校支援の充実方策」について、学校がすることとして最も多かった「情報発信・提供」の状況については「提供・発信していると思う」が 94.8%(94.5%)である。

「学校支援の必要性」は本事業を実施するうえで重要な要素であり、他の項目とのクロスを後述することとする。

図4.1-4-1 勤務校における学校支援に関すること (N=675)

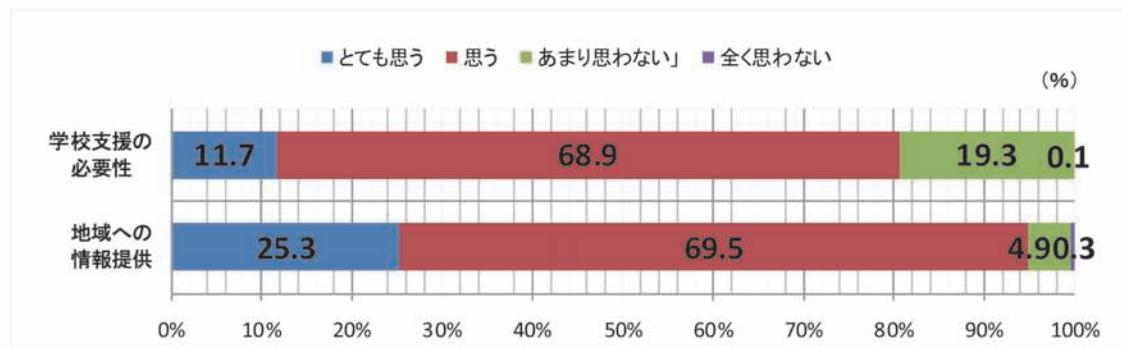


図4.1-4-2は、学校支援の必要性について小中学校別に示したものである。

小中学校別に見ると、「必要である」が小学校では86.5%(92.5%)、中学校は69.4%(84.9%)となっており、小学校の方が必要性を感じていることがわかる。全体的には昨年と比較して少なくなっているが、この傾向は昨年と同じである。

図4.1-4-2 小中学校別の学校支援の必要性(N=675)

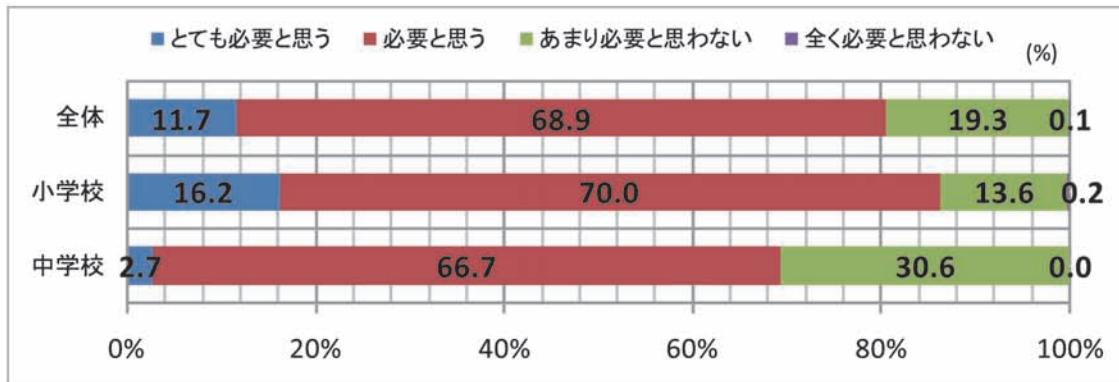
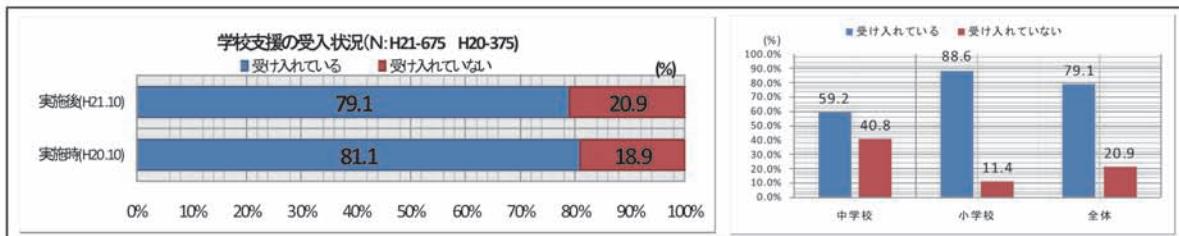


図4.1-4-3は、学校支援の受入状況と小中学校別の状況を示したものである。

今回（事業実施後）の調査では、受入をした教職員が79.1%で、昨年（事業実施時）の81.1%とほぼ同じになっている。

小中学校別では、小学校は88.6%(85.4%)、中学校は59.2%(70.0%)の教職員が学校支援を受け入れていることがわかる。この受入状況の背景には、回数や内容、受入の必要性等が、教職員によって様々であることが考えられることから、他の項目とのクロスをした分析を後述することとする。

図4.1-4-3 学校支援の受入状況と小中学校別の状況(N=675)



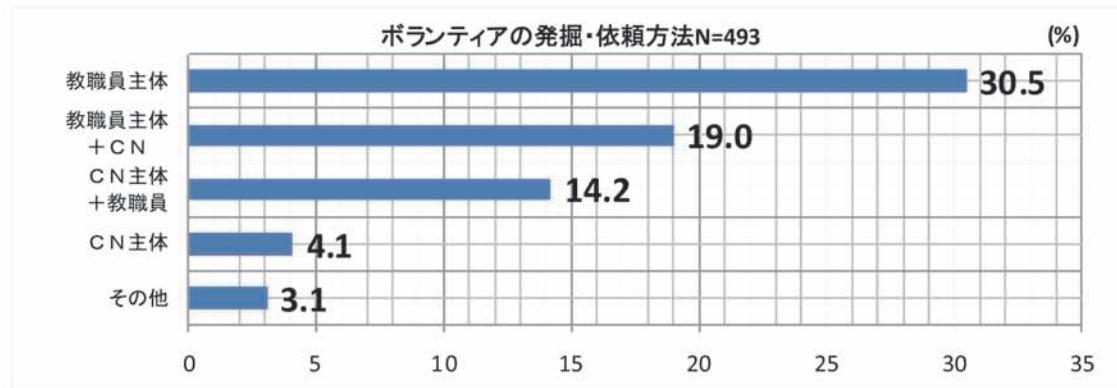
#### 4.1-5 学校支援者の発掘・依頼方法に関すること

図4.1-5-1は、学校支援ボランティアの発掘・依頼の方法について示したものである。

教職員の多忙化の大きな要因としてあげられるに、「発掘や依頼・打合せに取られる時間」が指摘されている。この図から、コーディネーターを配置した「学校支援地域本部事業」を実施している地域の教職員が、学校支援ボランティアの発掘・依頼をどうしているのか、配置されたコーディネーターが機能しているのかを見ることができる。ただし、コーディネーターの配置数に差があるために、学校サイドからしかみることができない。

教職員主体が 30.5%、教職員主体だが必要に応じてコーディネーター（CN）にお願いするが 19.0%、コーディネーター（CN）主体だが必要に応じてこれまでどおり教職員も行うが 14.2%、コーディネーター主体が 4.1 %となっている。コーディネーターの関わりの重要性をみるために、各本部の状況を図 4.1-5-2 に示すこととする。

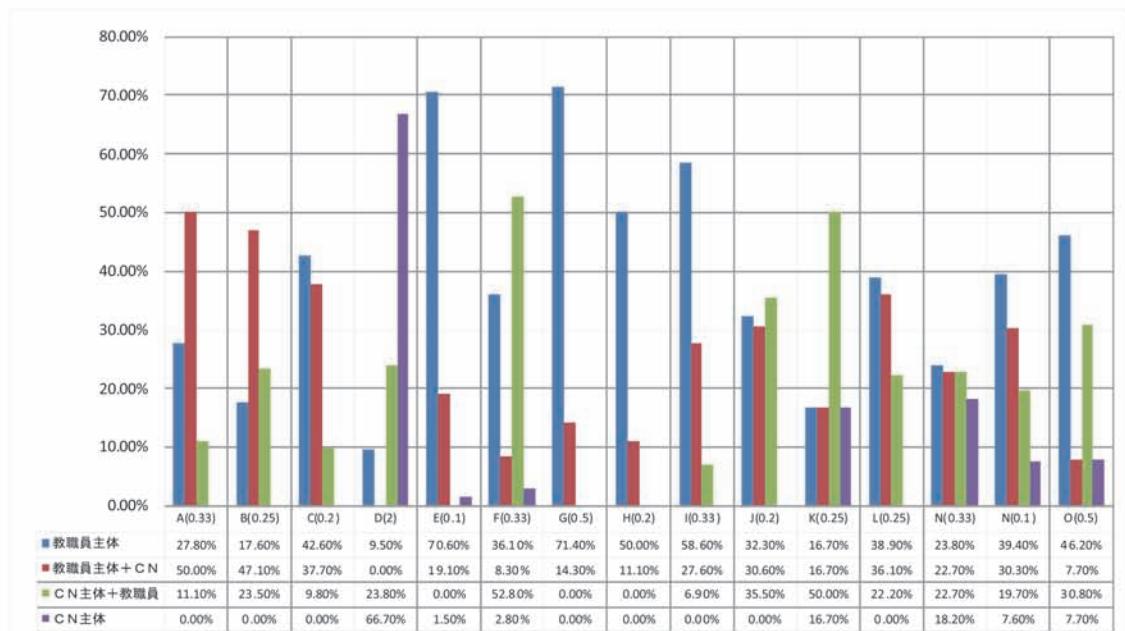
図4.1-5-1 学校支援ボランティアの発掘・依頼の方法 (N=492)



1 学校当たりのコーディネーターの配置数と学校支援ボランティアの発掘・依頼の方法をみるために、学校支援地域本部別に示したものが図 4.1-5-2 である。地域本部を示しているのは表中の最上段の A ~ O であり、その横の ( ) が、1 学校当たりのコーディネーター数である。(0.33 とは 1 人当たりの学校数である。)

赤、黄緑、紫の割合を見てわかるように、コーディネーターの活用状況は異なるが、学校として積極的に活用している本部、活用したいがコーディネーターが不足している本部、コーディネーターの数の割には活用されていない本部などがみえてくる。

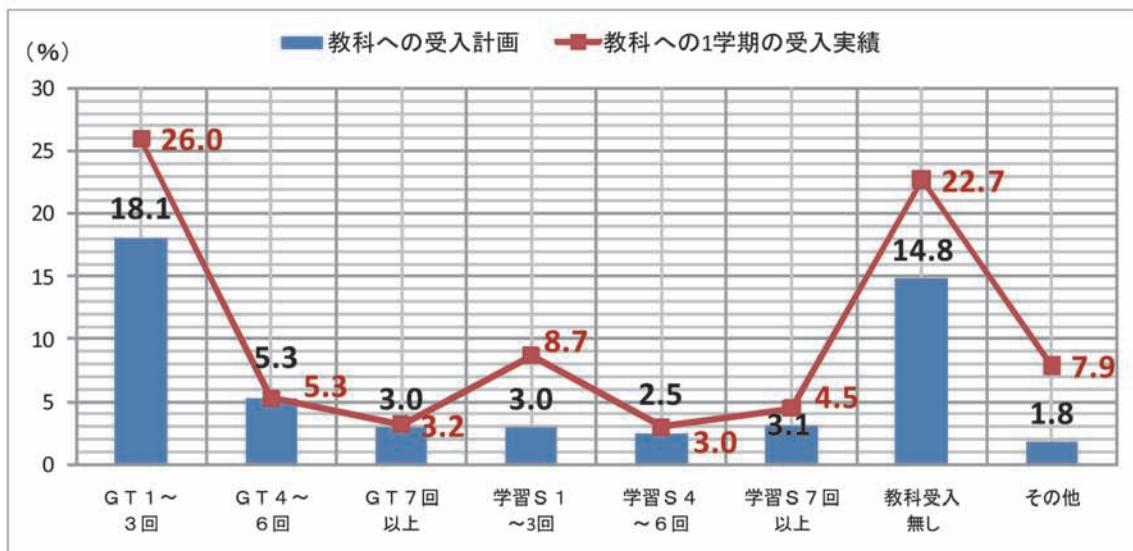
図4.1-5-2 学校支援ボランティアの発掘・依頼の方法 (N=492)



#### 4.1-6 教科の授業への年間受入計画と1学期の実績に関すること

図4.1-6は、教科の授業への学校支援ボランティアの受入について示したものである。受入計画については、ゲストティーチャー(GT)として1回～3回が18.1%で最も多いが、学習サポートとしての受入計画は少なくなっている。しかし、実績と比較してみると、ゲストティーチャー(GT)として1回～3回が26.0%、と学習サポートの1回～3回について8.7%となっており、計画以上の実績がみられる。また、この比較から、計画と実績が関連していることから、教育課程への位置づけの大切さがわかる。

図4.1-6 教科の授業への年間受入計画と1学期の受入実績(N=492)



#### 4.1-7 学校支援による期待される教育効果に関すること

図4.1-7は、地域住民の学校教育への支援活動に期待する効果について示したものである。特に、子どもへの効果については、学校支援を受け入れる上で重要な要素であり、子どもへの効果と受入の課題に関するクロスについては後述することとする。さらに文書中の( )内は昨年の状況を示している。

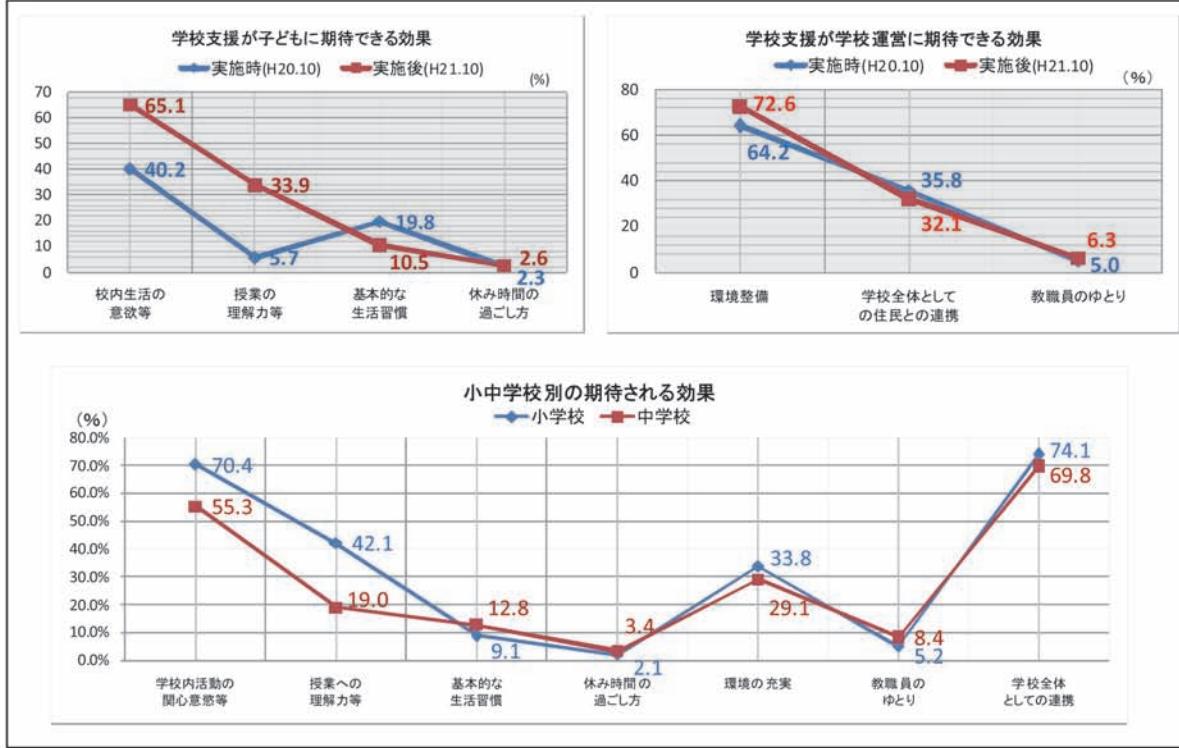
子どもへの効果として期待されることは、「学校内活動への関心・意欲・態度の向上」が最も多く65.1%(40.2%)となっており、昨年の調査の1.6倍になっている。次に多いのが昨年と逆転して、「授業における理解力・集中力の向上」の33.9%(5.7%)で、昨年を大きく上回っている。「基本的生活習慣の向上」が10.5%(19.8%)となっており、校内生活への意欲・関心等や、学習活動への効果を感じてきていることがわかる。

学校の教育活動全般としては、「学校全体としての地域住民との協力・連携」が最も多く72.6%(64.2%)、「学校環境の充実」が32.1%(35.8%)である。「教職員のゆとり」は6.3%(5.0%)と少ないなど、昨年の調査とほぼ同じ傾向である。

小中学校を比較すると、子どもへの効果として期待することに差があり、「学校内活動への関心・意欲・態度の向上」が、小学校では70.4%、中学校では55.3%となってい

る。また、「授業における理解力・集中力の向上」についても、小学校の 42.1%に対して、中学校では 19.0%と少なくなっている。子どもの発達段階及び教科の専門性の違いからの差であろうと推測できる。その他については小学校と中学校の違いはみられない。

図4.1-7 学校支援による期待される効果 (N=507)



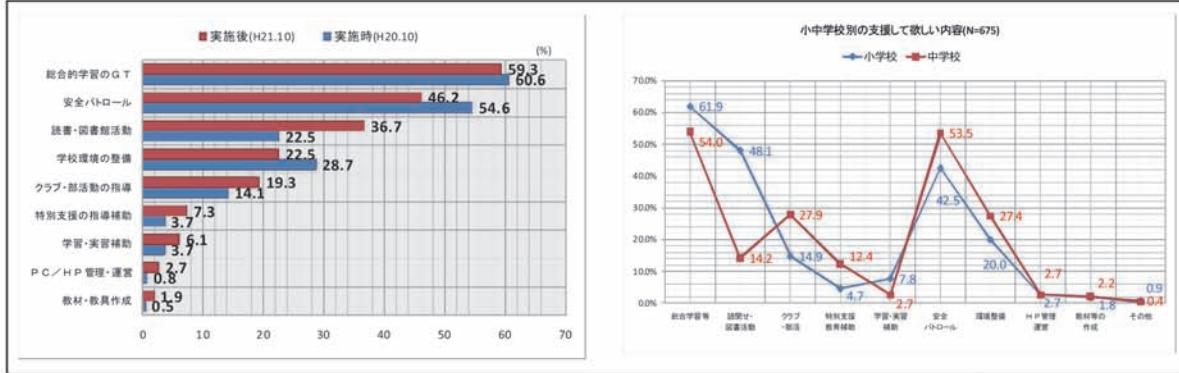
#### 4.1-8 支援して欲しい活動に関するこ

図4.1-8は、地域住民にして欲しい支援活動について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「総合的な学習の時間等におけるゲストティーチャー」が最も多く 59.3%(60.6%)、「安全パトロール」が 46.2%(54.6%)である。「読書・図書館活動」と「学校環境の整備」が昨年の調査と逆転して、それぞれ 36.7%(22.5%)、22.5%(28.7%)となっている。全体の傾向としては昨年の調査とほぼ同じである。また、直接子どもと関わる支援活動については、「ゲストティーチャー」はほぼ同じであるが、「読書・図書館活動」「クラブ・部活動」「特別支援教育の補助」「学習・実習の補助」は多くなっている。

小中学校別に見ると、「総合的な学習の時間等におけるゲストティーチャー」と「読書・図書館活動」についての差が大きく、それぞれ、小学校が 61.9%と中学校が 54.0%、小学校が 48.1%と中学校が 14.2%になっている。特に小学校における「読書・図書館活動」については地域住民の支援を強く望んでいることがわかる。中学校が多いのは「クラブ・部活動」の 27.9%(小学校：14.9%)、「特別支援教育の補助」が 12.2%、(小学校：2.7%)、「安全パトロール」が 53.5%(小学校：52.5%)、「環境整備」が 27.4%(小学校：20.0%)となっている。

図4.1-8 支援して欲しい活動 (N=H21:675, H20:375)



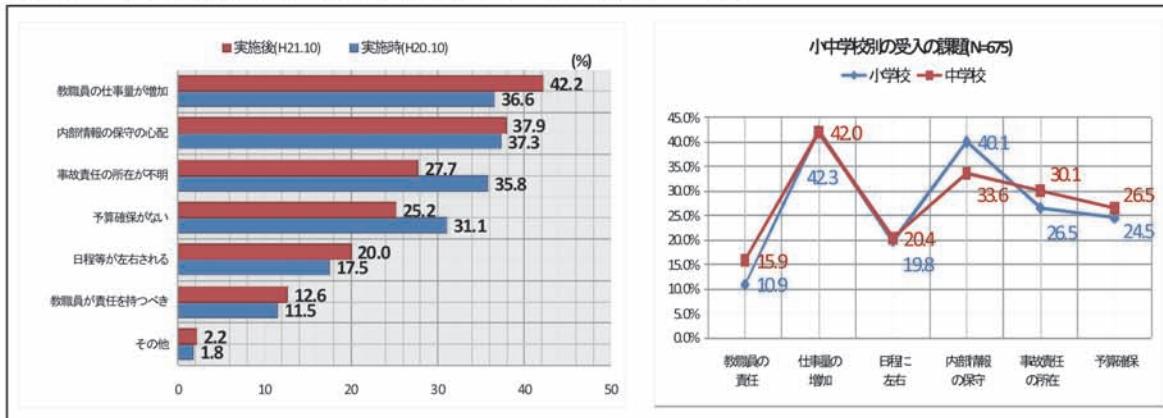
#### 4.1-9 学校支援の受け入れにおける課題に関すること

図4.1-9は、「学校支援が必要でないという理由」(学校支援を受け入れるための課題)について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「学校支援が必要でないという意見もありますが、どのような理由からだと思いますか」について、「教職員の仕事量が増加して多忙になる」が42.2% (36.6%)、「守るべき個人情報・学校の内部情報の保守が心配」が37.9% (37.3%)、「事故責任の所在が不明確」が27.7% (35.8%)、「予算が充分に確保されていない」25.2% (31.1%)の順になってしまっており、昨年の調査と同じ傾向である。しかし、「事故責任の所在」と「予算の確保」は若干少なくなっている。

小中学校別に見ると全く同じ傾向であり、仕事量の増加はともに40%を超えている。違いが見られるのは「学校の教育活動は教職員が責任を持つべき」と「事故責任の所在が不明」が中学校の方が若干多く、「内部情報の保守」は小学校の方が若干多くなっている点であるが、大きな差はみられない。

図4.1-9 学校支援を受け入れるための課題 (N=H21:675, H20:375)



#### 4.1-10 学校支援充実のための行政への要望に関すること

図4.1-10は、学校支援活動を充実するための行政への要望について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「学校支援活動を充実するために行政にして欲しいことは何ですか」という質問について、「予算の確保」が70.5%（75.7%）で最も多く、「コーディネーターの配置」が35.8%（34.2%）、「ボランティアの活動拠点」が21.5%（18.5%）、「地域住民への啓発・広報」が17.3%（20.1%）の順であり、昨年の調査とほぼ同じ傾向であることがわかる。

行政としてはこうした声に耳を傾けて検討する必要があるが、「予算の確保」については、その内容が地域住民と違って「謝金」の確保が多くなっていることから、本当に必要な予算についての検討が求められる。また、「コーディネーターの配置」は「学校支援地域本部事業」の中核として実施しており、この取り組みと他の課題をセットしながら対応することが求められる。

図4.1-10 学校支援活動の充実のために行政に求めること（N=675）



#### 4.1-11 学校支援充実のための学校の取り組みに関すること

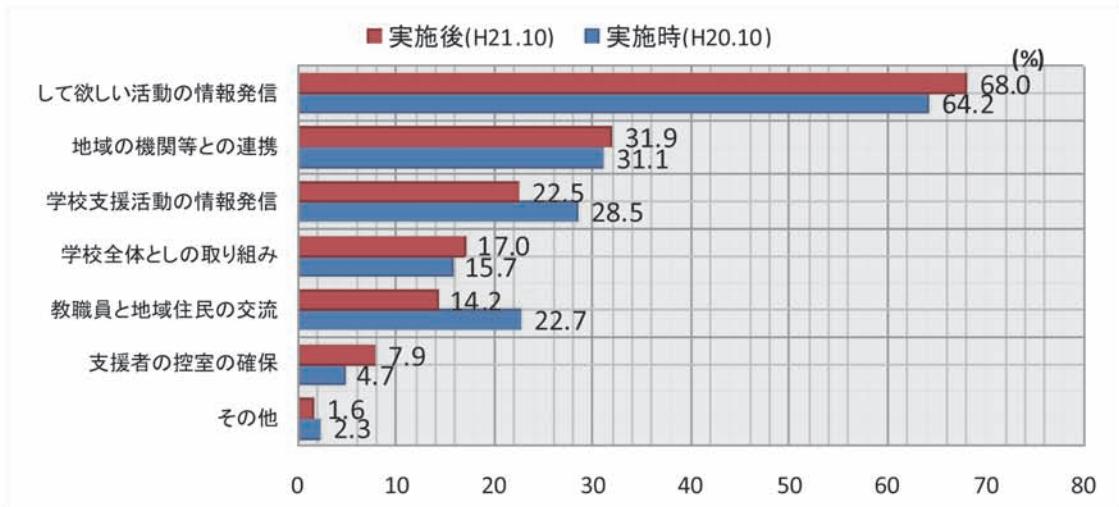
図4.1-11は、学校支援活動を充実するために必要な学校の取り組みについて示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「学校支援活動を充実するために学校は何をしたらいいですか」という質問について、「して欲しい活動の情報発信」が68.0%（64.2%）と最も多く、「地域の機関や団体・組織との連携」が31.9%（31.1%）、「実施している学校支援活動の情報発信」が22.5%（28.6%）、「学校全体としての取り組み」が17.0%（15.7%）、「教職員と地域住民の日常的な交流」が14.2%（22.7%）の順であり、昨年の調査とほぼ同じ傾向であることがわかる。

「学校開放」という観点からも学校からの情報発信は必要であり、地域住民の学校理解を促進するうえで重要な取り組みである。しかし、教職員は情報発信しているが、学校に関心がない地域住民は情報を受け取ろうしないという事実もある。しかし、学校に

関心がある 80.6%の地域住民にも届いていないことが考えられることから、情報発信の方法も工夫する必要がありそうである。

図4.1-11 学校支援活動の充実のために学校すること (N=675)



## 4.2 クロス集計結果及び項目の相関

調査項目においての様々なクロス集計を行ったが、ここでは学校教育への支援活動に関する項目が深いと思われる項目のうち、表 4.2-①から表 4.2-④を参考にして有意な相関がみられる項目を中心に示すこととする。

### 4.2-1 地域住民、家庭、子どもに関する意識のクロス結果

表 4.2-1-①は、地域住民、家庭、子どもに関する意識の相関を示したものである。

子どもへの地域住民の関わりが必要であると回答した教職員ほど「学校への家庭の協力が低下」 (.117\*\*)、子どもの「道徳心等の薄れ」 (.132\*\*)・「学習意欲の低下」 (.143\*\*)を感じているという有意な相関がある。

学校への家庭の協力が低下したと回答した教職員ほど、子どもの「道徳心等の薄れ」 (.339\*\*)、「学習意欲の低下」 (.288\*\*)を感じているという有意な相関があることがわかる。また、子どもの学習意欲が低下したと回答した教職員ほど、子どもの「道徳心等の薄れ」 (.402\*\*)、「学校への家庭の協力が低下」 (.288\*\*)を感じているという有意な相関もある。以下、相関係数が高い関係の項目について以下に図で示すこととする。

表4.2-1-① 地域住民、家庭、子どもに関する意識の相関係数 (N=675)

	住民の関与の必要性	学校へ家庭の協力低下	道徳心等の薄れ	学習意欲の低下
住民の関与の必要性	1	.117(**)	.132(**)	.143(**)
学校へ家庭の協力低下	.117(**)	1	.339(**)	.288(**)
学習意欲の低下	.143(**)	.288(**)	.402(**)	1
道徳心等の薄れ	.132(**)	.339(**)	1	.402(**)

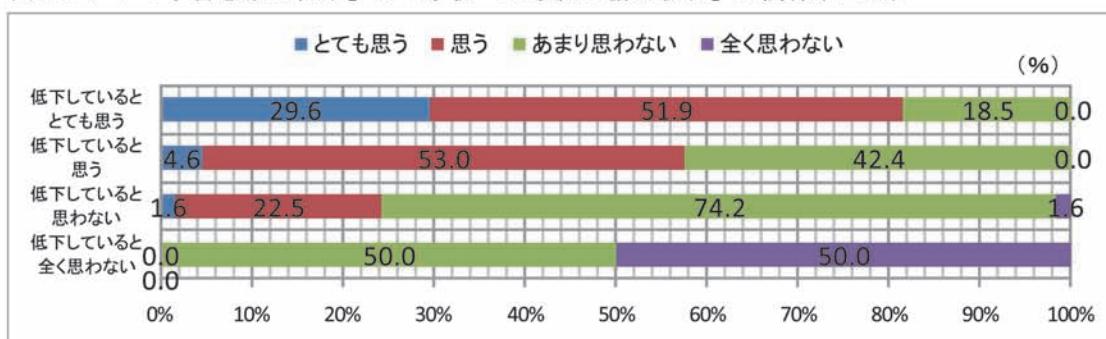
\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

#### 4.2-1-1 「学習意欲の低下」と「学校への家庭の協力状況」の関係

図 4.2-1-1 は、「学習意欲の低下」(縦軸) と「学校への家庭の協力状況」(横軸) に関する意識の関係を示したものである。

この図からわかるように、「学習意欲が低下している」と回答した教職員ほど「学校へ協力的でない家庭が多い」と回答している。

図4.2-1-1 「学習意欲の低下」と「学校への家庭の協力状況」の関係 (N=675)

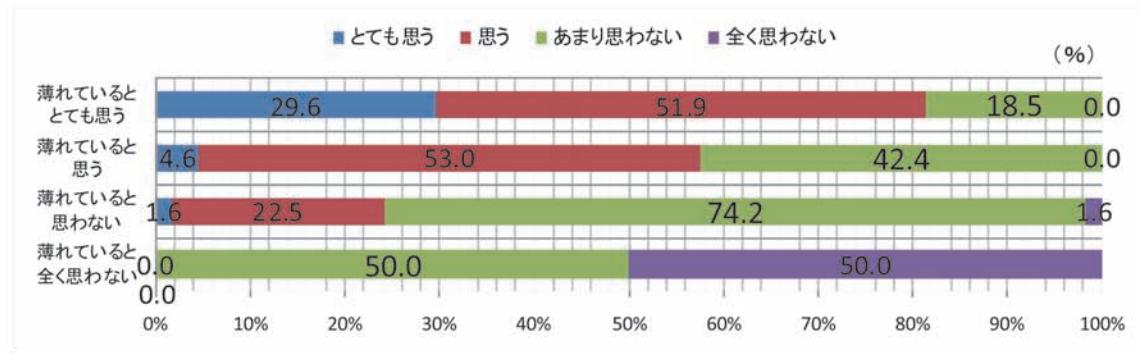


#### 4.2-1-2 「道徳心や公共心の薄れ」と「学習意欲の低下」の関係

「道徳心や公共心の薄れ」（縦軸）と「学習意欲の低下」（横軸）の関係を示したもののが図4.2-1-2である。

この図からわかるように、「道徳心や公共心が薄れている」と回答した教職員ほど、「学習意欲が低下している」と回答している。

図4.2-1-2 「道徳心や公共心の薄れ」と「学習意欲の低下」の関係 (N=675)

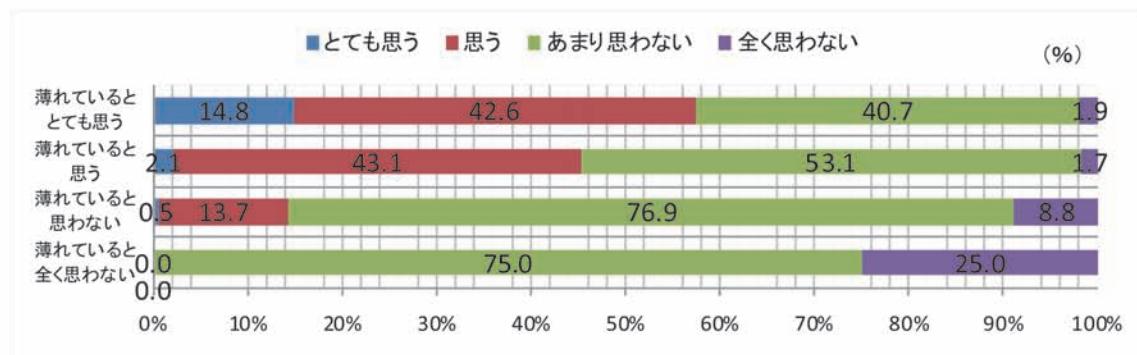


#### 4.2-1-3 「道徳心や公共心の薄れ」と「学校への家庭の協力状況」の関係

「道徳心や公共心の薄れ」（縦軸）と「学校への家庭の協力状況」（横軸）の関係を示したものが図4.2-1-3である。

この図からわかるように、「道徳心や公共心が薄れている」と回答した教職員ほど、「学校へ協力的でない家庭が多い」と回答している。

図4.2-1-3 「道徳心や公共心の薄れ」と「学校への家庭の協力状況」の関係 (N=675)



## 4. 2-2 学校支援に関するクロス結果

学校支援に直接関係する特徴的な有意な相関を示したものが表 4.2-2-①である。「学校支援の必要性」「学校支援の受入状況」、そして、効果として期待される「校内活動への関心等」「授業への理解力等」に関する相関を示したものである。「学校支援の必要性」と「学校支援の受入の状況」についての.200\*\*以上の有意な相関が見られる項目について分析してみると

「学校支援の必要性」については、

- ①小学校の教職員ほど「学校支援が必要である」と回答している。(.257\*\*)
- ②必要性を感じている教職員ほど、「地域住民が子どもに積極的に関わる必要がある」と回答している。(.332\*\*)
- ③必要性を感じている教職員ほど、「校内活動への関心等」(-.298\*\*), 「授業への理解力等」(-.298\*\*)の向上に効果が期待できると回答している。

「学校支援の受入状況」については、

- ①小学校の教職員ほど「学校支援を受け入れている」と回答している。(.338\*\*)
- ②支援の受入実績があるほど、「授業への受入計画がある」と回答している。(.410\*\*)
- ③学校支援を受け入れているほど、「校内活動への関心等」(-.229\*\*)の向上に効果が期待できると回答している。しかし、課題として「教職員のゆとり」については、マイナスの有意な相関 (.166\*\* : 「ゆとりは期待できない」) がみられる。

また、「学校支援の必要性」と「学校支援の受入状況」については、同じ傾向があることから、「学校支援の必要性」と他の項目との関係の図 4.2-2-1 に示すこととする。さらに、効果として期待される「校内活動への関心等」「授業への理解力等」との関係についても、「学校支援の必要性」との関係の図 4.2-2-1 に示すこととする。

この表には示していないが、教職員の年齢と有意な相関がみられた項目は、若い教職員ほど、学校支援ボランティアの発掘・依頼をする(-.238\*\*)と、年配の教職員ほど環境整備の学校支援を期待している(-.204\*\*)関係が高くなっているが、他の項目には高い有意な相関はみられなかった。また、勤務年数においては、学校支援に関する.200\*\*以上の高い有意な相関はみられなかった。

表4. 2-2-① 学校支援に関する項目の相関係数 (N=675)

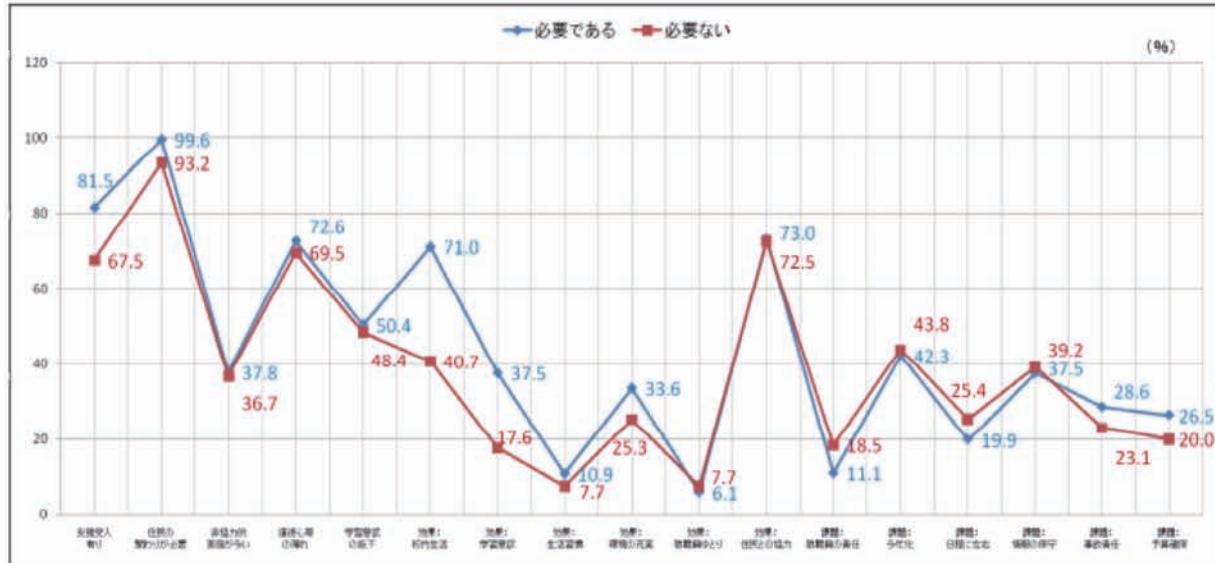
	小中校種	住民の関与	支援必要性	支援受入状況	授業計画無	校内活動	授業理解等	教職員のゆとり
支援必要性	.257 (**)	.332 (**)	1	.179 (**)	.129 (**)	-.298 (**)	-.298 (**)	-.014
支援受入状況	.338 (**)	.062	.179 (**)	1	.410 (**)	-.229 (**)	-.166 (**)	.166 (**)
校内活動等	-.152 (**)	-.178 (**)	-.298 (**)	-.229 (**)	-.186 (**)	1	.201 (**)	-.014
授業の理解等	-.233 (**)	-.07	-.217 (**)	-.166 (**)	-.214 (**)	.201 (**)	1	.002

図 4.2-2-1 は、学校支援が「必要である」(80.6%)と「必要でない」(19.4%)の回答に分けて、他の項目との関係の比較を示したものである。

「必要である」と回答した教職員と「必要でない」と回答した教職員との差が大きい

項目について見てみると、効果としての「校内活動への関心等」(71.0%と 40.7%)、「授業への意欲等」(37.5%と 17.6%)、「受入実績」(81.8%と 67.5%)、「学校の施設・環境の整備」(33.6%と 25.3%)、課題としての「自己責任の所在」(28.6%と 23.1%)、「予算の確保」(26.5%と 20.0%)である。逆になっているのは、差は少ないが「学校教育は教職員が責任を持つ」と「日程に左右される」ということを指摘している。他の項目にはほとんど差がないことがわかる。

図4.2-2-1 学校支援の「必要性」と他の項目の比較(N=675)



#### 4.2-3 教科の学習への受入実績と受入計画のクロス結果

表 4.2-3 は、教科の学習への学校支援の受入実績（縦軸）と年間の受入計画（横軸）の相関を示したものである。

この表について、総合的な学習の時間等のゲストティチャー (G T) も、学習等へのサポーター (学習 S) も、受入実績（縦軸）を横に見ていくと、きちんと受入計画があるという .200\*\*以上の有意な相関を示している。特に、学習 S の 7 回以上の実績のある教職員は、7 回以上の受入計画がある (.354\*\*) という高い有意な相関がみられる。また、実績がない教職員は計画もない (.350\*\*) という相関があることもわかる。

表4.2-3 教科の学習への学校支援の受入実績（縦軸）と年間の受入計画（横軸）の相関係数

	GT 1～3回	GT 4～6回	GT 7回～	学習 S1～3回	学習 S4～6回	学習 S7回～	無
GT 1～3回	.305 (**)	.206 (**)	.019	.023	.057	-.051	-.077
GT 4～6回	-.123 (**)	.121 (**)	.298 (**)	-.044	.106 (*)	.123 (**)	-.07
GT 7回～	-.090 (*)	.052	.252 (**)	.028	.101 (*)	.078	-.051
学習 S1～3回	-.007	.014	.046	.219 (**)	.238 (**)	.082	-.059
学習 S4～6回	-.057	.006	-.036	-.011	.175 (**)	.143 (**)	-.05
学習 S7回～	-.032	-.012	.105 (*)	-.065	-.038	.354 (**)	-.023
無	.100 (*)	-.094 (*)	-.087	.012	-.096 (*)	-.111 (*)	.350 (**)

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

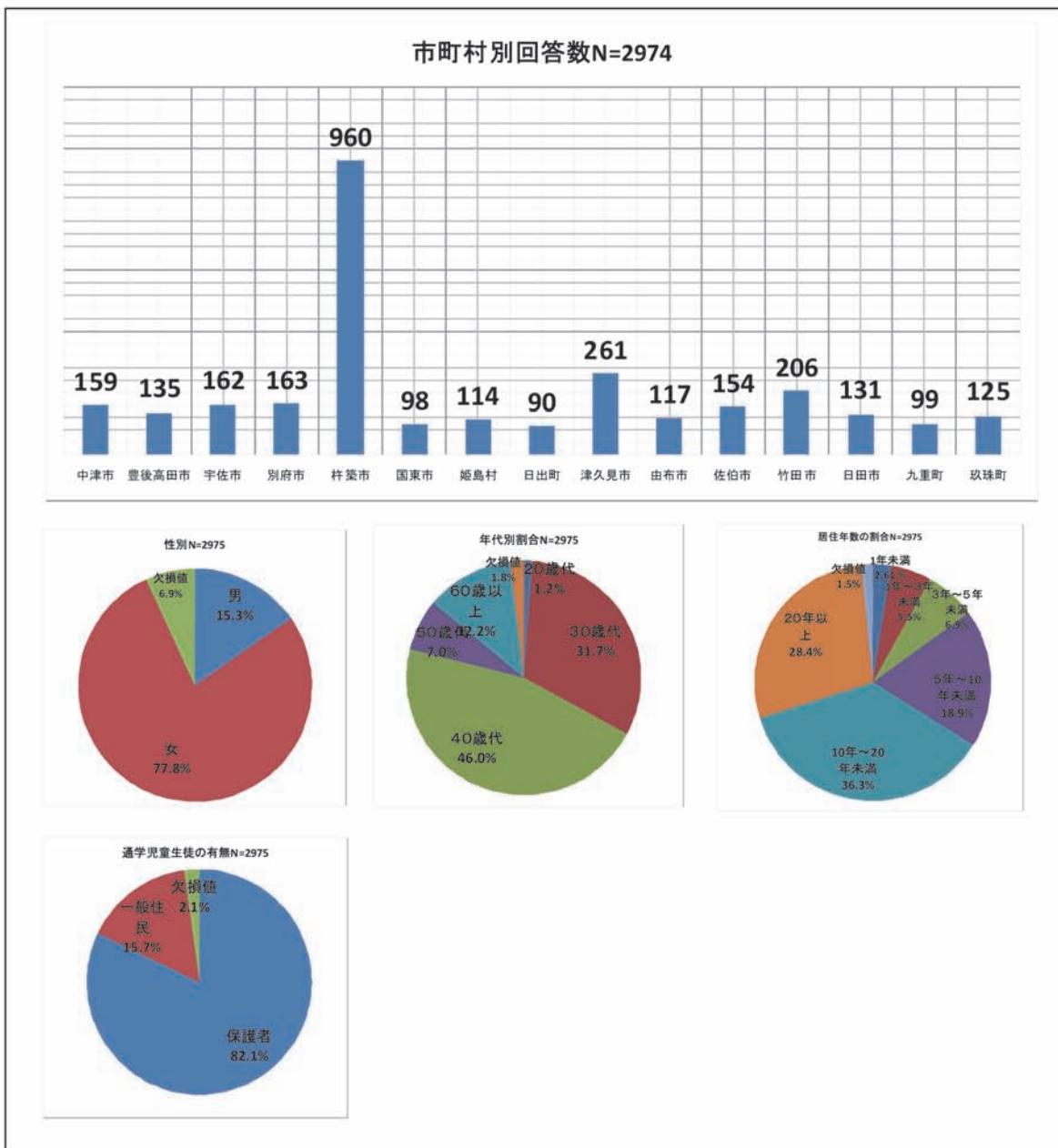
## 第5章 地域住民の調査の結果

### 5.1 単純集計結果

#### 5.1-1 地域住民に関する基礎データ

表1の調査対象一覧表により調査したものを、基礎データとして市町村別、性別、年代別、居住年数別、通学児童生徒の有無を示したものが図5.1-1である。学校支援地域本部の規模によって、市町村別のデータ数が異なっている。

図5.1-1 地域住民に関する基礎データ (N=2973)



## 5.1-2 家庭や居住する地域に関すること

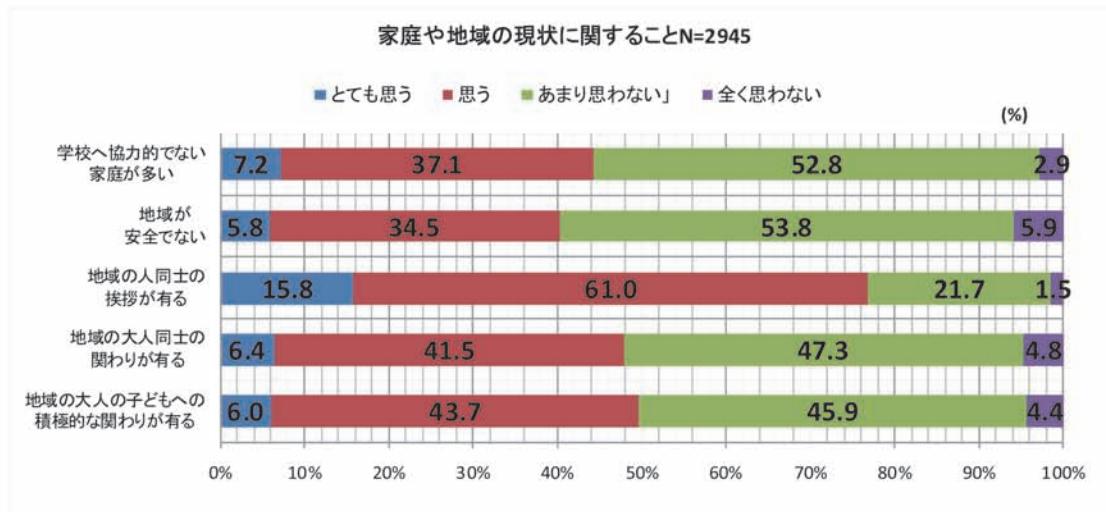
図 5.1-2 は、最近の家庭や地域の現状を見ての状況について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

家庭に関しては、「学校に協力的でない家庭が多いと思いますか」については、「多い」が 44.3% (37.1%) で、昨年の調査と比べて少し多くなっている。

地域に関しては、「地域が安全でなくなってきたと思いますか」については、「安全でなくなった」が 40.3% (37.0%) となっている。地域の人同士の繋がりに関する項目については「挨拶をする」が 76.8% (88.2%)、「大人同士の関わりがある」が 47.9% (61.7%) となっており、昨年の調査と比べて少なくなっている。

地域住民の子どもへの関わりについて、「大人が子どもに積極的に関わっていると思いますか」については、「関わっている」が 49.7% (68.0%) となっており、昨年の調査と比べてかなり少なくなっている。

図5.1-2 最近の家庭や地域住民の状況 (N=2945)



## 5.1-3 地域の子どもに関すること

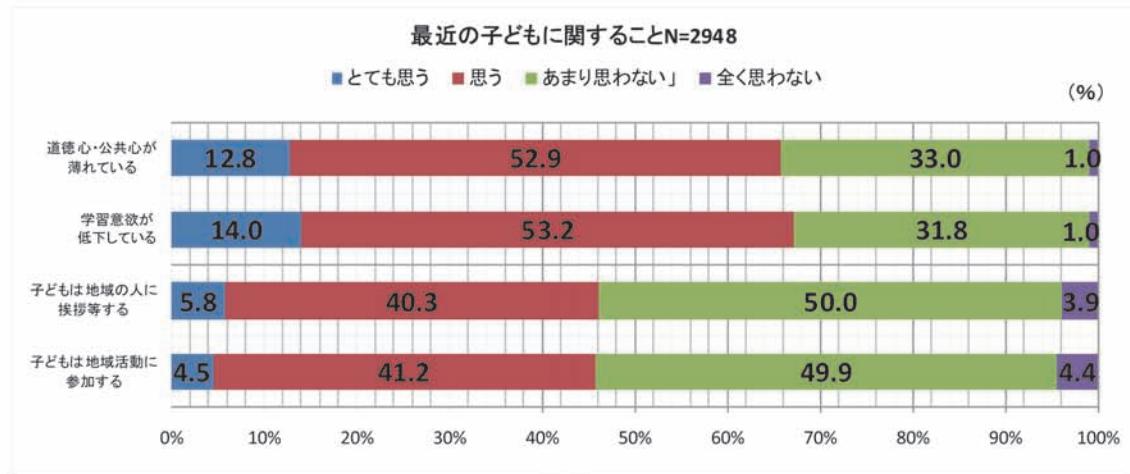
図 5.1-3 は、最近の地域の子どもの様子についての状況を示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

子ども自身の問題として、「子どもたちの道徳心や公共心が薄れていますか」については、「薄れている」が 65.7% (66.1%)、「子どもたちの学習意欲が低下していますか」については、「低下している」が 67.2% (42.0%) となっている。このことから、子どもに関しては、70%近くの地域住民が「学習意欲の低下」も「道徳心や公共心の薄れ」も同じように感じていることがうかがえる。

子どもの地域への関わりについて、「子どもは地域の人に挨拶したりしますか」については、「挨拶等をする」が 46.1% (地域の人への挨拶に関する子どもの意識：「挨拶す

る」が85.9%)、「地域の活動に参加しますか」については、「参加する」が45.7%（地域活動への参加に関する子どもの意識：「参加する」が63.4%）となっており、子どもの意識と地域住民の感じ方の差がうかがえる。

図5.1-3 地域の子どもの状況 (N=2948)



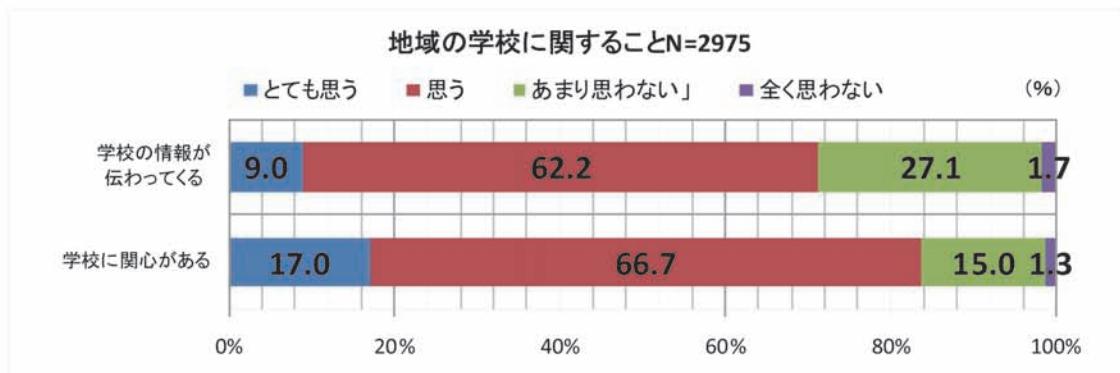
#### 5.1-4 地域住民の学校への意識に関すること

図5.1-4-1は、学校の教育活動に直接関係する、「学校からの情報発信」と、地域住民の「学校への関心」について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「学校の行事などの情報が伝わってきますか」については、「伝わってくる」が71.2% (73.3%)、「あなた自身は学校に関心がありますか」については、「関心がある」が83.7% (73.6%)となっている。

のことから、学校教育活動への支援に関する各種条件は70%以上が満たされていることとなるが、「あなたは、今後、学校教育活動へ支援をしますか」等の項目とのクロスについては、後述することとする。

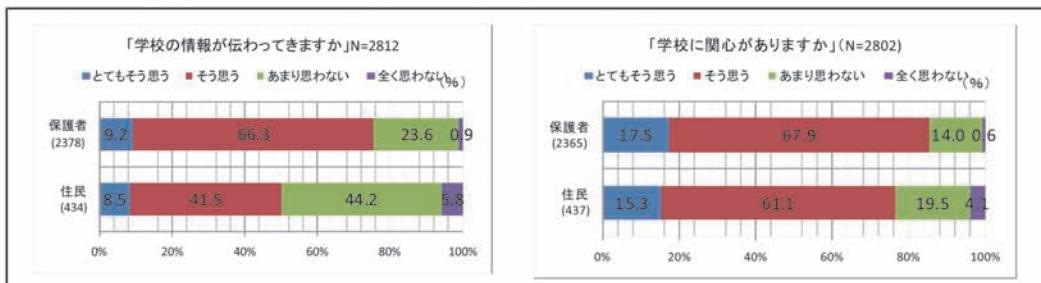
図5.1-4-1 地域住民の学校への意識に関する状況 (N=2975)



また、図 5.1-4-2 は、「学校からの情報発信」と「学校への関心」について、保護者（子どもが小中学校に通学している）と住民（小中学校に通学している子どもがいない）別に示したものである。

「学校からの情報発信」については、住民には伝わりにくいことがわかる。しかし、学校への関心は、保護者の 85.4%に対して、住民が 76.4%もあることから、住民への情報提供の充実が今後の重要な取り組みになるのではないだろうか。

図5.1-4-2 保護者と住民別の学校への意識に関する状況

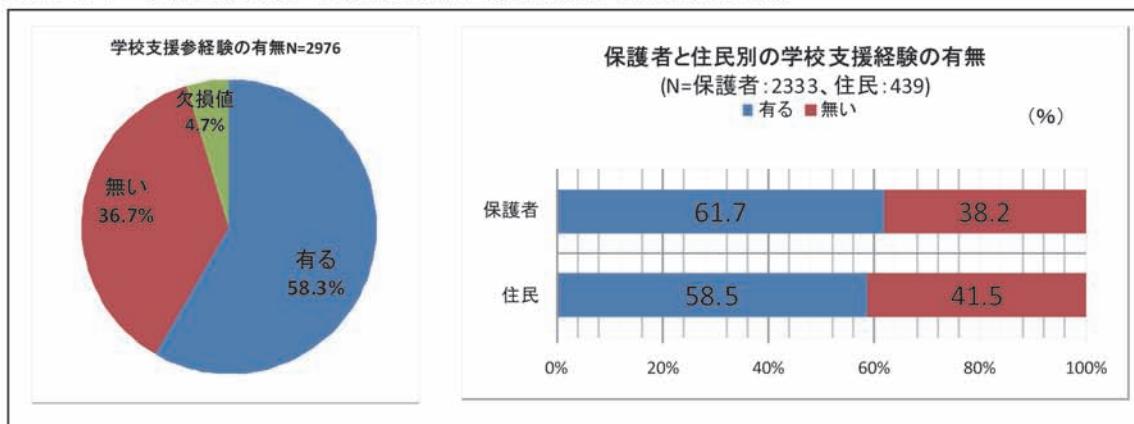


### 5.1-5 学校支援活動への参加経験に関すること

図 5.1-5-1 は、地域住民がこれまでの学校教育への支援を行ってきた状況に関すること示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

「今まで学校に対するボランティア活動に参加したことがありますか」については、「ある」が 58.3(50.9%)となっており、そのうち、通学する子どもがいる保護者は 61.7% (58.9%)、通学する子どもがいない住民では 58.5% (37.5%)となっており、昨年の調査より多くなっている。

図5.1-5-1 学校支援活動への参加経験の有無に関する状況 (N=2976)



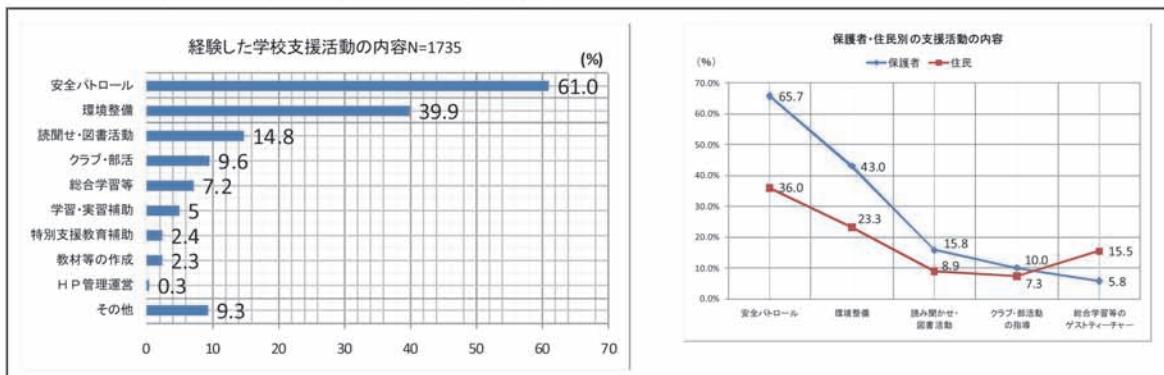
また、図 5.1-5-2 は、学校支援活動の経験がある人の「経験した学校支援活動の内容」について示したものである。

「安全パトロール」が最も多く 61.0% (32.9%)、次いで「環境整備」が 39.9% (25.2%)、

「読み聞かせや図書活動」が 14.8% (6.3%)、「クラブ・部活動指導」が 9.6% (5.6%) の順になつておつり、ほとんどの活動内容において昨年の調査より多くなつてゐる。

保護者と住民を比較すると、回答者数が大きく違うために実際の支援者数はすべて保護者が多いが、それぞれの割合としては、ゲストティチャーは住民の方が多く、クラブや部活動の指導はほぼ同じで、その他の活動についても多くの住民が参加していることがわかる。

図5.1-5-2 参加した学校支援活動の内容に関する状況 (N=1735)



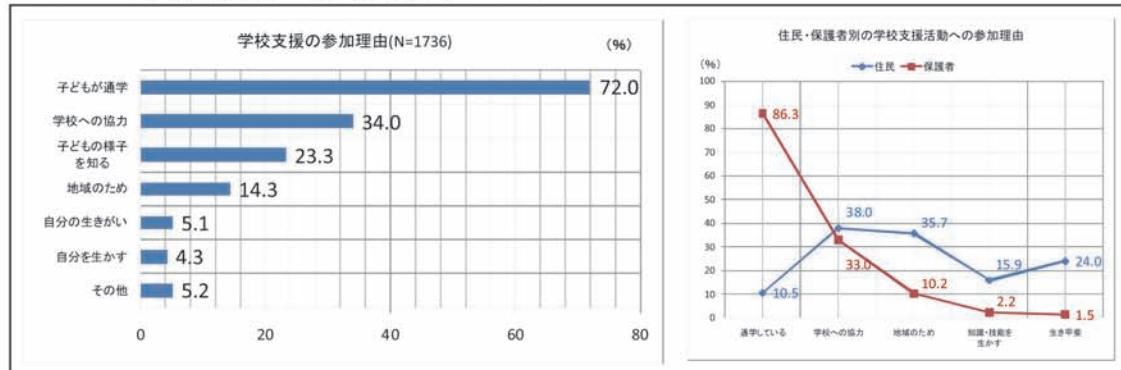
## 5.1-6 学校支援活動への参加理由に関するここと

図5.1-6は、学校支援活動を経験した人の参加の理由を示したものである。しかし、回答者数(保護者:1440、住民:257)に大きく差があるために、住民と保護者を分けてそれぞれの割合も示すこととした。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

学校支援への参加理由は「子どもが通学している」という保護者の立場からが 72.0% (32.8%)、「学校の教育活動に協力したい」が 34.0% (20.2%)、「学校での子どもの様子を知りたい」が 23.3% (11.5%)、「地域のためになる」が 14.3% (10.5%) の順になつておつり、昨年の調査と比べてすべての項目で多くなつておつり、傾向としては全く同じである。

住民と保護者を比較して差が大きいのは、通学生の有無は別として、「地域のためになる」が住民: 35.7%・保護者: 10.2%、「自分の知識・技能を生かしたい」が住民: 15.9%・保護者: 2.2%、「自分の生きがいになる」が住民: 24.0%・保護者: 1.5%となつておつり、参加理由には違いが見られる。

図5.1-6 学校支援活動への参加理由 (N=1736)



## 5.1-7 学校支援活動へ参加しての自分の変化に関すること

図 5.1-7-1 は、学校支援活動を経験した人の、参加してからの自分の変化について示したものである。さらに文章中の（ ）内は昨年の状況を示している。

自分の変化については「学校や子どもの様子がわかつてきた」が 50.5% (53.2%) と最も多く、学校を知っていたらしくという、学校支援活動の大きな目的が果たせることがわかる。次いで、「人と知り合う機会が増えた」が 44.2% (43.7%)、「子どもへの関心が高まった」が 30.8% (34.7%)、「周囲の人と学校の話題を話すようになった」が 19.6% (21.2%) の順になっており、昨年の調査と全く同じ傾向である。また、少数ではあるが、「地域のために何かやってみたいと考えるようになった」「生活に張りができた」などもある。

のことから、学校支援活動の目的としての地域住民の学校理解や自分自身の生きがい、大人同士の繋がりなどに効果が期待できることがわかる。

図5.1-7-1 学校支援活動へ参加しての自分の変化 (N=1743)

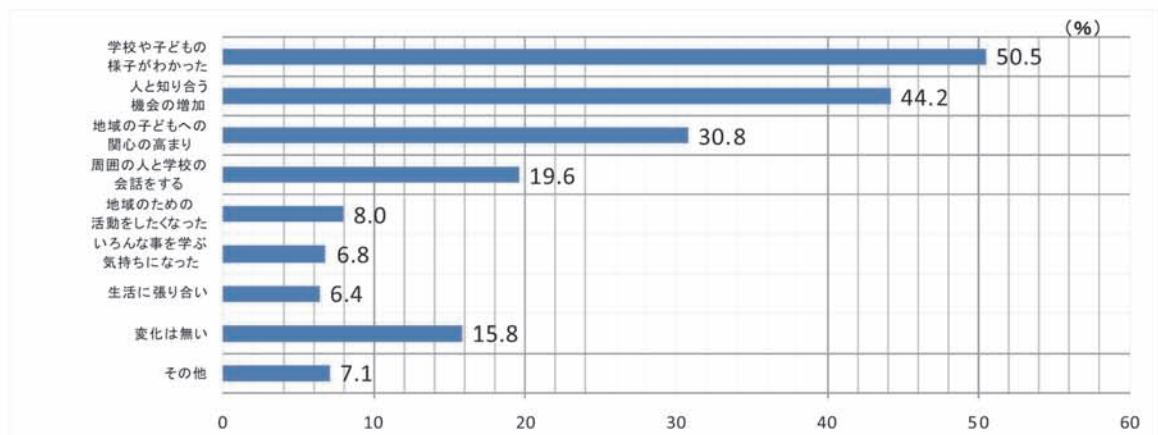
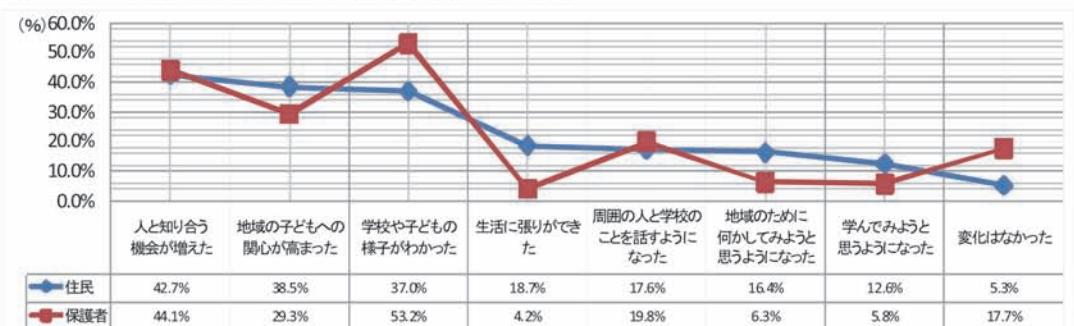


図 5.1-7-2 は、自分の変化について、住民と保護者別に示したものである。

住民と保護者の変化に差が見られるのは、「子どもへの関心が高まった」が住民：38.5%、保護者：29.3%、「学校や子どもの様子がわかつてきた」が住民：37.0%、保護者：53.2%、「生活に張りができた」が住民：18.7%、保護者：4.2%、「地域のために何かやってみたいと考えるようになった」が住民：16.4%、保護者：6.3%、「変化はなかった」などとなっている。「人と知り合う機会が増えた」や「周囲の人と学校の話題を話すようになった」は住民も保護者も同じである。のことから、住民は自分自身の生き方に関する変化があり、保護者は子ども理解への変化と「変化がなかった」という特徴がみられる。

図5.1-7-2 住民と保護者別の自分の変化 (N=1743)



## 5.1-8 学校支援の必要性と今後の学校支援活動への参加意志に関すること

図 5.1-8-1 は、学校支援の必要性と、今後の学校への支援活動に参加する意思について示したものである。また、学校支援の必要性や今後の支援活動の意思については、住民と保護者別にも示すこととした。さらに文章中の( )内は昨年の状況を示している。

学校支援の必要性については、「必要と思う」が 80.5%と、学校支援の必要性を感じている地域住民が多いことがわかる。また、住民では 86.2%、保護者は 79.6%となっており、住民も子どもへの関心が高いこと、多くの保護者が学校支援の必要性を感じていることがわかる。

「あなたは、今後、学校支援の活動に参加しますか」については、「参加したいと思う」が 68.7%(61.3%)となっており、「学校支援の必要があると思う」の 80.5%と比較すると少なくなっている。このことは、学校支援は必要だが、「学校へ行って活動する（学校を支援する）」ことへの抵抗や「地域で子どもに関わる活動をしたい」、「必要だが自分はできない（したくない）」などが考えられる。また、住民では 66.8%、保護者は 69.3%が「参加したい」と回答しており、このことからも、学校支援の必要性や住民の学校（子ども）への関心の高さがうかがえる。

図5.1-8-1 学校支援の必要性と今後の学校支援活動への参加意志 (N=2817)

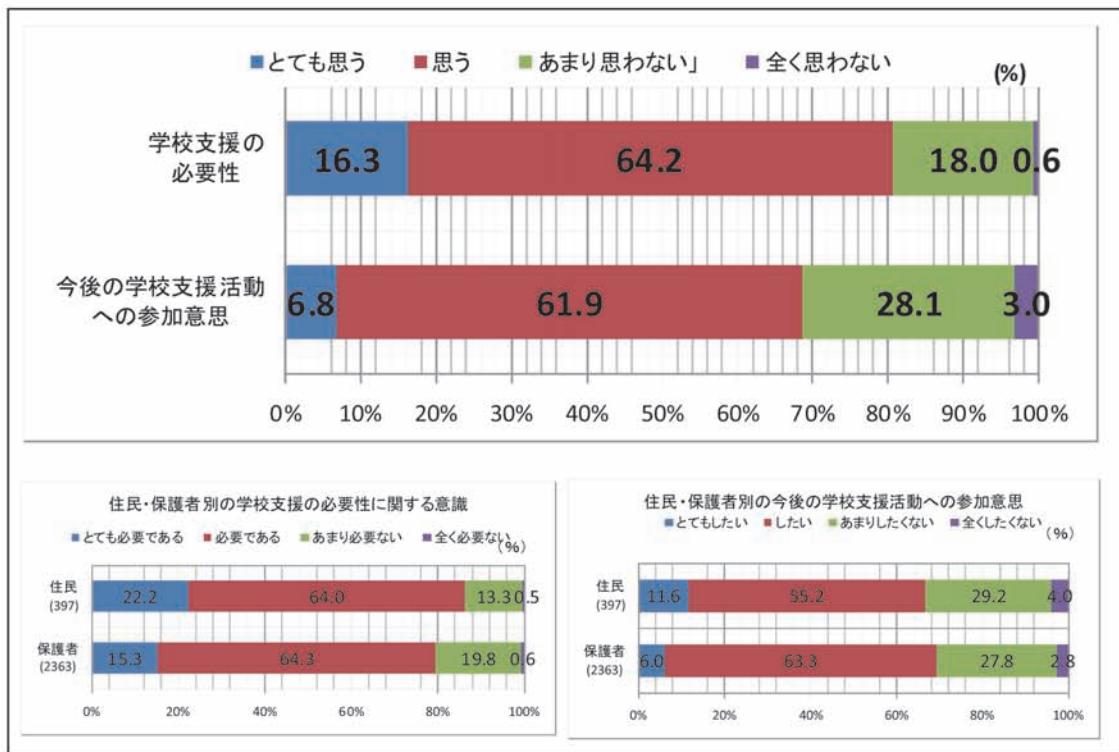
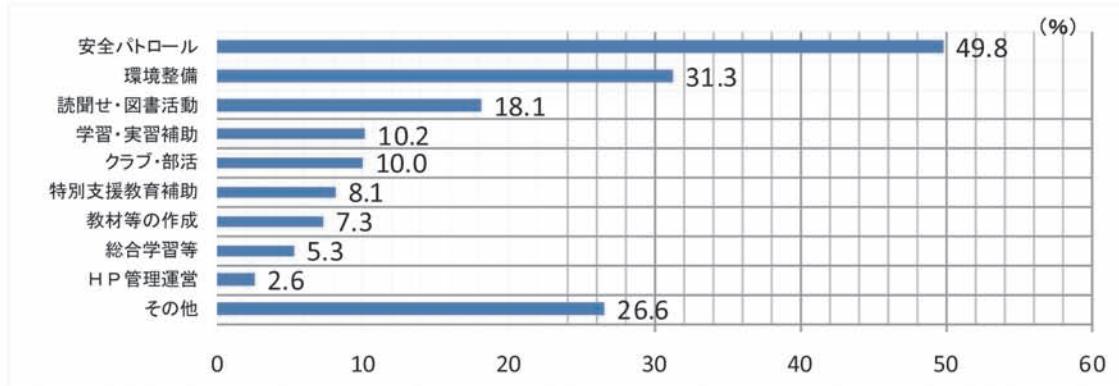


図 5.1-8-2 は、学校支援活動に参加するとなったらどんな活動に参加するかを示している。さらに文章中の( )内は昨年の状況を示している。

参加したい活動内容として最も多いのが「安全パトロール」で 49.8%(45.2%)、次いで、「環境整備」が 31.3%(31.7%)、「読み聞かせ・図書活動」が 18.1%(14.4%)の順にな

っている。また、教職員が要望する支援活動で最も多かった「総合学習等でのゲストティーチャー」(教職員：59.3%)は、今回も 5.3%と少なくなっており、全体としては昨年の調査と同じ傾向である。

図5.1-8-2 学校支援へ参加したい（してもいい）活動内容(N=2817)



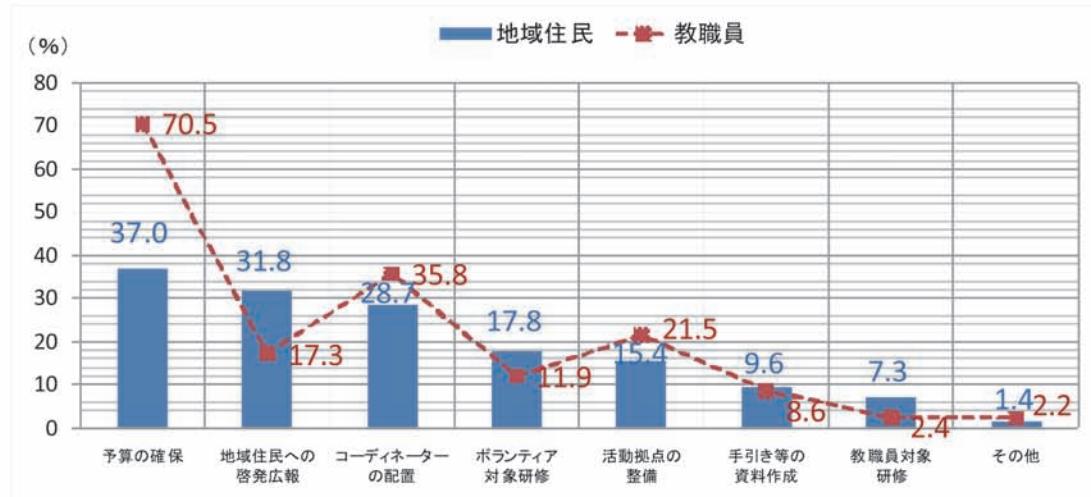
### 5.1-9 学校支援充実のための行政への要望に関すること

図 5.1-9 は、地域住民が学校への支援活動を充実するために行政にして欲しいことを示し、参考として教職員の要望を折れ線で重ねて表したものである。さらに文章中の( )内は昨年の状況を示している。

「活動に必要な予算の確保」が 37.0%(38.6%)、「地域住民への啓発・広報」が 31.8% (29.3%)、「コーディネーターの配置」が 28.7%(25.0%)の順になっている。この中で地域住民と教職員の意識の開きが大きいのは、「予算の確保」と「地域住民への啓発・広報」、「コーディネーターの配置」などとなっており、全体としては昨年の調査と同じ傾向である。

予算の確保についての大きな違いは、教職員は「謝金」が大きく、地域住民は「原材料費等の必要経費」ということが聞き取り調査でわかっている。

図5.1-9 学校支援活動をするための行政の役割 (N=2969)

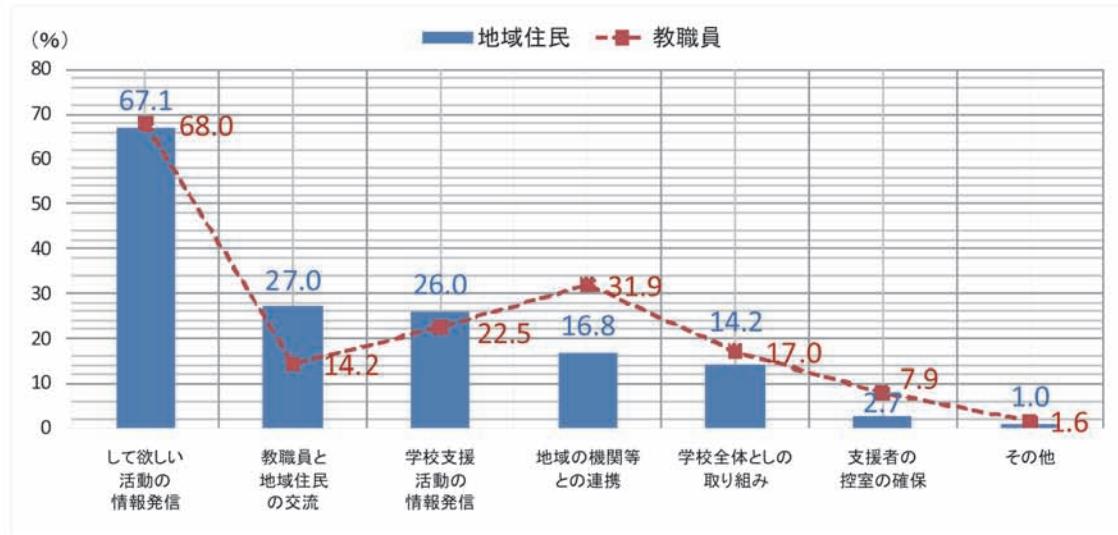


## 5.1-10 学校支援活動をするための学校の役割に関すること

図 5.1-10 は、地域住民が学校への支援活動を行うために学校にして欲しいこと（学校がすること）を示し、参考として教職員の要望を折れ線で重ねて表したものである。さらに文章中の( )内は昨年の状況を示している。

「学校がして欲しい活動を情報発信する」が 67.1% (59.4%)、「教職員（学校）と地域住民の交流機会をつくること」が 27.0% (24.8%)、「学校での支援活動の状況を情報発信する」が 26.0% (26.0%) となっており、日常からの情報提供や教職員との交流を望んでいることがわかる。その他、「地域の機関や自治会と連携すること」が 16.8% (24.8%)、「学校全体としての取り組み」が 14.2% (12.9%) となっており、全体としては昨年の調査と同じ傾向である。

図5.1-10 学校支援活動をするための学校の役割 (N=2969)



## 5.2 クロス集計結果及び項目の相関

調査項目において、地域住民（保護者及び住民）の意識等について様々なクロス集計をおこない、その相関係数を示したものが表 5.2-1 及び表 5.2-2-1～表 5.2-2-5 である。表に示す項目においては、ほとんどが有意な相関 ( $** p < 0.01$ ) を示しており、昨年の調査結果と同様の傾向がみられるため、その概要を整理することとし、直接学校支援と関係しない項目についての詳細なグラフは示さないこととする（参考：昨年の調査報告書）。次に、学校教育への支援活動に関係が深いと思われる項目のうち、高い有意な相関がみられる項目について分析することとする。

### 5.2-1 相関係数から見た保護者と住民の傾向

保護者と住民を比較すると、子どもへの感じ方や、学校支援活動に参加する趣旨が違うだろうと推測できるために、まず、保護者と住民の相関（平成 20 年調査と平成 21 年調査）を示したものが表 5.2-1 である。保護者と住民が同様の傾向があるものについては、相互の違いがないことから、ここでは、保護者と住民の相関係数から分析を行うこととし、有意な相関がある項目 (.100\*\*以上) と、有意な相関はないが参考となる項目について示したものである。表の相関係数の数値については、回答・集計する際のデータとの関係でプラス、マイナスが逆になることから、その数値から傾向を右に示した。

この表から見えてくるものは納得できることがほとんどであるが、今年（H 21 調査）の調査を中心にして一応の考察をおこなうこととする。

まず、表を見ると .100\*\*以上の有意な相関を示しているものの、.200\*\*以上の比較的高い数値を示すものについては、「安全パトロール」 (-.219\*\*) であり、保護者ほど活動しているという傾向がある。また、参加理由の「地域のためになる」 (.262\*\*)・「自分の知識・技能を生かしたい」 (.245\*\*)・「自分の生きがいになる」 (.372\*\*)、さらに、参加しての自分の変化として「生活に張りが出てきた」 (.214\*\*) は、住民ほどそう思っている（感じている）ことがわかる。

その他の項目には有意な相関はあるものの高い傾向とは言えない。また、表の上段に示した「学校支援の必要性」と「今後の学校支援活動への参加意思」については、保護者と住民の相違は見られないことがわかる。

以上のことから、保護者と住民の意識や活動には大きな相違はみられず、住民ほど、「地域のため」「自分のため」という傾向が見られるに止まることがわかった。

表5.2-1 保護者と住民の意識の傾向 (N=H20:2127, H21:2975)

保護者と住民のが見られるもの (.100**以上)	H20調査	H21調査	傾 向
地域の大人が子どもや学校支援に関わる必要があると思いますか	(.1以下)	(.1以下)	傾向無し
あなたは、今後、学校へのボランティア活動をしたいと思いますか	(.1以下)	(.1以下)	傾向無し
自分が住んでいる地域では、地域の大人が積極的に子どもに関わっている	.131**	(.1以下)	保護者>住民
子どもたちの学習意欲が低下している	(.1以下)	.139**	保護者>住民
学校の行事などの情報がよく伝わってきてている	.172**	.180**	保護者>住民
(あなた自身は) 地域の学校に 관심がある	.136**	(.1以下)	保護者>住民

今まで学校へのボランティア活動に参加したことがありますか	.193**	(.1以下)	保護者>住民
経験した活動は何ですか			
特別な支援が必要な子どもの指導補助	.152**	(.1以下)	保護者<住民
ゲストティーチャーとしての総合的な学習の時間等の活動	(.1以下)	.131**	保護者<住民
登下校時における安全パトロール	-.158**	-.219**	保護者>住民
花壇の整備・校舎の補修や清掃	-.155**	-.145**	保護者>住民
参加のきっかけは何ですか			
学校だより等を見て		(未調査)	保護者>住民
授業参観等での募集で	-.130**	(未調査)	保護者>住民
市町村の広報紙を見て	.162**	(未調査)	保護者<住民
既に参加している人やコーディネーターに誘われて	.136**	(未調査)	保護者<住民
参加の理由は何ですか			
子どもが学校に通学している	-.582**	-.589**	保護者>住民
地域のためになる	.247**	.262**	保護者<住民
自分の知識・技能を生かしたい	.106**	.245**	保護者<住民
学校での子どもの様子を知りたい	-.117**	(.1以下)	保護者>住民
自分の生きがいになる	.284**	.372**	保護者<住民
参加して自分にどのような変化がありましたか			
生活に張り合いが出てきた	.181**	.214**	保護者<住民
地域の子どもに関心が深まった	.121**	(.1以下)	保護者<住民
学校や子どもの様子がわかつってきた	-.111**	-.115**	保護者>住民
いろいろなことを学んでみようと思うようになった	.117**	(.1以下)	保護者<住民
学校以外にも地域のために何かやってみたいと考えるようになった	.257**	.135**	保護者<住民
あまり変化はない。	(.1以下)	-.122**	保護者>住民
今後どんな学校支援活動をしたいですか			
ゲストティーチャー（講師）としての総合的な学習の時間等の活動	(.1以下)	.152**	保護者<住民
学校へのボランティア活動をするための要望は何ですか			
行政への要望：活動に必要な予算を確保すること	-.188**	(.1以下)	保護者>住民
学校への要望：学校が必要としているボランティアの内容を発信すること	-.124**	-.130**	保護者>住民

\*\*p<.001

## 5.2-2 相関係数から見た傾向

### 5.2-2-1 地域（大人）の状況

表 5.2-2-1 は、地域（大人）の状況、家庭の状況、子どもの状況、学校支援に関するここと（縦軸）と、地域（大人）の状況（横軸）の相関係数を示したものである。傾向としては昨年の調査とほぼ同様であるために、横軸から見た概況(.200\*\*以上)のみを整理することとする。その際、重複する項目は省略することとする。

「①地域の人が子どもに関わっている」と回答した人ほど、「大人同士の交流あり」(.594\*\*)、「大人相互の挨拶あり」(.415\*\*)、「子どもの挨拶等あり」(.313\*\*)、「子どもの地域活動への参加あり」(.369\*\*)、「学校の情報伝達あり」(.273\*\*)、「学校へ関心あり」(.248\*\*)に有意な相関がみられる。

「②地域の大人同士の交流が盛んである」と回答した人ほど、「大人相互の挨拶あり」

(.524\*\*), 「子どもの挨拶等あり」 (.299\*\*), 「子どもの地域活動への参加あり」 (.406\*\*), 「学校の情報伝達あり」 (.240\*\*), 「学校へ関心あり」 (.227\*\*) に有意な相関がみられる。

「③地域の大人が挨拶する」と回答した人ほど、「子どもの挨拶等あり」 (.383\*\*), 「子どもの地域活動への参加あり」 (.356\*\*), 「学校の情報伝達あり」 (.245\*\*), 「学校へ関心あり」 (.223\*\*) に有意な相関がみられる。

「④地域が安全でなくなった」と回答した人ほど、「学校に協力的でない家庭が多い」 (.266\*\*), 「子どもの道徳心等の薄れ」 (.273\*\*) に有意な相関がみられる。

表5.2-2-1 各項目（縦軸）と地域（大人）の状況（横軸）の相関係数（N=2975）

地域（大人）の状況	①子供への関わりあり	②大人同士の交流あり	③大人相互の挨拶あり	④安全でなくなった
子供への関わりあり	1	.594 (**)	.415 (**)	-.103 (**)
大人同士の交流あり	.594 (**)	1	.524 (**)	-.116 (**)
大人相互の挨拶あり	.415 (**)	.524 (**)	1	-.138 (**)
安全でなくなった	-.103 (**)	-.116 (**)	-.138 (**)	1
家庭の協力がない	-.168 (**)	-.135 (**)	-.104 (**)	.266 (**)
子どもの道徳心等薄れ	-.173 (**)	-.154 (**)	-.103 (**)	.273 (**)
子どもの学習意欲等低下	-.108 (**)	-.090 (**)	-.075 (**)	.139 (**)
子どもの挨拶等あり	.317 (**)	.299 (**)	.383 (**)	-.125 (**)
子どもの地域参加あり	.369 (**)	.406 (**)	.356 (**)	-.123 (**)
学校の情報伝達あり	.273 (**)	.240 (**)	.245 (**)	-.034
学校へ関心あり	.248 (**)	.227 (**)	.223 (**)	.015
支援経験の有無	.083 (**)	.082 (**)	.088 (**)	-.008
学校支援の必要性の有無	.145 (**)	.123 (**)	.091 (**)	.044 (*)
今後の支援意思の有無	.178 (**)	.165 (**)	.144 (**)	-.01

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

## 5.2-2-2 地域の子どもの状況

表 5.2-2-2 は、地域（大人）の状況、家庭の状況、子どもの状況、学校支援に関するここと（縦軸）と、地域の子どもの状況（横軸）の相関係数を示したものである。傾向としては昨年の調査とほぼ同様であるために、横軸から見た概況 (.200\*\*以上) のみを整理することとする。その際、重複する項目は省略することとする。

「⑤子どもの道徳心等が薄れている」と回答した人ほど、「地域が安全でなくなった」 (.273\*\*), 「学校への家庭の協力が少なくなった」 (.378\*\*), 「子どもの学習意欲が低下した」 (.361\*\*), 「子どもの挨拶等あり」 (-.230\*\*), 「子どもの地域活動への参加あり」 (-.211\*\*) に有意な相関がみられる。

「⑥子どもの学習意欲が低下した」と回答した人ほど、「学校への家庭の協力が少なくなった」 (.214\*\*), 「子どもの道徳心等が薄れた」 (.361\*\*) に有意な相関がみられる。

「⑦子どもが地域の人に挨拶する」と回答した人ほど、「地域の大人の子どもへの関わりあり」 (.317\*\*), 「大人同士の交流あり」 (.299\*\*), 「大人相互の挨拶あり」 (.383\*\*), 「子どもの地域活動への参加あり」 (.443\*\*), 「学校の情報伝達あり」 (.226\*\*) に有意な

相関がみられる。

「⑧子どもが地域の活動へ参加する」と回答した人ほど、「地域の大人の子どもへの関わりあり」(.369\*\*), 「大人同士の交流あり」(.406\*\*), 「大人相互の挨拶あり」(.356\*\*), 「学校の情報伝達あり」(.309\*\*)に有意な相関がみられる。

表5.2-2-2 各項目（縦軸）と子どもの状況（横軸）の相関係数(N=2975)

	⑤道徳心等の薄れ	⑥学習意欲の低下	⑦挨拶等があり	⑧地域活動参加あり
子供への関わりあり	-.173 (**)	-.108 (**)	.317 (**)	.369 (**)
大人同士の交流あり	-.154 (**)	-.090 (**)	.299 (**)	.406 (**)
大人相互の挨拶あり	-.103 (**)	-.075 (**)	.383 (**)	.356 (**)
安全でなくなった	.273 (**)	.139 (**)	-.125 (**)	-.123 (**)
家庭の協力がない	.378 (**)	.214 (**)	-.126 (**)	-.177 (**)
子どもの道徳心等薄れ	1	.361 (**)	-.230 (**)	-.211 (**)
子どもの学習意欲等低下	.361 (**)	1	-.159 (**)	-.155 (**)
子どもの挨拶等あり	-.230 (**)	-.159 (**)	1	.443 (**)
子どもの地域参加あり	-.211 (**)	-.155 (**)	.443 (**)	1
学校の情報伝達あり	-.112 (**)	-.086 (**)	.226 (**)	.309 (**)
学校へ関心あり	-0.031	-0.029	.136 (**)	.194 (**)
支援経験の有無	0.005	0	.052 (**)	.073 (**)
学校支援の必要性の有無	0.032	0.019	.076 (**)	.102 (**)
今後の支援意思の有無	-0.016	-0.025	.132 (**)	.139 (**)

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

### 5.2-2-3 学校に関するここと

表 5.2-2-3 は、地域（大人）の状況、家庭の状況、子どもの状況、学校支援に関するここと（縦軸）と、学校に関するここと（横軸）の相関係数を示したものである。傾向としては昨年の調査とほぼ同様であるために、横軸から見た概況(.200\*\*以上)のみを整理することとする。その際、重複する項目は省略することとする。

「⑨学校行事等の情報が伝わってきてている」と回答した人ほど、「地域の大人の子どもへの関わりあり」(.273\*\*), 「大人同士の交流あり」(.240\*\*), 「大人相互の挨拶あり」(.245\*\*), 「子どもの挨拶等あり」(.226\*\*), 「子どもの地域活動への参加あり」(.309\*\*), 「学校へ関心あり」(.309\*\*)に有意な相関がみられる。

「⑩学校へ関心がある」と回答した人ほど、「地域の大人の子どもへの関わりあり」(.248\*\*), 「大人同士の交流あり」(.227\*\*), 「大人相互の挨拶あり」(.223\*\*), 「学校の情報伝達あり」(.321\*\*), 「学校支援の必要性がある」(.334\*\*), 「今後の学校支援活動に参加する意思がある」(.383\*\*)に有意な相関がみられる。

「⑪学校支援活動に参加したことがある」と回答した人については、「今後の学校支援活動に参加する意思がある」(.294\*\*)に、.200\*\*以上の有意な相関がみられるだけである。

表5.2-2-3 各項目（縦軸）と学校との関係（横軸）の相関係数(N=2975)

	⑨学校の情報伝達あり	⑩学校へ感心あり	⑪支援経験あり
子供への関わりあり	.273 (**)	.248 (**)	.083 (**)
大人同士の交流あり	.240 (**)	.227 (**)	.082 (**)
大人相互の挨拶あり	.245 (**)	.223 (**)	.088 (**)

安全でなくなった	-.034	.015	-.008
家庭の協力がない	-.083 (**)	.023	.032
子どもの道徳心等薄れ	-.112 (**)	-.031	.005
子どもの学習意欲等低下	-.086 (**)	-.029	0
子どもの挨拶等あり	.226 (**)	.136 (**)	.052 (**)
子どもの地域参加あり	.309 (**)	.194 (**)	.073 (**)
学校の情報伝達あり	1	.321 (**)	.095 (**)
学校へ関心あり	.321 (**)	1	.192 (**)
支援経験の有無	.095 (**)	.192 (**)	1
学校支援の必要性の有無	.121 (**)	.334 (**)	.180 (**)
今後の支援意思の有無	.176 (**)	.383 (**)	.294 (**)

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

#### 5.2-2-4 学校支援活動後の自分の変化と学校支援に関すること

表 5.2-2-4 は、学校支援活動に参加しての自分の変化と学校支援に関する意識の相関係数を示したものである。すべての項目において有意な相関 (\*\* p < 0.01) があり、「必要がある」「支援の意思がある」と回答とした人ほど、様々な変化を感じていることがわかる。「何も変化なし」と回答した人ほど「学校支援は必要ない」 (.202\*\*)、「支援意思はない」 (.267\*\*) という傾向があることがわかる。

表5.2-2-4 参加後の変化（縦軸）と学校支援の関係（横軸）の相関係数 (N=2975)

	⑫学校支援の必要あり	⑬今後の支援意思あり
生活に張り	-.142 (**)	-.139 (**)
子供への関心	-.178 (**)	-.203 (**)
他人と知合い	-.154 (**)	-.171 (**)
子供の様子が分かった	-.131 (**)	-.139 (**)
学ぶ意欲向上	-.137 (**)	-.143 (**)
学校の話題の会話	-.129 (**)	-.150 (**)
地域貢献意欲	-.170 (**)	-.177 (**)
変化なし	.202 (**)	.267 (**)

\*\* p < 0.01

#### 5.2-2-5 学校支援に関する相関について

表 5.2-2-5 は、学校支援の推進に直接関係する項目の相関係数を示したものである。

「学校支援の経験の有無」については、「学校支援の必要性がある」が .180\*\*、「今後の学校支援の意思がある」が .294\*\* の有意な相関がみられる。「学校支援の必要性」と「今後の学校支援の意思」には、.552\*\* という非常に高い有意な相関があることがわかった。

これらのことから、今後、まず学校支援に参加していただく手段の工夫や、学校支援の必要性及び教育的な効果を啓発するなどが重要であることがわかる。

表5.2-2-5 学校支援に関する相関係数 (N=2975)

	支援経験の有無	支援の必要性の有無	今後の支援意思の有無
支援経験の有無	1	.180 (**)	.294 (**)
支援の必要性の有無	.180 (**)	1	.552 (**)
今後の支援意思の有無	.294 (**)	.552 (**)	1

\*\* p < 0.01

### 5.2-3 「地域の学校への関心」のクロス結果

地域住民の学校への関心は、学校教育への支援活動を推進するうえで重要な要素であることから、地域住民の「学校への関心」と.200\*\*以上の有意な相関がみられる項目について示すこととする。

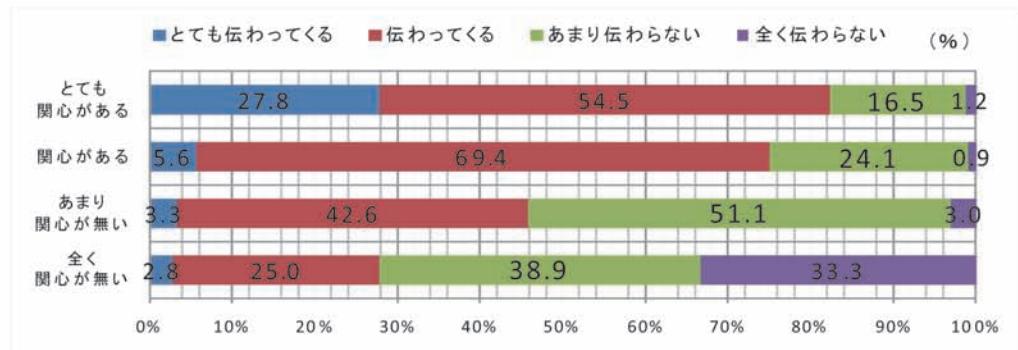
#### 5.2-3-1 「学校の情報の伝わり方」との関係

図 5.2-3-1 は、「地域の学校への関心」(縦軸)と「学校の情報の伝わり方」(横軸)の関係を示したものである。

この図から、「とても関心がある」という回答の中での「学校の情報が伝わってくる」ととも思う」「思う」の割合は 82.3%であるが、「全く関心がない」という回答へ目を移していくと、「学校の情報が伝わってくる」ととも思う」「思う」の割合は 27.8%へと徐々に減少している。

のことから、「地域の学校への関心」と「学校の情報の伝わり方」には、「地域の学校へ関心がある」と回答した人ほど「学校の情報が伝わってくる」と感じているという傾向があることがわかる。

図 5.2-3-1 「地域の学校への関心」と「学校の情報の伝わり方」の関係(N=2844)



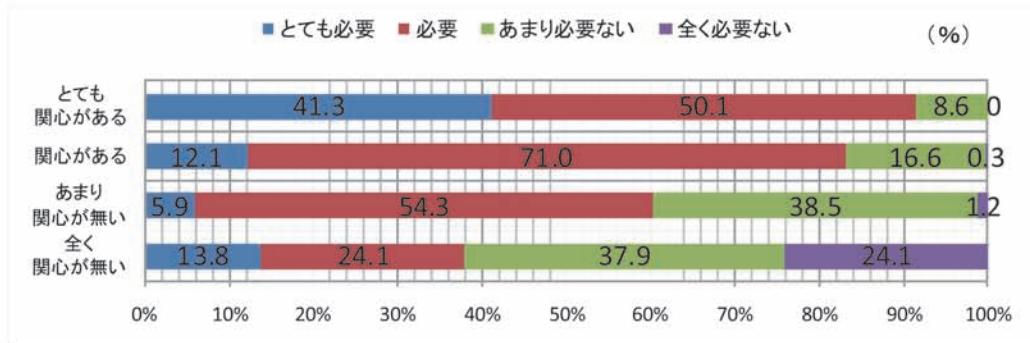
#### 5.2-3-2 「学校支援の必要性」との関係

図 5.2-3-2 は、「地域の学校への関心」(縦軸)と「学校支援の必要性」(横軸)の関係を示したものである。

この図から、「とても関心がある」という回答の中での「学校支援の必要がある」ととも思う」「思う」の割合は 91.4%であるが、「全く必要ない」という回答へ目を移していくと、「学校支援の必要がある」ととも思う」「思う」の割合は 37.9%へと徐々に減少している。

のことから、「地域の学校への関心」と「学校支援の必要性」には、「地域の学校へ関心がある」と回答した人ほど「学校支援の必要性がある」と感じているという傾向があることがわかる。

図5.2-3-2 「地域の学校への関心」と「学校支援の必要性」の関係(N=2733)



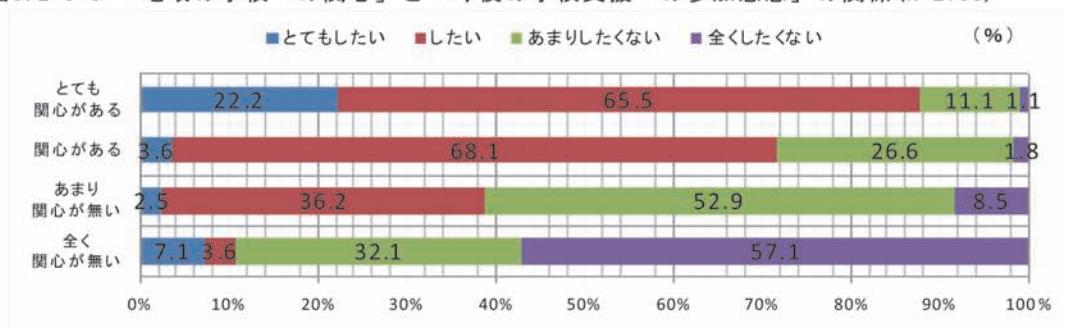
### 5.2-3-3 「今後の学校支援への参加意思」との関係

図5.2-3-3は、「地域の学校への関心」(縦軸)と「今後の学校支援への参加意思」(横軸)の関係を示したものである。

この図から、「とても関心がある」という回答の中での「学校支援活動をしたい」と「思う」の割合は87.7%であるが、徐々に「全く関心がない」という回答へ目を移していくと、「学校支援の必要がある」と「思う」の割合は10.7%へと徐々に減少している。

のことから、「地域の学校への関心」と「今後の学校支援への参加意思」には、「地域の学校へ関心がある」と回答した人ほど「今後、学校支援へ参加したいと思っている」という傾向があることがわかる。

図5.2-3-3 「地域の学校への関心」と「今後の学校支援への参加意思」の関係(N=2733)



## 5.2-4 「今後の学校支援活動への参加意思」のクロス結果

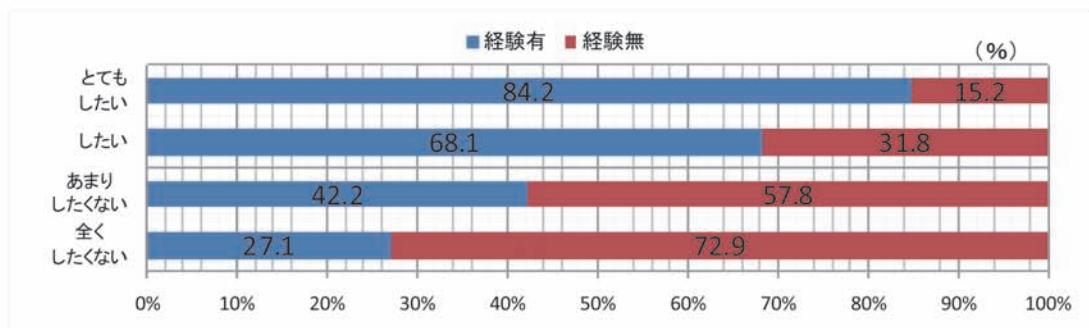
### 5.2-4-1 「学校支援活動への参加経験の有無」との関係

図 5.2-4-1 は、「今後の学校支援活動への参加意思」（縦軸）と「学校支援活動への参加経験の有無」（横軸）の関係を示したものである。

この図から、「今後の学校支援活動へとても参加したい」という回答の中での「学校支援活動の経験がある」の割合は 84.2%であるが、徐々に「全くしたくない」という回答へ目を移していくと、「経験がある」の割合は 27.1%へと徐々に減少している。

のことから、「今後の学校支援活動へ参加意思」と「学校支援活動への参加経験の有無」には、「今後、学校支援活動へ参加したいと思う」と回答した人ほど「学校支援活動の経験がある」という傾向があることがわかる。

図 5.2-4-1 「今後の学校支援活動への参加意思」と「学校支援活動への参加経験の有無」の関係



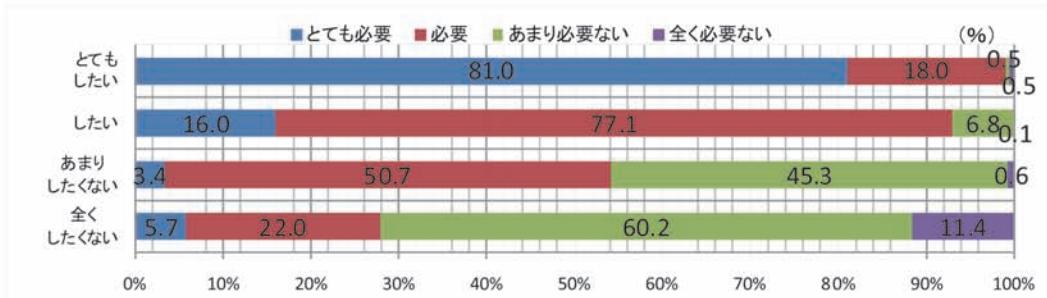
### 5.2-4-2 「学校支援の必要性の有無」との関係

図 5.2-4-2 は、「今後の学校支援活動への参加意思」（縦軸）と「学校支援の必要性」（横軸）の関係を示したものである。

この図から、「今後の学校支援活動をとてもしたい」という回答の中での「学校支援が必要である」ととも思う」「必要と思う」の割合は 99.0%だが、徐々に「全くしたくない」という回答へ目を移していくと、「学校支援の必要性がある」ととも思う」「必要と思う」の割合は 27.7%へと徐々に減少している。

のことから、「今後の学校支援活動への参加意思」と「学校支援の必要性」には、「今後、学校支援活動をしたいと思う」と回答した人ほど「学校支援の必要があると思っている」という傾向があることがわかる。

図 5.2-4-2 「今後の学校支援活動への参加意思」と「学校支援の必要性」の関係



### 5.2-4-3 「学校支援活動に参加しての自分の変化」との関係

図 5.2-4-3 は、「今後の学校支援活動への参加意思」と「学校支援活動に参加しての自分の変化」の関係を示したものである。

数字は、「支援をしたいと思う」（「とても思う」「思う」）と、「したいと思わない」（「あまり思わない」「全く思わない」）の回答に分けて、それぞれの項目において全体のどれだけの回答数があったのかの割合を示したものである。

「今後、学校支援をしたい」と回答した人は、「したくない」と回答した人に比べてすべての項目で変化があったことがわかる。また、「変化がなった」と回答した人では、「今後、支援をしたくない」が 3.5 倍になっている。

このことから、「今後の学校支援活動へ参加したい」と回答した多くの人が、これまでの活動で自分なりの変化（効果）を感じており、学校支援活動への参加は、子どもへの効果だけでなく、支援者自身の生き甲斐等の効果が得られることがわかる。

図5.2-4-3 「今後の参加意思」と「参加しての自分の変化」の関係 (N=1645)



### 5.2-5 学校支援活動に「参加した活動」と「今後参加したい活動」との関係

表 5.2-5 は、学校支援活動に「参加した活動」と「今後、参加したい活動」についての相関係数を示したものであり、すべての活動内容には有意な相関がみられることから、地域住民は、「した活動」を「今後もしたい」と思っていることがわかる。

表5.2-5 「参加した活動」と「今後、参加したい活動」に関する相関表

クラブ部活	特別支援	図書活動	G T/総合	学習補助	教具作成	パソコン	安全パト	環境整備
.410 (**)	.177 (**)	.455 (**)	.528 (**)	.394 (**)	.101 (**)	.127 (**)	.313 (**)	.380 (**)

\*\* p < 0.01

【参考：H20 調査の状況】

クラブ部活	特別支援	図書活動	G T/総合	学習補助	教具作成	パソコン	安全パト	環境整備
.493 (**)	.231 (**)	.459 (**)	.502 (**)	.405 (**)	.253 (**)	.079 (**)	.329 (**)	.401 (**)

\*\* p < 0.01

## 第3部 調査のまとめ

### 第6章 「教育の協働」を推進する視点

#### 6.1 平成20年（「学校支援地域本部事業」の実施時）の考察の概要

##### 6.1-1 基本的事項の共通理解

学校支援地域本部事業を推進する部署は、文部科学省においても、大分県の各自治体においても教育行政の生涯学習推進部局であることの意味を踏まえることが重要であり、教育の協働が目指すものは、家庭、学校、地域社会が教育力を相互に補完することだけではなく、それぞれの教育活動をより効果的に推進する方策であることなどを前提として、次の視点が必要であると考えられる。

1つ目は、「子どもの育成」という視点が必要である。家庭だけ、学校だけ、地域社会だけではそのことを担いきれないことが徐々に認識されていることは事実である。

2つ目に、教育の協働に参画・参加・協力する「大人自身の学び」と「生涯学習の振興」という視点が必要である。大人相互の新しい繋がりが生まれ、地域の連帯感や活性化という大人社会の再構築を目指すという視点が必要である。

##### (1) 「学校支援」という言葉へのアレルギー対策

「学校支援」とは、「学校における様々な教育活動において、地域住民が持つ知識や技能を子どもたちのために発揮して効果を上げることや、教育環境を整備すること」である。しかし、実際に取り組んでいる学校支援地域本部では、教職員及び地域住民共に、「学校支援」という言葉から来るイメージにアレルギーが生じていることは事実である。多くの地域住民の理解を得ながら、「できる人が」「できる時に」「できる事を」するという取り組みを推進するためには、「学校支援」という言葉へのアレルギーを払拭する必要があるのではないか。

##### (2) 生涯学習の振興という視点からの推進

「協育」ネットワークは、「次世代を担う青少年の育成」のために大人が学んだ知恵と技能、そして一人一人の地域づくりに対する想いによって構築されるものである。このことは、多くの地域住民が参加する生涯学習の機会づくりであり、大人社会づくりであり、「学び」を地域へ還元する生涯学習社会の形成であることを押さえておくことが重要であると考える。

##### 6.1-2 課題への対応

「子どものために大人が様々な形で関わる」ことは、教職員、地域住民ともに「必要」という認識は充分に持っていることが理解できた。しかし、実際の教育活動においてのシステム的な取り組みを推進するには、教職員の「多忙化に繋がる恐れがある」等の危惧があること、教育の協働の方策には地域性があり、地域が目指すものや取り組み方、重点、課題などとの関連があることなどから、推進のための課題や方策に関する対応の視点を考察することとする。

## (1) 子どもの「負の意識」について

「学校支援」の目的は子どもの育成であり、地域住民のボランティア活動によって学校教育活動が充実し、子どもたちが生き生きと学ぶことを目指している。しかし、「学校で地域の大人と交流・活動などををして欲しくない」という児童生徒が約37.8%であり、「学校に行くのが楽しくない」という子どもほどその傾向があることから、学校教育において育てたい人間性を明確にして方策を考えることが必要である。

## (2) 学校の情報提供の充実について

教育の協働のキーワードは「情報の共有」と「コーディネート機能」であることは大分県教育委員会が指摘していることであるが、今回の調査においても「学校支援」を充実するうえで重要なこととして、地域住民・保護者、教職員が共にトップに上げていることが「学校の情報」を地域住民に発信することである。情報発信が、学校や行政の多忙化に繋がりかねないが、今ある情報提供機能の有効的な活用や、ホームページによる情報発信など、「情報提供の工夫」という視点が必要である。

## (3) 予算の確保について

教育の協働における1つのキーワードは「コーディネート機能」であり、大分県では、専任のコーディネーターを配置することによって推進する取り組みを行ってきた。「学校支援活動」に係る経費について、各自治体において、必要経費が何なのかを充分に検討しながら、「既存の事業の見直しによる経費の確保」という視点が必要である。

## (4) 学校内の情報の保守について

学校には様々な守らなくてはならない公的な情報や児童生徒・教職員の個人情報がある。地域住民は、日常的に学校へ出入りすることによって知り得た「情報の保守」という義務を守ることによって学校支援が可能となることを認識することが重要であるという視点が必要である。

## (5) 学校教育活動の多忙化について

「学校支援」の拡大が「教職員の多忙化に繋がる」という考えを持つ教職員が多いことも明らかになった。その反面、技術や補助が必要な授業や危険が伴う授業などにおいては、専門的指導者や多くの支援者によってより充実した授業ができること、中学校における職場体験の受入先の確保もできやすいことなどから、コーディネーターや地域住民に任せることは、教職員の教育活動への時間の確保が可能になるなど、「多忙化」という課題と教育効果を対比させてみるという視点が必要である。

## (6) 事故責任の所在について

活動にはリスクを伴うのは当然であり、リスクへの対応は不可欠であり、支援活動の内容によっては傷害保険への加入は基本である。リスクは傷害だけでなく、情報の流出、支援者と子ども・保護者や教職員とのトラブルなども考えられ、行政と学校、支援者で構成する協議会において充分協議したうえで、責任の所在の在り方を明確にしておくという視点が必要である。

## (7) 教育行政の役割について

教育行政が、教育の協働の推進について責任を負うためには、上記の6つの視点を含めた推進方針を明確にすることが重要である。現場任せではなく、行政が主体的に必要

- ・不可欠な条件を整備することによって、地域住民や学校が安心して活動でき、参加できるよう推進することが重要であると考える。さらに、首長部局の「まちづくり施策との協働」を推進するなど、体系的に推進するという視点を持つことが必要である。

## 6.2 今年（平成21年：1年経過後）の調査から見えてきたもの

今年の調査からわかったこと、昨年の調査と今年の調査を比較してわかったこと、調査結果をより細かく分析して分かったことなど、学校教育活動への支援をとおして、教育の協働がどう推進されているのかについて、昨年の調査の概要を踏まえながら分析することとする。その際、子どもの観点、教職員の観点、地域住民（保護者・住民）の観点からそれぞれを整理をするとともに、その中で、教職員と地域住民の意識の違いについても若干の整理をしておくこととする。

### 1. 子どもの観点から見た考察

①子どもにとっての必要性から見ると、学校支援活動の要望と基本的な生活習慣やコミュニケーション能力、学校へ行く楽しさなどについて肯定的な有意な相関があることから、地域住民との交流や、学習活動での指導を受けることが有効であることがわかった。さらに、学習活動への支援内容についてもほとんどの項目で肯定的な有意な相関があるとともに、一緒にした交流・活動については、すべての項目で「良かった」という回答をした子どもが多いことなどから、これまで教師だけが関わってきた教育活動から、地域の大人が関わる事の効果が期待できるのではないかと考えられる。

②学校支援本部事業が実施された昨年の調査と比較して、地域住民による学校支援が、学校内の活動への興味・関心・意欲の向上に効果が期待できることや、授業の理解力等の向上への効果など、子どもに直接的な効果が期待できることが認識してきた。特に、学習サポーターを活用している学校ではその傾向が高い。このことは、今回の調査だけでなく、平成19年度の文部科学省の委託事業を受託した別府市の取り組みや、先進的な取り組みをしてきた青森県、東京都などにおいても、子どもへの効果は明らかになっている。

### 2. 教職員の観点から見た考察

①教職員にとっての必要性から見ると、現実の必要感とイメージ的な必要感とに分かれようである。子どもの課題や学習指導における実体験の重要性などから、学校だけでは対応できないことを実感している教職員と、従来の「教える」ことで教育が進んでいると捉えている教職員に分類できるのではないだろうか。また、学校支援を教育課程や教育活動計画に位置付けている教職員が少ないと、コーディネーターとの連携・協力が進んでない教職員も多くいることがわかった。

②教職員の学校支援に関する意識及びその変化については、別途分析した「地域との関わりによる子どもの学習活動に関する研究Ⅱ－地域住民の支援活動と教師の意識変化を中心として－」<日本生活体験学習学会発表資料>において、積極的に学校支援を受け入れている学校支援地域本部（推進型）と、あまり受け入れてない本部（不要型）について相違点を報告している。その内容としては、両者の学校支援の必要性、受入状況・受入計画、期待される効果、その地域の住民の意識等を重ね合わせて考察している。1例をあげると、地域住民の支援内容や意識を比較したとき、推進型は学習活動への支援で、不要型は環境整備・安全への支援という違いがあること、また、t検定で両群の平均値間に有意な差( $p<0.0001$ )が見られたは「学校への関心」「コーディネーターの配置」「支援が必要な内容の情報発信」であり、不要型の方が高いということが示され、教職員は不要型であっても、地域住民は学校支援の取り組みを望み、支援する意思があることなどを報告している。

③学校支援の受け入れには課題があるが、特に支援者の発掘・依頼・打ち合わせ等による多忙化は大きな課題である。今回の調査でも1番の課題(42.2%)となっているが、コーディネーターの活用によって多忙感が減少しているという結果もでている。教育内容を支援者に理解していただくことは教師として当然であるが、発掘・依頼・打ち合わせ等の多忙化を解消する方策としてのコーディネーターの配置と活用は有効であることが言えそうである。その他の課題も、行政、地域住民、学校の三者によって対応できると考えられる。例えば、「個人情報の保守」については支援者へのお願いとしてプリントを作成して最初に依頼することや、支援者への金銭的な謝礼はないことを最初に伝えるなどによって、支援者への理解を求めることが必要である。事故責任の所在については、教育委員会の教育計画や学校教育計画等に位置づけて、責任の所在を明確にするなどの取り組みをすることが重要である。

こうしたことを確実に実行するためには、今後、学校全体として、子どもの実態や保護者・住民の意識の把握、学校支援による期待される効果、今後学校教育が目指すことなども含めて、現状を見つめ直すことから始めることが必要ではないだろうか。

### 3. 地域住民の観点から見た考察

①学校支援活動を「子どものため」とだけ考えることは大きな間違である。この取り組みを大分県で始めた平成17年度当初から、「親が汗をかかないのに、何故、小中学生がいない住民が子どものために・・・」という批判の声が多くあった。しかし、昨年の調査同様に、今回の調査においても、地域づくりへの意欲や学校教育への理解、自分自身の意識の変化など、40%前後の地域住民に意識の変化を与えていたことは大きな効果である。今後、学校支援に止まらず、地域での子育て活動へ関わる地域住民を増やすことが、大人自身のライフステージの1つとなるのではないかと考えられる。

②今回の調査で、学校支援の必要性については、「必要と思う」が80.5%と、学校支援の必要性を感じている住民・保護者が多いことがわかった。また、住民では86.2%、保

護者は 79.6%となつており、住民も子どもへの関心が高いこと、多くの保護者が学校支援の必要性を感じていることがわかる。また、「あなたは、今後、学校支援の活動に参加しますか」については、「参加したいと思う」が 68.7%となつており、住民では 66.8%、保護者は 69.3% が「参加したい」と回答しており、このことからも、学校支援の必要性や住民の学校（子ども）への関心の高さがうかがえる。

また、子どもが学校へ通う「保護者」と、学校へ通う子どもがいない「住民」の意識や学校支援内容の相違を別途分析した結果（「学校支援についての保護者と住民の意識の相違に関する一考察」《大分大学高等教育開発センター紀要第 2 号：2010 年 3 月》）では、保護者と住民の活動内容や学校支援活動への参加理由、参加しての自分の変化等に若干の相違は見られるものの、保護者も住民も学校への関心が高いことや学校からの情報提供を求めていること、学校支援による自分自身の変化などから見て、学校支援活動へ参加することには大きな相違はみられず、両者とも同じように学校支援の必要性、学校支援活動への参加意思が高いことなどを報告している。

以上、今年の調査の結果の概要を整理・分析したが、詳細については本文の各項目からその実態を認識していただきたい。その上で、学校が地域住民の学校支援を受け入れる体制づくりを進めるとともに、実際に学校への様々なボランティア活動をしていただく地域住民への啓発等々が重要になる。それを支援・推進していく教育行政の施策づくりが最も重要であり、まちづくり・人づくり施策としての位置づけが求められる。現在、大分県においてこうしたプランを策定しているのは県教育委員会のみであり、各市町村教育委員会においても、教育の協働を推進するための実効性のあるプランを早期に策定することを提言して調査報告とする。

## 【調査資料】

1－児童生徒の集計結果

2－教職員の集計結果

3－地域住民（保護者）の集計結果

# 1-児童生徒の集計結果

V1：市町村

	度数	パーセント
中津市	233	4.1
豊後高田市	195	3.5
宇佐市	541	9.6
別府市	298	5.3
杵築市	1258	22.3
国東市	350	6.2
姫島村	139	2.5
日出町	247	4.4
津久見市	384	6.8
由布市	442	7.8
佐伯市	337	6
竹田市	343	6.1
日田市	126	2.2
九重町	625	11.1
玖珠町	116	2.1
欠損値	1	0
合計	5635	100

V4：性別

	度数	パーセント
男	2873	51
女	2740	48.6
合計	5613	99.6
欠損値	22	0.4
合計	5635	100

V6：毎朝、自分で起きる

	度数	パーセント
とてもあてはまる	1470	26.1
あてはまる	2211	39.2
あまりあてはまらない	1357	24.1
全くあてはまらない	583	10.3
欠損値	14	0.2
合計	5635	100

V8：誰とでもよく話をする

	度数	パーセント
とてもあてはまる	2023	35.9
あてはまる	2581	45.8
あまりあてはまらない	869	15.4
全くあてはまらない	104	1.8
欠損値	58	1
合計	5635	100

V2：学校番号（調査対象地区一覧参照）

	度数	パーセント
1	2286	40.6
2	1523	27
3	631	11.2
4	304	5.4
5	374	6.6
6	129	2.3
7	81	1.4
8	173	3.1
9	86	1.5
10	48	0.9
合計	5635	100

V3：小中学校種

	度数	パーセント
小学校	3162	56.1
中学校	2473	43.9
合計	5635	100

V5：学年

	度数	パーセント
小3	711	12.6
小4	838	14.9
小5	742	13.2
小6	871	15.5
中1	845	15
中2	798	14.2
中3	830	14.7
合計	5635	100

V7：夜は、決まった時間に寝る

	度数	パーセント
とてもあてはまる	806	14.3
あてはまる	1917	34
あまりあてはまらない	1809	32.1
全くあてはまらない	1073	19
欠損値	30	0.5
合計	5635	100

V9：学校の出来事について家族とよく話をする

	度数	パーセント
とてもあてはまる	1895	33.6
あてはまる	1984	35.2
あまりあてはまらない	1294	23
全くあてはまらない	416	7.4
欠損値	46	0.8
合計	5635	100

V10：家の手伝いをよくする

	度数	パーセント
とてもあてはまる	1275	22.6
あてはまる	2155	38.2
あまりあてはまらない	1680	29.8
全くあてはまらない	481	8.5
欠損値	44	0.8
合計	5635	100

V11：地域での活動（お祭りや清掃など）によく参加する

	度数	パーセント
とてもあてはまる	1679	29.8
あてはまる	1870	33.2
あまりあてはまらない	1445	25.6
全くあてはまらない	599	10.6
欠損値	42	0.7
合計	5635	100

V12：近所の人によくあいさつをする

	度数	パーセント
とてもあてはまる	2773	49.2
あてはまる	2038	36.2
あまりあてはまらない	615	10.9
全くあてはまらない	177	3.1
欠損値	32	0.6
合計	5635	100

☆あなたが、学校の生活で楽しいと感じることはどんなことですか。(2つまで)

V14：朝の読書などの活動

	度数	パーセント
一	5138	91.2
はい	494	8.8
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V16：体育、音楽、技術家庭、美術等の学習

	度数	パーセント
0	3538	62.8
1	2094	37.2
9	3	0.1
合計	5635	100

V18：クラブ活動・部活動

	度数	パーセント
一	4013	71.2
はい	1619	28.7
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V20：遠足・運動会などの行事

	度数	パーセント
一	3606	64
はい	2026	36
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V22：給食

	度数	パーセント
一	4966	88.1
はい	665	11.8
欠損値	5	0.1
合計	5635	100

V15：数学、国語、英語、社会、理科の学習

	度数	パーセント
一	4917	87.3
はい	715	12.7
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V17：総合的な学習の時間の活動

	度数	パーセント
一	5337	94.7
はい	295	5.2
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V19：学級会や生徒会活動

	度数	パーセント
一	5510	97.8
はい	122	2.2
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V21：休み時間などに友達や先生と遊ぶこと

	度数	パーセント
一	2646	47
はい	2986	53
欠損値	3	0.1
合計	5635	100

V23：その他

	度数	パーセント
一	5527	98.1
はい	104	1.8
欠損値	4	0.1
合計	5635	100

V24：今年になってから先生以外の人に学校で、勉強やクラブ活動・部活動などを教えてもらったり、いっしょに活動したりしたことがある

	度数	パーセント
ある	3771	66.9
ない	1506	26.7
欠損値	358	6.4
合計	5635	100

### 地域の人との活動経験のある人にお聞きします(V25～V40)

☆あなたが教えてもらったり、いっしょに活動したりしたことは、どんなことですか。(すべて選ぶ)

V25：国語・数学（数学）・社会・理科等の教科

	度数	パーセント
ある	2594	46
はい	1190	21.1
欠損値	1852	32.8
合計	5635	100

V27：地域のこと（歴史や伝統など）や昔の遊び、野菜の育て方など

	度数	パーセント
—	1963	34.8
はい	1821	32.3
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

V29：放課後などに学校などでする宿題や自由勉強など

	度数	パーセント
—	3492	62
はい	292	5.2
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

V31：朝読書などの本の読み聞かせ

	度数	パーセント
—	2109	37.4
はい	1675	29.7
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

☆あなたが教えてもらったり、いっしょに活動したりして、良かったことはどんなことですか。(すべて選ぶ)

V33：国語・数学（数学）・社会・理科等の教科の勉強

	度数	パーセント
—	2885	51.2
はい	876	15.5
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V35：地域のこと（歴史や伝統など）や昔の遊び、野菜の育て方など

	度数	パーセント
—	2264	40.2
はい	1497	26.6
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V26：音楽・体育・図工（美術）等の教科

	度数	パーセント
—	2718	48.2
はい	1066	18.9
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

V28：クラブ活動・部活動

	度数	パーセント
—	2520	44.7
はい	1264	22.4
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

V30：運動会や餅つきなどの行事

	度数	パーセント
—	2269	40.3
はい	1515	26.9
欠損値	1851	32.8
合計	5635	100

V32：その他

	度数	パーセント
—	3336	59.2
はい	447	7.9
欠損値	1852	32.9
合計	5635	100

V34：音楽・体育・図工（美術）等の教科の勉強

	度数	パーセント
—	2898	51.4
はい	863	15.3
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V28：クラブ活動・部活動

	度数	パーセント
—	2606	46.2
はい	1155	20.5
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V37：放課後などに学校などでする宿題や自由勉強など

	度数	パーセント
一	3536	62.8
はい	225	4
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V39：朝読書などの本の読み聞かせ

	度数	パーセント
一	2517	44.7
はい	1243	22.1
欠損値	1875	33.3
合計	5635	100

V41：地域の人に学校に来てもらい、勉強やクラブ活動・部活動などを教えてもらったり、いっしょに活動したりしたいと思いますか

	度数	パーセント
とても思う	634	11.3
そう思う	1211	21.5
あまり思わない	983	17.4
全く思わない	622	11
欠損値	2185	38.8
合計	5635	100

☆あなたが教えてもらったり、いっしょに活動したりしたいことは何ですか。

V42：国語・数学（数学）・社会・理科等の教科

	度数	パーセント
一	2603	46.2
はい	545	9.7
欠損値	2487	44.1
合計	5635	100

V44：地域のこと（歴史や伝統など）や昔の遊び、野菜の育て方など

	度数	パーセント
一	1957	34.7
はい	1192	21.2
欠損値	2486	44.1
合計	5635	100

V46：放課後などに学校などでする宿題や自由勉強など

	度数	パーセント
一	2803	49.7
はい	346	6.1
欠損値	2486	44.1
合計	5635	100

V48：朝読書などの本の読み聞かせ

	度数	パーセント
一	2806	49.8
はい	343	6.1
欠損値	2486	44.1
合計	5635	100

V38：運動会や餅つきなどの行事

	度数	パーセント
一	2585	45.9
はい	1176	20.9
欠損値	1874	33.3
合計	5635	100

V40：その他

	度数	パーセント
一	3459	61.4
はい	292	5.2
欠損値	1884	33.4
合計	5635	100

V43：音楽・体育・図工（美術）等の教科

	度数	パーセント
一	2420	42.9
はい	727	12.9
欠損値	2490	44.2
合計	5635	100

V45：クラブ活動・部活動

	度数	パーセント
一	2034	36.1
はい	1114	19.8
欠損値	2487	44.1
合計	5635	100

V47：運動会や餅つきなどの行事

	度数	パーセント
一	2305	40.9
はい	844	15
欠損値	2486	44.1
合計	5635	100

V49：その他

	度数	パーセント
一	3061	54.3
はい	88	1.6
欠損値	2486	44.1
合計	5635	100

## 2—教職員の集計結果

V1：市町村

	度数	パーセント
中津市	29	4.3
豊後高田市	20	3
宇佐市	64	9.5
別府市	26	3.9
杵築市	104	15.4
国東市	45	6.7
姫島村	24	3.6
日出町	26	3.9
津久見市	36	5.3
由布市	76	11.3
佐伯市	26	3.9
竹田市	46	6.8
日田市	30	4.4
九重町	101	15
玖珠町	22	3.3
合計	675	100

V4：学校種

	度数	パーセント
小学校	449	66.5
中学校	226	33.5
合計	675	100

V5：当該校勤務年数

	度数	パーセント
1年未満	202	29.9
1年から2年未満	171	25.3
2年から3年未満	96	14.2
3年から4年未満	67	9.9
4年から5年未満	42	6.2
5年から6年未満	32	4.7
6年から7年未満	11	1.6
7年以上	2	0.3
欠損値	52	7.7
合計	675	100

V12：地域の子どもに対して地域の大人が積極的に関わる必要があると思う

	度数	パーセント
とてもそう思う	265	39.3
そう思う	397	58.8
あまり思わない	11	1.6
欠損値	2	0.3
合計	675	100

V2：学校番号（調査対象地区一覧参照）

	度数	パーセント
1	202	29.9
2	186	27.6
3	90	13.3
4	54	8
5	45	6.7
6	25	3.7
7	23	3.4
8	24	3.6
9	19	2.8
10	7	1
合計	675	100

V3：年代

	度数	パーセント
20歳代	50	7.4
30歳代	115	17
40歳代	252	37.3
40歳代	223	33
60歳以上	5	0.7
欠損値	35	5.1
合計	675	100

V6：役職

	度数	パーセント
校長	50	7.4
教頭	53	7.9
教諭	416	61.6
養護教諭	51	7.6
栄養職員	4	0.6
栄養教諭	3	0.4
その他	43	6.4
欠損値	55	8.1
合計	675	100

V8：最近、学校に協力的でない家庭が多いと思う

	度数	パーセント
とてもそう思う	18	2.7
そう思う	231	34.2
あまり思わない	393	58.2
全く思わない	25	3.7
欠損値	8	1.2
合計	675	100

V9：自分の子どもの頃と比較して、子どもたちの道徳心や公共心が薄れていると思う

	度数	パーセント
とてもそう思う	55	8.1
そう思う	422	62.5
あまり思わない	183	27.1
全く思わない	4	0.6
欠損値	11	1.6
合計	675	100

V11：勤務校は、学校の行事などの情報を地域へよく伝えている

	度数	パーセント
とてもそう思う	169	25
そう思う	465	68.9
あまり思わない	33	4.9
全く思わない	2	0.3
欠損値	6	0.9
合計	675	100

V13：学校支援を受け入れていますか

	度数	パーセント
受入れている	492	72.9
受入れてない	130	19.3
欠損値	53	7.9
合計	675	100

V10：最近の子どもたちは学習意欲が低下していると思う

	度数	パーセント
とてもそう思う	38	5.6
そう思う	292	43.3
あまり思わない	328	48.6
全く思わない	5	0.7
欠損値	12	1.8
合計	675	100

V16：勤務校にとって、地域住民によるボランティア活動は必要であると思う

	度数	パーセント
とてもそう思う	78	11.6
そう思う	461	68.3
あまり思わない	129	19.1
全く思わない	1	0.1
欠損値	6	0.9
合計	675	100

### 学校支援ボランティアを受け入れている方にお聞きます(V14~V26)

☆ボランティアの発掘・依頼はどんな方法でしたか。

V14：ほとんど教職員がした

	度数	パーセント
一	286	42.4
はい	206	30.5
欠損値	183	27.1
合計	675	100

V16：コーディネーターが主体で教職員もしました

	度数	パーセント
一	397	58.8
はい	96	14.2
欠損値	182	27
合計	675	100

V18：その他

	度数	パーセント
一	472	69.9
はい	21	3.1
欠損値	182	27
合計	675	100

V15：教職員が主体でコーディネーターにもお願いしました

	度数	パーセント
一	365	54.1
はい	128	19
欠損値	182	27
合計	675	100

V17：ほとんどコーディネーターがしました

	度数	パーセント
一	465	68.9
はい	28	4.1
欠損値	182	27
合計	675	100

☆1学期の授業で、どのような方法・内容で学習支援を受入ましたか。

V19：ゲストティーチャーとして1～3回

	度数	パーセント
—	365	54.1
はい	128	19
欠損値	182	27
合計	675	100

V21：ゲストティーチャーとして7回以上

	度数	パーセント
—	477	70.7
はい	16	2.4
欠損値	182	27
合計	675	100

V23：学習サポーターとして4～6回

	度数	パーセント
—	478	70.8
はい	15	2.2
欠損値	182	27
合計	675	100

V25：教科への受入はしなかった

	度数	パーセント
—	381	56.4
はい	112	16.6
欠損値	182	27
合計	675	100

☆授業の年間計画で、どのような方法・内容で学習支援を受入れる計画がありますか。

V27：ゲストティーチャーとして1～3回

	度数	パーセント
—	553	81.9
はい	122	18.1
合計	675	100

V29：ゲストティーチャーとして7回以上

	度数	パーセント
—	655	97
はい	20	3
合計	675	100

V31：学習サポーターとして4～6回

	度数	パーセント
—	658	97.5
はい	17	2.5
合計	675	100

V33：教科への受入計画は無い

	度数	パーセント
—	575	85.2
はい	100	14.8
合計	675	100

V20：ゲストティーチャーとして4～6回

	度数	パーセント
—	464	68.7
はい	29	4.3
欠損値	182	27
合計	675	100

V22：学習サポーターとして1～3回

	度数	パーセント
—	450	66.7
はい	43	6.4
欠損値	182	27
合計	675	100

V24：学習サポーターとして7回以上

	度数	パーセント
—	471	69.8
はい	22	3.3
欠損値	182	27
合計	675	100

V26：その他

	度数	パーセント
—	454	67.3
はい	39	5.8
欠損値	182	27
合計	675	100

V28：ゲストティーチャーとして4～6回

	度数	パーセント
—	639	94.7
はい	36	5.3
合計	675	100

V30：学習サポーターとして1～3回

	度数	パーセント
—	629	93.2
はい	46	6.8
合計	675	100

V32：学習サポーターとして7回以上

	度数	パーセント
—	654	96.9
はい	21	3.1
合計	675	100

V34：その他

	度数	パーセント
—	663	98.2
はい	12	1.8
合計	675	100

☆学校支援の成果として期待されることは何ですか。

V35：児童生徒の学校内活動での関心・意欲・態度の向上

	度数	パーセント
一	177	26.2
はい	330	48.9
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V37：児童生徒の基本的な生活習慣の向上

	度数	パーセント
一	454	67.3
はい	53	7.9
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V39：学校の花壇や校舎等の環境の充実

	度数	パーセント
一	344	51
はい	163	24.1
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V41：学校全体の地域住民との協力・連携

	度数	パーセント
一	139	20.6
はい	368	54.5
欠損値	168	24.9
合計	675	100

☆どのような学校支援をしてもらうのが望ましいですか。(2つまで)

V43：クラブ活動・部活動の指導

	度数	パーセント
一	545	80.7
はい	130	19.3
合計	675	100

V45：読み聞かせ、図書資料（蔵書）の補修・整理などの図書館活動

	度数	パーセント
一	427	63.3
はい	248	36.7
合計	675	100

V47：ドリルの採点、放課後の補習、家庭科・体育等の実習補助

	度数	パーセント
一	634	93.9
はい	41	6.1
合計	675	100

V49：パソコンの管理やホームページ作成

	度数	パーセント
一	657	97.3
はい	18	2.7
合計	675	100

V36：児童生徒の授業における理解力・集中力の向上

	度数	パーセント
一	335	49.6
はい	172	25.5
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V38：児童生徒の休み時間の過ごし方の向上

	度数	パーセント
一	494	73.2
はい	13	1.9
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V40：教職員のゆとりの時間の確保

	度数	パーセント
一	475	70.4
はい	32	4.7
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V42：その他

	度数	パーセント
一	483	71.6
はい	24	3.6
欠損値	168	24.9
合計	675	100

V44：特別な支援が必要な子どもの指導補助

	度数	パーセント
一	626	92.7
はい	49	7.3
合計	675	100

V46：ゲストティーチャーとしての総合的な学習の時間等の活動

	度数	パーセント
一	275	40.7
はい	400	59.3
合計	675	100

V48：授業で使用する教材や教具の作成

	度数	パーセント
一	662	98.1
はい	13	1.9
合計	675	100

V50：登下校時における安全パトロール

	度数	パーセント
一	363	53.8
はい	312	46.2
合計	675	100

V51：花壇の整備・校舎の補修や清掃

	度数	パーセント
—	523	77.5
はい	152	22.5
合計	675	100

☆地域住民によるボランティア活動が「必要ない」という意見もありますが、どのような理由からだと思いませんか。(2つまで)

V53：学校の教育活動は教職員が責任を持つべきである

	度数	パーセント
—	590	87.4
はい	85	12.6
合計	675	100

V55：日程等に左右され、学校の活動に支障ができる

	度数	パーセント
—	540	80
はい	135	20
合計	675	100

V57：事故責任の所在が不明確である

	度数	パーセント
—	488	72.3
はい	187	27.7
合計	675	100

V59：その他

	度数	パーセント
—	660	97.8
はい	15	2.2
合計	675	100

☆地域住民が学校へのボランティア活動をするために、行政にして欲しいことは何ですか。(2つまで)

V60：コーディネーターの配置

	度数	パーセント
—	434	64.2
はい	241	35.7
合計	675	100

V62：活動に必要な予算の確保

	度数	パーセント
—	200	29.6
はい	475	70.4
合計	675	100

V64：教員対象の研修会の実施

	度数	パーセント
—	659	97.6
はい	16	2.4
合計	675	100

V52：その他

	度数	パーセント
—	670	99.3
はい	5	0.7
合計	675	100

V54：資料の作成や打ち合わせ等の仕事量が増加して多忙になる

	度数	パーセント
—	390	57.8
はい	285	42.2
合計	675	100

V56：守るべき個人情報・学校の内部情報の保守が心配である

	度数	パーセント
—	419	62.1
はい	256	37.9
合計	675	100

V58：予算が十分に確保されていない

	度数	パーセント
—	505	74.8
はい	170	25.2
合計	675	100

V61：手引きや事例集等の作成・発行

	度数	パーセント
—	617	91.4
はい	58	8.6
合計	675	100

V63：ボランティア対象の研修会の実施

	度数	パーセント
—	595	89
はい	80	11.9
合計	675	100

V65：地域住民への啓発・広報の充実

	度数	パーセント
—	558	82.7
はい	117	17.3
合計	675	100

V66：ボランティアの人たちの活動拠点  
(室)などの整備

	度数	パーセント
一	530	78.5
はい	145	21.5
合計	675	100

V67：その他

	度数	パーセント
一	660	97.8
はい	15	2.2
合計	675	100

☆地域住民が学校へのボランティア活動をするために学校は何をしたらいいと思いますか。(2つまで)

V68：学校が必要としているボランティアの内容を地域に発信すること

	度数	パーセント
一	216	32
はい	459	68
合計	675	100

V70：ボランティアの控室を確保すること

	度数	パーセント
一	622	92.1
はい	53	7.9
合計	675	100

V72：学校（教員）と地域住民・保護者の交流の機会をつくること

	度数	パーセント
一	579	85.8
はい	96	14.2
合計	675	100

V74：その他

	度数	パーセント
一	664	98.4
はい	11	1.6
合計	675	100

V69：学校におけるボランティア活動の状況を地域へ発信すること

	度数	パーセント
一	523	77.5
はい	152	22.5
合計	675	100

V71：地域のボランティアセンターや公民館、自治会などと連携すること

	度数	パーセント
一	460	68.1
はい	215	31.9
合計	675	100

V73：学校経営に位置づけて、学校全体としての取り組みを行うこと

	度数	パーセント
一	560	83
はい	115	17
合計	675	100

### 3-地域住民(保護者)の集計結果

V1：市町村

	度数	パーセント
中津市	159	5.3
豊後高田市	135	4.5
宇佐市	162	5.4
別府市	163	5.5
杵築市	960	32.3
国東市	98	3.3
姫島村	114	3.8
日出町	90	3
津久見市	261	8.8
由布市	117	3.9
佐伯市	154	5.2
竹田市	206	6.9
日田市	131	4.4
九重町	99	3.3
玖珠町	125	4.2
欠損値	1	0
合計	2975	100

V4：居住年数

	度数	パーセント
1年未満	77	2.6
1年～3年	163	5.5
3年～5年	204	6.9
5年～10年	562	18.9
10年～20年	1079	36.3
20年以上	844	28.4
欠損値	46	1.5
合計	2975	100

V6：自分が住んでいる地域では、大人が積極的に子どもに関わっている

	度数	パーセント
とてもそう思う	177	5.9
そう思う	1286	43.2
あまり思わない	1348	45.3
全く思わない	129	4.3
欠損値	35	1.2
合計	2975	100

V8：最近、自分が住んでいる地域では、大人同士が挨拶をよく交わしている

	度数	パーセント
とてもそう思う	468	15.7
そう思う	1803	60.6
あまり思わない	640	21.5
全く思わない	45	1.5
欠損値	19	0.6
合計	2975	100

V2：性別

	度数	パーセント
男	456	15.3
女	2315	77.8
欠損値	204	6.9
合計	2975	100

V3：年代

	度数	パーセント
20歳代	37	1.2
30歳代	944	31.7
40歳代	1368	46
50歳代	209	7
60歳以上	363	12.2
欠損値	54	1.8
合計	2975	100

V5：通学する子どもの有無

	度数	パーセント
有	2442	82.1
無	468	15.7
欠損値	65	2.1
合計	2975	100

V7：自分が住んでいる地域では、地域の人たち同士の交流は盛んである

	度数	パーセント
とてもそう思う	189	6.4
そう思う	1223	41.1
あまり思わない	1395	46.9
全く思わない	142	4.8
欠損値	26	0.9
合計	2975	100

V9：最近、自分が住んでいる地域が、安全でなくなっている

	度数	パーセント
とてもそう思う	171	5.7
そう思う	1015	34.1
あまり思わない	1585	53.3
全く思わない	174	5.8
欠損値	30	1
合計	2975	100

V10：最近、学校に協力的でない家庭が多い

	度数	パーセント
とてもそう思う	212	7.1
そう思う	1088	36.6
あまり思わない	1551	52.1
全く思わない	84	2.8
欠損値	40	1.3
合計	2975	100

V12：最近、子どもたちの学習意欲が低下している

	度数	パーセント
とてもそう思う	400	13.4
そう思う	1518	51
あまり思わない	908	30.5
全く思わない	29	1
欠損値	120	4
合計	2975	100

V14：最近、子どもたちは地域の行事等に参加する

	度数	パーセント
とてもそう思う	129	4.3
そう思う	1176	39.5
あまり思わない	1423	47.8
全く思わない	126	4.2
欠損値	121	4.1
合計	2975	100

V16：地域の学校に関心がある

	度数	パーセント
とてもそう思う	487	16.4
そう思う	1911	64.2
あまり思わない	430	14.5
全く思わない	37	1.2
欠損値	110	3.7
合計	2975	100

V11：最近、子どもたちの道徳心や公共心が薄れている

	度数	パーセント
とてもそう思う	376	12.6
そう思う	1559	52.4
あまり思わない	983	33
全く思わない	30	1
欠損値	27	0.9
合計	2975	100

V13：最近、子どもたちは地域の人たちに挨拶等をする

	度数	パーセント
とてもそう思う	167	5.6
そう思う	1163	39.1
あまり思わない	1445	48.6
全く思わない	114	3.8
欠損値	86	2.9
合計	2975	100

V15：最近、学校の行事などの情報がよく伝わってきてている

	度数	パーセント
とてもそう思う	258	8.7
そう思う	1788	60.1
あまり思わない	779	26.2
全く思わない	50	1.7
欠損値	100	3.4
合計	2975	100

V17：あなたは、今まで学校に対するボランティア活動に参加したことがあり

	度数	パーセント
有	1735	58.3
無	1096	36.8
欠損値	144	4.8
合計	2975	100

## 学校でのボランティア経験のあるかたにお聞きします(V18~V43)

☆どんな活動に参加しましたか。(すべて選ぶ)

V18：クラブ活動・部活動の指導

	度数	パーセント
一	1569	52.7
はい	167	5.6
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V19：特別支援が必要な子供の指導補助

	度数	パーセント
一	1695	57
はい	41	1.4
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V20：読み聞かせ、図書資料（蔵書）の補修・整理などの図書館活動

	度数	パーセント
一	1480	49.7
はい	257	8.6
欠損値	1238	41.6
合計	2975	100

V22：ドリルの採点、放課後の補習、家庭科・体育等の実習補助

	度数	パーセント
一	1649	55.4
はい	87	2.9
欠損値	1240	41.7
合計	2975	100

V24：パソコンの管理やホームページ作成

	度数	パーセント
一	1730	58.2
はい	6	0.2
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V26：花壇の整備・校舎の補修や清掃

	度数	パーセント
一	1044	35.1
はい	692	23.3
欠損値	1736	58.4
合計	1239	41.6
	2975	100

☆活動に参加した理由はどのようなことですか。(2つまで)

V28：学校の教育活動に協力したい

	度数	パーセント
一	1144	38.5
はい	589	19.8
欠損値	1733	58.3
合計	1242	41.7
	2975	100

V30：地域のためになる

	度数	パーセント
一	1485	49.9
はい	248	8.3
欠損値	1242	41.7
合計	2975	100

V32：学校での子どもの様子を知りたい

	度数	パーセント
一	1328	44.6
はい	404	13.6
欠損値	1243	41.8
合計	2975	100

V21：ゲストティーチャー（講師）としての総合的な学習の時間等の活動

	度数	パーセント
一	1611	54.2
はい	125	4.2
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V23：授業で使用する教材や教具の作成

	度数	パーセント
一	1697	57
はい	39	1.3
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V25：登下校時における安全パトロール

	度数	パーセント
一	677	22.8
はい	1059	35.6
欠損値	1239	41.6
合計	2975	100

V27：その他

	度数	パーセント
一	1555	52.3
はい	181	6.1
欠損値	1736	58.4
合計	1239	41.6
	2975	100

V29：子どもが学校に通学している

	度数	パーセント
一	485	16.3
はい	1247	41.9
欠損値	1244	41.8
合計	2975	100

V31：自分の知識・技能を生かしたい

	度数	パーセント
一	1658	55.7
はい	75	2.5
欠損値	1242	41.7
合計	2975	100

V33：自分の生きがいになる

	度数	パーセント
一	1645	55.3
はい	88	3
欠損値	1242	41.7
合計	2975	100

V34：その他

	度数	パーセント
—	1661	55.8
はい	72	2.4
欠損値	1242	41.7
合計	2975	100

☆活動に参加して、自分にどのような変化がありましたか。(すべて選ぶ)

V35：生活に張り合いが出てきた

	度数	パーセント
—	1632	54.9
はい	111	3.7
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V37：人と知り合う機会が増えた

	度数	パーセント
—	972	32.7
はい	771	25.9
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V39：いろいろなことを学んでみようと思うようになった

	度数	パーセント
—	1625	54.6
はい	118	4
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V41：学校以外にも、地域のために何かやってみたいと考えるようになった

	度数	パーセント
—	1604	53.9
はい	139	4.7
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V43：その他

	度数	パーセント
—	1718	57.7
はい	23	0.8
欠損値	1234	41.5
合計	2975	100

V45：あなたは、今後、学校へのボランティア活動をしたいと思いませんか。

	度数	パーセント
とてもそう思う	193	6.5
そう思う	1743	58.6
あまり思わない	793	26.7
全く思わない	88	3
欠損値	158	5.3
合計	2975	100

V36：地域の子どもに関心が深まった

	度数	パーセント
—	1207	40.6
はい	536	18
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V38：学校や子どもの様子がわかつてきました

	度数	パーセント
—	862	29
はい	881	29.6
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V40：周囲の人と学校の話題を話すようになりました

	度数	パーセント
—	1401	47.1
はい	342	11.5
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V42：あまり変化はない

	度数	パーセント
—	1468	49.3
はい	275	9.2
欠損値	1232	41.4
合計	2975	100

V44：学校支援を積極的におこなう必要がある

	度数	パーセント
とてもそう思う	461	15.5
そう思う	1822	61.2
あまり思わない	535	18
全く思わない	18	0.6
欠損値	139	4.7
合計	2975	100

☆あなたが今後、ボランティア活動に参加するとなればどんな活動に参加したいですか。(2つまで)

V46：クラブ活動・部活動の指導

	度数	パーセント
—	2507	84.3
はい	279	9.4
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V48：読み聞かせ、図書資料（蔵書）の補修・整理などの図書館活動

	度数	パーセント
—	2283	76.7
はい	503	16.9
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V50：ドリルの採点、放課後の補習、家庭科・体育等の実習補助

	度数	パーセント
—	2501	84.1
はい	285	9.6
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V52：パソコン管理やホームページ作成

	度数	パーセント
—	2714	91.2
はい	72	2.4
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V54：花壇の整備・校舎の補修や清掃

	度数	パーセント
—	1914	64.3
はい	872	29.3
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

☆地域住民が学校へのボランティア活動をするために、行政にしてほしい事は何ですか。(2つまで)

V56：コーディネーターの配置

	度数	パーセント
—	2117	71.2
はい	852	28.6
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V58：活動に必要な予算の確保

	度数	パーセント
—	1869	62.8
はい	1100	37
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V47：特別支援が必要な子供の指導補助

	度数	パーセント
—	2559	86
はい	226	7.6
欠損値	190	6.4
合計	2975	100

V49：ゲストティーチャー（講師）としての総合的な学習の時間等の活動

	度数	パーセント
—	2637	88.6
はい	149	5
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V51：授業で使用する教材や教具の作成

	度数	パーセント
—	2582	86.8
はい	204	6.9
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V53：登下校時における安全パトロール

	度数	パーセント
—	1399	47
はい	1387	46.6
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V55：その他

	度数	パーセント
—	2712	91.2
はい	74	2.5
欠損値	189	6.4
合計	2975	100

V57：手引きや事例集等の作成・発行

	度数	パーセント
—	2685	90.3
はい	284	9.5
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V59：ボランティア対象の研修会の実施

	度数	パーセント
—	2589	87
はい	380	12.8
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V60：教員対象の研修会の実施

	度数	パーセント
—	2752	92.5
はい	217	7.3
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V62：ボランティアの人たちの活動拠点

	度数	パーセント
—	2511	84.4
はい	458	15.4
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

☆地域住民が学校へのボランティア活動をするために、学校にして欲しいことは何ですか。(2つまで)

V64：学校が必要としているボランティアの内容を地域に発信すること

	度数	パーセント
—	978	32.9
はい	1991	66.9
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V66：ボランティアの控室を確保すること

	度数	パーセント
—	2888	97.1
はい	81	2.7
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V68：学校（教員）と地域住民・保護者の交流の機会をつくること

	度数	パーセント
—	2168	72.9
はい	801	26.9
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V70：その他

	度数	パーセント
—	2940	98.8
はい	29	1
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V61：地域住民への啓発・広報の充実

	度数	パーセント
—	2026	68.1
はい	943	31.7
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V63：その他

	度数	パーセント
—	2926	98.4
はい	43	1.4
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V65：学校におけるボランティア活動の状況を地域へ発信すること

	度数	パーセント
—	2197	73.8
はい	771	25.9
欠損値	7	0.2
合計	2975	100

V67：地域のボランティアセンターや公民館、自治会などと連携すること

	度数	パーセント
—	2470	83
はい	499	16.8
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

V69：学校経営に位置づけて、学校全体としての取り組みを行うこと

	度数	パーセント
—	2546	85.6
はい	423	14.2
欠損値	6	0.2
合計	2975	100

## －研究者－

協力者 山崎清男（大分大学教育福祉科学部 教授）

深尾 誠（大分大学経済学部 教授）

矢野 修（大分県教育庁社会教育課 社会教育主事）

担当者 中川忠宣（大分大学高等教育開発センター 教授）

家庭、学校、地域社会の「協育」ネットワーク構築の推進に関する調査報告

～大分県における「学校支援地域本部事業」に係る意識調査から～

発行 平成 22 年 3 月

編集 大分大学高等教育開発センター

〒 870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax (097) 554-8509・7641

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>